
鏡の中の天使

相生瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中の天使

【Nコード】

N38550

【作者名】

相生瞳

【あらすじ】

悪魔に脅かされ、天使に救われた世界。天使を擁するテニエスは強国となり、周辺国家を支配下に置きつつあった。

聖歴二六年の夏、主人公は避暑地にある男爵家の別荘に通いはじめる。表向きは少女の家庭教師として。だが実は、毎夏この別荘を訪れるという男爵家の長男、スヴェンの不正を暴くために送り込まれたのである。

悪戦苦闘しながら慣れない「先生」を演じる主人公は次第に、謎の多い生徒「アディナ」に親しみを感じるようになる。自分の本当

の役割も知らずに――

序 『外つ国訪問記』

「父さんはここで死んだんだって」

彼は相変わらぬ無表情でした。私は思わず辺りを見回しました。聖なる白で敷き詰められた広場はひっそりと息を詰めていて、わずかな風に揺れる木々も音をたてることを遠慮しているようでした。

「神父だったんだ。占領軍に逆らって、村で聖休日の礼拝を続けてた。それで、捕まって……」

この広場が公開処刑の地だったことを、私はその時まで知らなかったのです。突然、美しく整えられたその場が血なまぐさい臭いに包まれたように感じて、ぞっと身震いをしました。ここで何百人という旧教の信者たちが殺され、そして、彼の父親も。

「うち、母さんがよそに男ができて、出てってさ。父さんが連行されたら、オレと妹の二人だけが残される。それがわかってたのに、父さんは最後までずっと信じて、神様を信じて……、ウソもつかなかった。もう信じないってそう言うだけで、助かったかもしれないのに」

おばさんならどうする？

私には答えられませんでした。子どもを持ったことがなく、また、信仰を捨てよと迫られたこともなかったのですから。

「オレと妹は結局、父さんにも母さんにも、捨てられたんだ。母さんが出てったときは父さんが可哀相だと思った。母さんを許せないと思った。だけど、一緒だよ。父さんも神様を選んで、オレたちをおいてった。よその男の人を選んだ、母さんと同じ、なんだ」

「その、妹は？ 今はどうしてるの？」

少年は笑いました。けれどそれは奇妙にひきつった、ジャイヌ悪魔の仮面のようにも見えました。

「オレがどこから来たと思う？ カレーラだよ」

カレーラと聞いて、私はさらに彼に興味を抱きました。

普段から新聞を隅々まで読む習慣のない人は知らないかもしれないので、一応説明しておきましょう。中には読んだけれどもう記憶にないという読者もいるかもしれません。

それは聖歴二三年、夏の終わりに起こった悲劇でした。

アリアーガ中部にある農村、カレーラで、村人が次々に倒れ、命を失うという事件が起こったのです。原因は未だ以て不明ですが、伝染病であろうということになっています。村人のほとんどが犠牲になり、助かった者は指で数えられるほどで、波及を防ぐために村は焼かれました。前例のない病だったので、これをカレーラ病と呼ぶことになったのです。

「オレがカレーラから来たって聞いて、逃げ出さなかったのはおばさんが初めてだよ」

そう言いながらも、あまり意外そうには見えず、彼は淡々としていました。

けれど、なにも感じていないかのように落ち着いて天使の像シャイラを見上げるその瞳の奥には、どれほどの痛みが秘められていたでしょう。「だって、半年ほども前のことでしょう。カレーラ病はいったんかかったら二、三日で死ぬって聞くわ」

だからこの少年から感染しないことは明らかです。

「うん。そうらしいね」

まるで他人事のような言葉でした。

「あなたは」

「運が良かったのかな。カタリーナが倒れて、医者呼びに行こうと思って……そのための金が足りなかった。借りようと思ったけど、捕まった。帰った時にはもう、村は焼かれてたよ」

妹の名でしょうか。それを口にした時だけ、彼の表情がわずかに歪んだように、私には思えました。

り
抜
粹

第1話 七月 三青の日（1）

履き慣れた靴を履いて、歩き慣れない道を歩く。

けれどそのうちこの道にも慣れるはずだった。これからしばらく、聖休日以外は毎日通ることになるのだから。そういえば——具体的にいつまで、というのは聞かなかった。ただ、夏の間としか。これは後で確かめなければいけない。

ともかく今は初めてのこの道を、私は歩く。片手には一応、詳しい場所の記されたメモを持っていたが、すでに目を落とすことすらしていない。なぜって、どうしようもなく一本道だったからだ。

無意味なメモの代わりに私は景色を楽しんだ。樅の林の風は心地よく、日の光さえ緑に染まっている。目の前に飛びだしたウサギを視線だけで追いかけると、ちょうど紫の花が集まって咲いているところに入ってしまった。近づいたらなんの花か判るだろうけれど、あいにく寄り道をしている余裕はない。初日に遅刻なんて、するわけにはいかないのだ。

ペチコートが太ももにまとわりついてざわざわするのを我慢しながら歩き続けると、やがて林を抜けた。山を背にした赤い屋根の建物が見える。あれだ。ゆるやかな坂をのぼって、ようやくたどりついた門をくぐる。郵便受けには、フライヘル・フォン・ボルマンとあった。間違いない。

屋敷の扉を前にして、私は深呼吸をした。目を閉じて、一度、二度。けれどその程度のことでは鼓動は静まらなかった。

とく、とく、自分の心臓の音を聴く。

決してあの程度の距離で歩き疲れたなんて事はない。そう、要するに私は緊張しているのだ。このまま現実を遮断しているわけにもいけないので、目を開けて辺りを見回す。広いアプローチは色違いのタイルが規則的に並べられており、見た目にも美しい。通路の両端には樹木が植えられていて、ちょうどいい日陰になってくれてい

た。

じわりと汗がにじむのは、夏の陽気のせいだけではない。もう一度深く息を吸い込んでみたが、どうにも心をなだめることはできそうになかった。

ただ立ちつくしているだけなんて、広場で祈りを捧げられるだけの天使像みたいじゃないか。私はそんな意味のない存在ではなく、自分で考えて、動くことのできる人間だ。だから、だから呼び鈴を鳴らさなくては。

扉に一步近づき、それから思い直してハンドバッグに手を伸ばす。探り出したコンパクトを開けて――情けないことに手が震えて、少し手間取ってしまったが――私は鏡の中を覗き込んだ。うつすらと化粧を施した、不安そうな少女の顔。ああ、いやだ。

落ち着いて、カトリーネ。

コンパクトを近づけ、眉も紅も整っていてどこもおかしくないことを確認する。大丈夫。どこから見ても、「これ」は良家のご令嬢だ。

ひとつ息を吐くと、私は丁寧に蓋を閉め、コンパクトを元通りにしまった。

いまさらじたばたしたって、どうにもならない。気持ちで負けてしまつては失敗する可能性が高くなる。胸を張っていくしかないのだ。

私は呼び鈴に手を伸ばした。思ったよりも澄んだいい音がした。笑顔で挨拶をして、屋敷の人に気に入られなくてはいけない。いい印象を与えて、せいぜい休憩に美味しいお茶と、そしてできればお菓子を出してもらえるようにしなくてはいけない。そんな余計なことを考えながら待ったが、返事はなかった。

「……？」

どうして誰も出ないんだ。

念のため、もう一度紐を引いた。残響が消えると、あとは鶏の鳴き声くらいしか聞こえてこなかった。たぶん、家畜小屋で飼われて

いるんだろう。いや、今はそんなことはどうでもいい。

人がわざわざこんな辺鄙な場所まで歩いてきたというのに、指定時刻の少し前という模範的な到着の仕方をしたというのに、一体どういう事だろうか。時間を勘違いしたなんてことはないはずだ。記憶力には自信がある。貼り付けておいた笑顔を溜め息と一緒に放り出し、私は黙ったままの扉をにらみつけてこぶしを作った。

力任せに叩きたい気分だったが、そこはぐっとこらえながら細かく三度ノックをして、大きく息を吸い込む。

「あのう。ご紹介いただいて参りました、カトリーネ・エルス・マクシウスです」

いまましい扉は沈黙しか返さなかった。

まさか間違ってはいまい。一本道だったし、郵便受けの名前も確認したし、確かにここはボルマン男爵所有の別荘のはずだ。

「すみません。いらっしやいませんか？」

少し間をおいてから再びノックをし、声を張り上げたが、反応がない。

首筋を汗が伝ってきて気持ちが悪かった。やはりここはこの無愛想な扉を蹴りつけてやるべきだろうか。そう思った瞬間、哀れな犠牲者となるはずだった扉が怯えたような音をたてて開いた。

「マクシウス様ですね？ ようこそおいでくださいました」

顔を見せたのは、グレイの髪をした上品そうな老女だった。

「遅くなってしまうって申し訳ありません。どうも最近、聞こえが悪くて……」

「ああ、いえ。お気になさらないでくださいな」

急いで笑顔を作りながら、私は帽子を外すために首元のリボンをほどいた。

「私、このお屋敷の管理を任されております、ダニエラ・フローエと申します。お嬢様がお待ちになってますから、どうぞこちらへ」
礼を言って邸内に入ると空気が涼しく、呼吸も楽になったような気がした。ダニエラはひどくゆっくり歩く。そして、話す速度もや

はり遅かった。

「本当に、かわいらしい娘さんだこと。評判通りのようで、安心してました」

紹介状を確かめることもしないなんて、私が二世者だったらどうするのだろう。

「まあ、どんなことをお聞きになっているのかしら。恥ずかしいですわ」

むずがゆい気持ちを抑えて答える。訊きたいことは山ほどあったが、さて、どこに通されるものやら。こちらの心配をよそに、ダニエラはなかなか本題に入ろうとしてくれない。ただでさえ、ゆるゆる話すのに。

「とんでもない。皆さん褒めていらっしやいましたよ。フィリーネ女学院も歴史は古いですけど、これほどお若くいらっしやって——おいくつでしたかしらねえ」

「十三です」

帽子を手に持ったまま、先導されてホールを抜け、階段を上る。

外から見たときは古い建物だと思ったが、中はかなり整えられていて綺麗だ。

「そうそう、そうでした。特例で入学が許されることはまあありますけれど、最年少だったのですって？　しかも抜群の成績でいらっしやるとか。まあ、まったく、すばらしい才能をお持ちですのねえ」

曖昧に微笑みながら、これまで何度聞かされたかしのない贅辞を受け止める。確かに私は周りの女生徒よりはるかに年下だし、首席も獲ったが、学院で学ばされることはそれほど難しい内容ではないのだ。こんな風に言われるとむずがゆい。

「あの、フローエさん。それより、お仕事のことなんですけど」

「ええ。なんででしょう？」

耳が遠いとのことなので、できるだけはっきりと発声するように心がけながら訊く。

「カペル夫人からご紹介いた দিয়ে、すぐに準備をしましたけど、

肝心なことを聞き忘れていましたの。私の教えることになる生徒の名前は、何というんですの？」

「アディナ様と。九つになられたばかりです」

「アディナ……様」

変わった響きの名前。家名は何だろうか。それとなく尋ねようとした時、階段を上り終わってしまい、白いワンピースを着た婦人がひとり立っているのが見えた。

「お嬢様、先生がいらっしゃいました」

「ええ、そうですね」

彼女は進み出て、丁寧に挨拶をした。

「はじめまして。わたしはユーリエ・ボルマン。カトリーネさんね？」

「はい。お初にお目にかかります」

私は軽く頭を下げた後、彼女を観察した。

ユーリエは今年で三十六になると資料に書いてあったが、とてもそうは見えない。きっとあまり苦勞をしていないからだろう。行きすぎない薄化粧の顔は三十前と言われたって驚かないし、肌は白く手は柔らかそうで、太ってはいないが健康的な丸みをおびた体をしていた。

「お願いするのは、さる方からお預かりしている大切な娘さんです。くれぐれも失礼のないようにしてください」

声は顔つきと同じように穏やかで、少し低めだ。私は心得ましたと答えながら、やはり子どももの素性に関しては本人の方にそれとなく訊き出すしかあるまいと考えていた。

「今までは他の先生に来ていただいていたのですけど、年の近い方のほうがアディナ様のためにはいいと思いましたの。退屈していらつしやいますから、仲良くしてさしあげてくださいね。……それから、あの……」

灰色の瞳を泳がせて、ユーリエは言いよんだ。

「田舎というのは、噂が変にこじれて広まってしまいうことも少なく

ないと聞きます。ですから」

「わかっております。ここで見聞きしたこと、軽々しく話したりはいたしません」

学院で先生に向かってするような優等生の顔で応じると、ユーリエはほっと息をついて微笑み、後をお願いするわとダニエラに言い置いて部屋に引っ込んだ。貴族の割にあまり偉そうなところのない人だな。服も地味だし。変わってる。

第2話 七の月 三青の日（2）

こちらです、と、ようやく案内されたのは、廊下の突き当たり、屋敷の一番南に位置する部屋だった。

ダニエラがノックをして声を上げる。

「アディナ様、アディナ様。先生がいらっしゃいましたよ」

「待つて。開けないで。少しだけ！」

よく響く高い声が返った。しばらくどたばたと音がしていたかと思つと静かになり、やがて「いいわ」と声がかかった。ダニエラがノブを回す。

まっさきに視界に飛び込んできたのは子どもの群れだった。一瞬ぎよつとして体を硬くしてしまつたほどだ。いや、よく見ればそれは精巧な人形だったのだが、目にガラス玉を嵌められ、ふんだんにレースの使われた色とりどりのドレスをまとつた人形が、床はもちろん棚やら机の上にまでぞろりと座つていては、かわいいとか綺麗だとか感じるより先に気持ち悪いと思つてしまう。それどころか、十数体はありそうな人形たちの中で一番大きいのがまばたきして笑つたので、一步どころか三步ほど後じさるところだった。

いや、待つて。人形が笑うわけあるか。落ち着け。やっぱりこれは子どもだ。

一番大きな人形——否、アディナ様とやらは、部屋に置かれたどの人形よりも美しかった。眉は短く、くるつとした瞳は青玉の輝きを放つていて、長いまつげがいっそう目の全体を大きく見せている。肌はひたすら白く、かといって血色が悪いのかというとそれほどもなく、唇なんかなにも塗つてなくせにアーモンドのつぼみみたいに綺麗なピンクだ。レースのリボンでまとめられた金の髪は綿毛のようにふわりと浮かび上がろうとしていて、実際彼女が動くにつられて揺れた。しやらしやら音がしないのが不思議なくらいに。

「はじめまして、アディナです」

彼女が目の前に立った。

わあ、かわいい。とりあえずまとめて手放しでそう思ってしまった。完全に負けてる。やっぱり本物は違うな——いや、学院にだってこんなとびきりのお嬢さんはいなかったけど。

ダニエラの視線を感じる。しまった、ここは私が挨拶を返すところだ。

「こんにちは、お嬢さん。カトリーネ・エルス・マクシウスです」
「ふうん……」

青玉の瞳がきらきらとこちらを見上げてくる。彼女の背丈はだいたい私の胸の辺りといったところだ。

「あなたはいくつ？」

「じ、十三になります」

「そう。じゃあ四つ違うのね。あたしは九歳よ」

計算できるんですねとか言うのも失礼な気がして返す言葉がなかった。そうか、四つ下。九歳というのはちょうどこのくらいなのか。ねえ、ダニエラ。ほんとにこの人が新しい先生なの？」

やっと彼女の凝視から解放されて、溜まっていた息を吐き出す。なんだかどつと疲れた。

「ええ、とても優秀な方なんですよ。フィリーネ女学院の首席でいらつしゃって」

「その話はもう聞いたわ」

金の髪をふわっと揺らして、彼女がまた私を見る。

「それじゃあ、よろしくね。カリンと呼んでもいい？」

「あ、はい。もちろんです」

「それで、あたしのことは、アディナと呼んでね」

「はい、アディナ様」

「……では、わたくしはお茶の準備をして参りますので、これで失礼いたします。アディナ様のこと、よろしく願います、マクシウス様」

ダニエラが行ってしまうと、アディナは私の手を引いて室内へ導

き、扉を閉めた。

そのまま椅子に座るのかと思えば——ひとつの机に二つの椅子が向かい合わせに準備されており、いかにもここで教えるのだなという感じだったので——彼女は机を迂回して窓際まで突き進んだ。

「紹介するわ。あたしのお友達、ウィーダよ」

人形の山に気を取られて気づかなかったのだが、そこには金色のワイヤーでできた鳥籠が吊してあり、中には彼女の目の色によく似た翼を持つ鳥が一羽、すまして立っていた。

差し入れられた指を、鳥は白いくちばしでつまみ、親指で撫でた。しそくに笑って、その鳥のくちばしをつまみ、親指で撫でた。

よく見れば、部屋のあちこちに羽が落ちている。さっき戸を開ける前に時間があつたのは、こいつを籠の中に戻すためだったのか。そこまで納得したはいいいものの、彼女は楽しそくに鳥と戯れるばかりで、いつこうにこつちを見てくれない。

ここは、さあ授業をはじめますよと言って椅子に座らせるべきなのだろうか。困った。家庭教師なんてやったことがないし、されたこともない。つまり、どうしていいのかよく知らない。この場合、彼女の方が経験者なのだからなんとかしてほしいと思うのだが、こちらが教える立場なのだからしてそれはまずいような気がする。

「……あの」

「なあに？」

アディナは相変わらず鳥に夢中だ。ちらりともこちらを見ない。

「このお人形には……名前はありますか？」

我ながらくだらない質問だが、思いついてしまったものは仕方ない。というか、よくできた人形に囲まれていると落ち着かなくて、見られているように感じて、さっきから私は結局人形のことばかり気になっているのだ。

「別に」

人形たちの主がようやくその目を私に向けた。

「全部もらいものなの。いっぱいあるからひとつあげましょうか？」

「あ……いえ。アディナ様のものを、私がいただくわけにはいきません」

もらった。誰にだろうか。全部同じ人物からか、それとも複数いるのか。

「そう？」

アディナはくりつと首をかしげた。リボンと柔らかい金の髪がふわりと踊った。

彼女は人形にさして興味がないらしい。いよいよ話すことがなくなった。話題をさがして広い部屋を見渡す。高そうなランプ、高そうなソファ、背も高い本棚、色とりどりの花が咲き乱れる絨毯、陶器のオルゴール、どれも当たり前のようにそこにあってとりたてて質問することがためらわれた。もし深い知識があったら、この絨毯を見てあらなんとか織りですね、とか言えたかもしれないのに。そういう本も少しくらい読んでおくんだった。

こんな子ども相手に情けないことだが、私は初対面の相手と打ち解けて話したりするのがそもそも苦手だった。いや、苦手だとかそんなことを言っていられない状況だというのは百も承知なのだが。

「……これも、贈り物ですか」

ふと覗き込んだ編み籠の中に、木彫りの馬や小さな帆船、きらきら光る糸でできた毬、ぜんまい仕掛けのブリキの王子様、ピンクに塗られた笛、造花のブーケなどが積まれていた。どれも思わず見入ってしまいそうな美しい品だ。これをひとつでも持っていたら、故郷のあの村では周りの子どもたちの羨望を集めたことだろう。

「そうよ。遊んでみる？」

「いえ……」

さすがにそれは遠慮したい。いや、そもそも今は仕事なのだ。

私は机の側に歩み寄り、帽子を置いて、ハンドバッグの中から眼鏡を取り出した。とりあえず教科書を出して勉強を教える体勢になつてしまえばなんとかなると思ったのだ。

ところが、そうそううまくは運ばなかった。眼鏡をかけたところ

ではりつく視線を感じた。

「ねえ、それ貸して」

アディナはなんだか逆らえない魔力でもってお願いをしってくる。私が眼鏡を外すと、彼女はほとんどひったくるような勢いでそれを奪って、踊るようにくるりと後ろを向いた。一瞬うつむいて、そして、またかかとをつけたままターン。ドレープのとられたスカートがさっと広がった。

「似合う？」

私のための眼鏡は、彼女の小さな顔には合わなかった。全然似合っ
てませんなんて答えるわけにはいかないし、明らかに変なのだから「お似合いです」なんて言うのもご機嫌取りのようで気が引ける。それで逡巡しているうちに、少女は奥のドアを開けて部屋を出て行ってしまった。眼鏡をかけたままだったためか、軽くふらつきながら。

そこはどうやら彼女の寝室のようだった。それとわかったのはベッドがあつたからだ。さすがに中にずかずかと入っていくのはためらわれたので、私は開け放しのドアの前に立って様子を見た。

アディナは大きな姿見の前で背伸びをしながら、顔を色々な角度に傾けていた。そして鈴が鳴るようにくすくすと笑った。

「あははっ。へんなの」

お愛想で似合ってますなんて言わなくて本当に良かった。アディナは駆け戻ってきて眼鏡を私の手の上に載せた。

「はい」

「ああ、ありがとうございます」

ちよつと待て。なんで私がお礼を言わなきゃならないんだ。逆じゃないのか。

「アディナ様」

「なあに？」

間違つて答えてしまったのはこっちなので、ここはお礼を言うところですからなんて説教するのも馬鹿馬鹿しい。どうしようか考えた結

果、出てきたのはずっと言おうとしていた台詞だった。

「……では、お勉強をはじめましょうか」

アディナはまばたきをしてから、そうだったわねと椅子を引いて
ちよこんと着席した。

言えた。

ほつとしながら向かいに腰をおろしインクとペンを取り出す。さて、何からはじめたものだろうか、と考えながら。

第3話 七の月 三青の日(3)

「ええと——そう、前の先生には、何をどこまで教わりましたか？」

「そうねえ……」

思い出そうとしているのだろうか、あちこちに視線がさまよう。

「その前に、いろいろお話を聞かせて？」

「……お話、ですか」

「そう。フィリーネ女学院ってどんなところ？ 生徒は何人くらいいるの？」

やっと始められると思ったのに、どうやら彼女が考えていたのは別のことらしい。

「学院はオルデンベルクにあるんでしょう？ オルデンベルクはどんなところなの？ 都会？」

次から次へと疑問符を並べられ、とりあえずなんとか短く話を済ませて仕事を始めようと思いつつ一から答える。

「王立フィリーネ女学院の創設は今から百三十二年前だそうです。生徒は異国からの留学生も含めてだいたい二百人くらいでしょうか。オルデンベルクの人口はテニエスで五番目ですから、都会ですね。少なくともここよりは」

それじゃあ、と彼女が次を口にする前に、私は言葉を続けた。

「ということで、お勉強をはじめます」

「つままない」

即座に不満を口にして、アディナは顎を机につける。

「……と、言われましても、私はそのために雇われたんです」

「なんであたしだけ勉強しなくちゃいけないの？ カリンは夏休みなんでしょう。不公平だわ」

「そのかわり、私は仕事をしているじゃないですか」

「いくらくらいもらうの？」

「……さあ。それはまだ、いただいてませんから……」

どうせ私が使うわけじゃないし、そもそも支払いまでこの仕事が続くのかどうかも疑問だ。

アディナはほっそりとした両腕を枕にして顔を伏せてしまった。これではどんな表情をしているのか見えない。

そういえば私は、この子がどの誰なのかということすら知らないのだった。わかつているのはただ、アディナという名前だけ。それだって本当の名前なのかどうか怪しい。

「……アディナ様は、学校には……行っていないんですね」

「うん」

親はどうしたのだろう。いないのか、もしくは手放されたのか。

「ここにいるのは、夏の間だけなんですか？」

「そう」

「普段はどこに住んでいるんですか？」

私は質問を重ねていく。さっきまでとまるで逆だ。なんだか不思議な気がした。

「エーレンフェストよ」

「聖都じゃないですか！ オルデンベルクなんかより、ずっと都会

——」

「でも、外に出ないもの。退屈よ」

ふと頭を上げて私を見たその顔から、子どもしさが消え失せていた。ついさっきまで鳥と戯れていた笑顔の面影がどこにもない。

彼女はそれきりまたばかりと額を腕につけてしまったので、その表情が余計に印象に残った。誰かに似ている、と思ったのは一瞬で、すぐにその既視感の正体をつかんだ。

これは、自分だ。鏡の中の。

「あなたの、家族は？」

気がついたらそう訊いていた。

「兄弟はいる？ —— お兄さん、とか」

「いけないの」

ゆっくりと金の頭が持ち上がった。

「そういうこと、教えちゃダメって、言われてるの」

ああ、やはり。

「……秘密、ですか」

「うん」

そう言われては、追求はできない。

あまり急いで訊き出すこともないだろう。この子はたぶん、何の関係もない。なぜそう思ったかったのか、その理由も考えずに、私はただ金の髪が陽の光を反射するのを眺めていた。

初日の授業は、結局、他愛ない話をして終わった。アディナはやらたと学院の話を聞きたがり、私はこの一年弱で知り得たことをかいつまんで話した。寮での生活や、授業の様子や、休み時間の過ごし方、課外活動のことなど。彼女は自分自身のことはあまり語らなかったが、それでも好きな本のことや食べ物のことなどを楽しそうに教えてくれた。

少しは仲良くなれた気がして、私はそれなりに満足していた。我ながらずいぶんよくやったと思う。学院の友人相手にだってあれだけ喋ったことはないと思うくらいだ。

彼女はかなりの世間知らずで、ものの見方からちよつとした遊びの工夫まで、ただのお勉強以外にも教えてあげられることはたくさんありそうだった。それがわかっただけでも進歩だ。今日の雑談に費やした時間は無駄ではない、これをふまえて、明日からはちゃんと授業をしよう——と、前向きに考えながら帰って帰った。

「ただいま戻りました……」

ドアを開け、私はやっと緊張から解放された。我が家、というわけではなかったが、この夏の間はそんなものだ。アイスラー高原といえば有名な避暑地、ここに私の後見人が別邸をひとつ持っているのである。ボルマンの別荘と違って、立派な門も庭もないが。

「おかえり、僕の可愛いカトリーネ」

「気持ち悪いことを言うのはやめてください」

しかもこんな玄関先で待ちかまえて。

ギルは悪びれもせずに笑う。私はしっかりとドアを閉めて、靴の泥を落とした。

「新しい仕事の感想は？」

これが私の後見人です、とユーリエに紹介したら、即刻クビになってしまいそうな格好を、ギルはしていた。くたびれたシャツをだらしなく着崩し、油のしみが残ったままのズボンをはいている。

「疲れました。……それに喉が痛いです、喋りすぎで」

「それはご苦労様。お茶を容れてあげるよ、こっちへおいで」

「……はあ」

普段はお手伝いのナネットに任せきりのぐうたらな人が、珍しいこともあるものだと思っただら、どうやら今日の話を聞くためだったらしい。

この家で生活するようになったのは十五日前からだ。十九日前までは学院の寮にいた。それではその中間はどこにいたのかというと、移動していたので泊まりはホテルだった。暑中休暇の間は仕事をしてもらうよとは言われていたが、まさかこんな田舎に連れてこられるとは。

「で、どうだった。ご令嬢は」

「どうって……、少し変わった子でした。もともと、私はあのくらの年の良家のお嬢さんなんて他に知りませんから、比べようもないんですけど」

ティーカップの中のお茶はびっくりするほど甘かった。一口でソーサーに戻したので、ギルに笑われた。

「蜂蜜入りだよ。喉にいいから、飲みなさい」

「……はい」

もう一度喉をしめらせてから、私は彼の聞きたがっている肝心の所を口にした。

「屋敷自体は、普通の造りです。門には警備の者もいませんでした。

もちろん、あんな山すそにぽつんと建っているんですから、誰か来たらすぐわかるんでしょうけど」

テーブルをはさんで向かい側にギルがいる。こうして対面していると屋敷のことを思い出した。目の前にいる男は、あのお嬢さんのふわふわな金の髪とは大違いの、焦げ茶色のぼさぼさ頭をしているけれど。

「見晴らしはよさそうなものな」

「はい。それと、家主は熱心な信者なのでしょうか？ ホールに天界の図が飾られていましたし、門柱には悪魔祓いの紋様が刻まれていました」

「ふむ」

ギルは彼の分の紅茶を一気に飲み干した。彼のカップの中の紅茶は蜂蜜抜きなのだろうか。

「元の所有者が刻んだままということも考えられますが……。ボルマンはいつあの別荘を購入したのですか」

「うん。何度か変わっているようだが、二十年ほど前からはボルマン男爵の所有になってる。たぶん、戦時中のごたごたで前の持ち主が手放したんだろう」

「ユーリエという方にはお会いしました。確かボルマン家の長女でしたね？ 私が教えることになったお嬢さんは、彼女が連れてきたらしいんです。帰りに庭師さんをつかまえて世間話をしたんですけど、あの別荘に普段住んでいるのはやはり、管理人のフロアー工夫妻だけだそうです。奥さんのダニエラは六十くらいの親切そうな人です。旦那さんは昼間ハーブ園に働きに出ているそうで、姿は見えてません。庭師は週に二回、赤の日と青の日に通ってくるそうです。今はユーリエが連れてきたコックと、メイドが一人加わっていて……、それでもあの広さにしては少ないですね。ユーリエがやってきたのは一月ほど前で、ダニエラは」

「そこまで。おまえはいいかもしれないけど、覚えきれないよ。あとでまとめておいてくれ」

「はい」

昼の間にまとめてしまつて、それから、明日の授業について考えよう。考えながらちびちびと飲んでいるうちに、いつの間にかティーカップは空になっていた。

「まあ、せいぜい怪しまれないように気をつけなさい。焦ることはないんだから」

聖歴二六年、七月、三青の日。私の夏はこの日に始まつた。

第4話 七の月 三藍の日（1）

机をはさんで向かい側に座れば、試合開始だ。

「ねえ、昨日から考えてただけだね、カリン」

「先手必勝とばかりに、私はアディナの言葉を遮った。

「さあ、今日は問題を作ってきましたよ。まずはこれを解きましょう」

初日はまったく授業にならなかったで、しっかりと対策を練ってきたのだ。昨夜眠る前に思いついて作ったこの問題は、そこらへんの町の学校で九歳程度の子どもが勉強する計算式を、とりあえず並べてみたものである。なぜかというに、これまでなにを勉強したのかと昨日いくら聞いても要領を得なかったのだ。これで駄目ならもう少し段階を戻ってみればすむことだし、解けるようなら次に進めばいい。

「……これ？」

「はい。できそうですか？」

アディナは首をかしげながら、私の手渡した紙をじつと見た。

「んー……」

できるともできないとも言わなかったが、とにかく紙を机に置き、ペンに手を伸ばしてくれたのでほっとした。これで、今日は授業になる。

アディナは問題とにらめっこしてから、こちらを見た。

「これ、カリンの字？」

「そうですよ」

「ふうん」

アディナのペンには上等そうな羽根がついていた。こういうこまごまとしたものは男爵家の物なのだろうか、それとも彼女の私物なのだろうか。それにしても、なかなか問題を解きださない。やっぱり難しかっただろうか？

「カリン」

「ん？ わからない？」

「あのね、あなたの後ろにいるお人形さんのリボン、曲がっているの。直してあげて」

は？

「……ああ。これですか」

どこを見てんだよ、まったく！

仕方ないので一応、お人形のドレスの首元にあるリボンのゆがみを直した。大きなサテンのリボンは、ちよつとひねったくらいでは直らず、いったんほどいて再度結ぶ必要があった。

満足のいく仕上がりになって、私は椅子に戻った。見てみると、なんとか一問目が埋まっていた。それにしても、足はぶらぶら、瞳はきよろきよろとして落ちて着きがない。ここはしゃきつとしなさいと怒るべきところだろうか。

そもそも人形のリボンなんて今朝曲がったものでもないだろうに、いったいこの子に、ぴしつと座って手だけを動かすなんてことが可能なのだろうか。普通の子どもならどうなんだろう。私の九歳の頃といえば……そうだ、勉強どころではなかった。母さんも父さんもいなくなつて、家に二人きりで――

よそう、考えるのは。思い出したって変えられるものじゃない。吐き出した息と共に思考を打ち切ったが、胸は重い物にのしかかられたように痛んでいた。

感情が、抑えきれずにあふれだす。熱をもつて吹き出し、心を染める。憎悪だろうか、それとも絶望だろうか。その激情につける名を知らない。ただ、緋色に燃え上がりながらまたたく間にすべてを覆い尽くしていく――マグマのように。

その奔流は今でも、私の底に眠っている。

机に肘をついたまま、自分で自分の二の腕を掴んだ。ゆっくりと呼吸して、体の平静を取り戻せ。汗をかいているのは、暑いせいだ。ウィーダが気持ちよさそうに鳴くのが聞こえて、窓辺を見た。ガ

ラス窓は空いていたが、カーテンはひるがえっていない。風がない。ほら、落ち着いてきた。

この部屋は広く明るくていい。ちよつと人形が多すぎるけれど。長く息を吐き出して、手に込めた力をゆるめた。向かいに座ったアディナは、さっきからきちんと、ペンを動かし続けている。のだが。

油断していた。よくよく見てみれば、解けているのはいまだに一問目だけで、紙の端っこの方に謎の図形が作成されていた。

「アディナ様」

「なあに、カリン」

「らくがきをするために紙を渡したんじゃないやありませんよ」

「けっこう上手く書けたと思わない？ これ、ウィーダよ」

なにを嬉しそうにしているのかさっぱりわからない。というか、この図形、鳥だったのか。

「全然似てません。それより、黙って解きなさい」

アディナは頬をふくらませて、椅子の背にもたれかかった。

まったく、たったの二十問に、いったいどれだけかければ気が済むのだろう。わからないならわからないで聞いてくれればいいのに、いや、そういうええそれは言っていなかった。

「……解き方を知らなかったり、忘れてしまったりしているなら、質問していいんですよ」

「うん」

そう返事はしたものの、アディナはペン先をほとんど紙の上につけているだけだった。ちょうど、鳥らしき絵の羽のあたりに。

第5話 七の月 三藍の日(2)

彼女のむきだしの腕に、何本ものリボンが巻き付けてあるのがふと気になった。なんのために巻いてあるのだろう。おまじないかなにかだろうか。手首の辺りなんて、ひとりで巻けるとも思えないし、ダニエラかユーリエにやってもらっているのかもしれない。

そういえば、頭のリボンは昨日と違って青だ。白いレースの方が髪に似合ってたな。どうでもいいけど。

なのに見てしまう。要するに私はヒマなんだ。あんまりこの子がぐずぐずしてるから。

まったく、アディナの格好はどこもごてごてしている。人形のどれよりもにぎやかで、統一感がない。だけど、首のペンダントだけは昨日と同じだ。他と違って派手さもない。鈍い色の、水晶みたいな石がついてる。なんだろう。

「ねえ、あそこの本棚に映っている光、見て」

「え？」

「まるで蝶々みたいじゃない？」

アディナはペン先で本棚を指した。私はそちらではなく、彼女の手元の紙を見てみた。呆れた。やっぱり全然進んでないじゃないか。

「……よそ見をしないで、続きを解いて。真面目にやりなさい」

アディナは不服そうに、ペンについた羽根で金の髪を撫でた。

いったい、授業をはじめてからどれだけ経っただろう。なにをどうしたらこれだけ気を散らすことができるのだろう。予定では、もうそろそろ全部解き終わって、採点をして、解説をはじめているはずだったのに。

今度よそ見をしたらなにか言っでやろうと思って、アディナが顔を上げるのを待ちかまえることにした。金の髪はあいかわらず柔らかそうで、差し込む光を受けている一部分だけがまるで湖面のよう

にきらきらしていた。ふうつと重いため息をついた唇は、とがるとピンクが薄くなる。

「……カリン」

「なんですか」

「そうやってじつと見られていると緊張するの」

「ああ……。そうですね。では見ませんから、進めてください」
見てなかったって解かないくせに。

まあ、確かにじろじろ見られるのは気持ちのいいもんじゃないだろう。彼女が解き終わるまでの間、初等学校用の内容をもう一度さらっておこうと考えて、私は教科書を開いた。

昨日問題を作ったときに使ったものには一応、線を引いてある。そのまま出した問題もあれば、数字を入れ替えて使った問題もあり、様々だ。ページをめくっていくと、徐々に難しくなっていく。章が変わると、三角や四角の図形の組み合わせが載っていた。

そういえばやったな、こんなの。クイズみたいでちょっと楽しいんだ。懐かしい。もうずっと前に、ひとりで父さんの書斎にもぐり込んで――

馬鹿。

どうかしてる。こんなの今さら見直さなくなってたってできる。なんで思い出すんだ。

私は席を立った。フィリーネの先生が試験の最中にするように、ぶらぶらと部屋を回ってみるのもいい。

授業っていうやつは、どうすれば進むのだろう。学院の授業は、ただ先生の話を聞いて黒板を写して、あくびをかみ殺すだけで終わっていた。どれも退屈で簡単だった。けれど教える方ではなにかと苦労があるのかもしれない、と初めて思った。ただ困ったことに、ここには教壇も黒板もない。参考にしようにも、違いすぎる。

窓の側まで歩いて、ウィーダの籠をのぞきこむと、つんとそっぱを向かれた。主人ともども、まったく気が合いそうにない。

空は晴れて、端の方に薄い薄い雲が頼りなく流れていた。天使は

雲上にある天の世界から来たっていうけど、あんな雲の上には危な
つかしくて住めないだろうな。

「まだですか？」

天候の観察にも飽きて振り返ると、「もう少しよ」という返事が
聞こえてきた。頼もしい答えだが、信用はまったくできなかった。

太陽が進んでしまったせいで、アディナが本棚に見つけた光の蝶
はゆがんで、いびつなブーツのようになっていた。

ずらりと並んだ背表紙は、辞書から図鑑、小説まで幅広く、どう
見ても子どもが読めるような代物ではないものも混ざっている。た
ぶんこのクルミの本棚はここに元々置いてあったもので、アディナ
が部屋の主となる際に移動させる手間を惜しんだだけなのだろう。
よく見れば、どの本も少し古く、脂がしみこんでいた。

誰がこの本棚を使っていたのだろう。なにか手がかりになるよう
なものがあるかもしれない、と思って背表紙をひとつひとつ確かめ
ると、妙に真新しい本が紛れ込んでいるのに気が付いた。

「外つ国、訪問記……」

意外だ。たった一年前に出た本が、ここにあるなんて。

「え？ ああ、それね。前の先生が置いていったの」

私の声が聞こえたのだろう。アディナが体をひねってこちらを向
き、わざわざ教えてくれた。

「まだ最後まで読んでいないけど、だいぶ進んだのよ」

その菜のところまでね、と得意そうに彼女は言った。

「——こんな本を読みますか？ あなたにはまだ難しいでしょう」
学院では流行していたが、あそこの学生は皆、私より四つも年上
なのだ。その彼女たちが見栄をはって読むような本を、ひとりで読
めるなんて、この子どもは案外頭がいいのかもしれない。

第6話 七の月 三藍の日(3)

「ときどき難しい言葉もあるけど、面白いわよ。特に、リンドブラードの章が気に入ったわ。寒い国の話」

アディナは得意そうに、リンドブラードではどのようにして冬を過ごすかということを解説しはじめた。どうやら本当に読んでいるようだ。

私はぱらぱらとその本のページをめくったが、すぐに閉じた。

「この手の本は、書いてあることが全部本当とは限りませんから、頭から信用しないことです。嘘ではないにしても、読者を楽しませるための誇張も含まれますからね」

「そうなの？」

やや不満そうに彼女は唇をとがらせた。

「ええ。……すみません、私の方から話しかけたりして。続きをどうぞ」

「もう解けたわ」

いつの間に。

どうも甘く見ていたようだ。席に戻って採点してみて、ますますそれがはつきりした。

「満点です」

驚いた。最後の二問はひっかけようと思ってそれなりに難しくしておいたのに。

アディナは特に嬉しそうでもなかった。ただ紙がないので落書きする場所を求めるかのように、手に持ったペンをくるくると宙で動かしていた。

ここで私は困ったことに気が付いた。この二十問を材料にして、なぜ間違ったのかを確かめたり正しい解き方を解説したりするつもりが、全問正解では授業らしい授業にならないのだ。つまり、教えることがなにもない。

「ええと……。このあたりは解けるようですから、もう少し先の内容に進みましょうか。ちょっと待ってください」

私は改めて問題を作り直すことにした。教科書を広げて、よさそうな問題を抜き出して。そうだ、計算式を並べるだけでなく、式を作るところからはじめる問題も入れてみよう。

こんなことなら待つてる間に作っておくんだった。

急いで二枚目の問題を完成させて、アディナの前に置く。

「どうぞ。次も満点を目指してくださいね」

なんの仕掛けもないのに、アディナは紙をひっくりかえしたり透かして見たりした。それから、机の上でぴんと伸ばして、ようやく問題に視線を落とす。よしよし、その調子。

一問目が正解するかどうか、うろろろするペン先を眺めていたのだが、そういえば見ていてはいけなかったのだと思い出し、窓の方に顔を向けた。相変わらずいい天気だ。いつの間にか吹きだした穏やかな風が、カーテンをゆらゆらと揺らしている。なんて心地いいんだろう。ふくらんでは戻り、ふくらんでは戻りを波のように繰り返すその動きを眺めているうちに、まぶたが重くなってきた。

やばい。

慌てて姿勢を正すと、金の糸が紙の上に散らばっていた。どうやら私が目を逸らしている間に、アディナも眠気に襲われていたらしい。うつぶせになっているのを、まさか髪を掴んで引っ張り上げるようなわけにもいかなないので、私は机を叩いた。

「ほら、しゃきつとして！ 続きを解くんですよ」

「——あ、はい」

がばつと頭を上げたアディナは、指から転げ落ちかかっていたペンを握り直した。

あぶないところだった。二人して寝入ってしまったらしたら、ダニエラがお茶を持ってきた時なんと思うだろうか。そうだ、今のうちに次の問題を用意しておこう。集中すれば眠くなんかなるはずがない。

「カリン」

問題が中ほどまでできあがった時、アディナがまた声をかけてきた。かわいいからつてもう騙されないぞ。ここで甘い顔をすればますますまともな授業が遠のいていくのだから。

「静かに」

冷たく言い返すと、アディナは少しの間ペンを動かしたが、またその手を止めて顔を上げた。

「あの、座っているのに疲れたわ。ずっとこうしているんだもの。立っていい？」

「ああ」

そういえば授業を始めてからずいぶん経っている。

「では、休憩しましょうか」

アディナはぱつと立ち上がった。

「ダニエラにお茶をもってきてって言うわ」

勢いよく扉を開けて、部屋を出て行くその後ろ姿は、とても疲れしているように見えなかった。

集中力が切れるというほど集中もしていないし、肩が凝るほどペンを動かしてもいないし、だいいち昨日は同じだけの時間ずっと座っておしゃべりをして、疲れたなんて一言も言わなかったくせに。

私はため息をついて、開いたままの扉を見つめた。誰もいない今のうちに、首を回し、両腕を上げて背筋を伸ばす。実際、疲れたのはこっちの方だ。

結果、アディナは三枚目でようやく一問、間違いをした。それはまったく単純な計算ミスによるもので、それを指摘すると彼女は「ああ、そうね」とだけ言ってさらさらと直した。この日まともに先生らしいことをしたのはそれだけだった。

式を作る問題になると、アディナの手は元々遅いのがもつと遅くなり、わからないなら空欄にして出してもいいですよと言うのに、

まだ考えているのと答えて採点をさせようとしなかった。それでも
すまず無為に時間が費やされてしまった。

最後にアディナはこう呟いた。

「退屈だったわ」

それはまったくこっちの台詞だった。あんたが真面目に取り組んでよ
そ見をせずに問題を解いたら、私はただぼーっとして座ってるか黙って
部屋をうろついてるかだけの時間を過ごさずに済んだのに……と、言い返す
わけにもいかないので、ただ「明日は歴史のお勉強にしましょう」とだけ
宣言して帰ってきた。

第7話 七の月 三藍の日（4）

なんだってこうなってしまったんだろう。

後になって考えれば考えるほど、もっとやりようがあったように思った。今日の授業は失敗だったと、どんどんそんな気がしてきて、落ち込んだ。

夕食はよく煮込まれた芋と野菜のスープで、食欲をそそるいい香りがしていたのに、二口も食べたらもう腹がふくれたようで、スプーンを動かす手が止まってしまった。

「なにもかもがうまくいってないという顔だね？」

愚痴を言ったりするのは好きじゃないのに、ギルにはだいたいお見通しのようなのだ。

「それほどではないですけど。……私、向いてないと思うんです」

明日行ったらユーリエあたりが「もうお帰りください」とか言うんじゃないかとさえ思う。クビになったら困るのに。まだなにも調べられていないのに。

「子どもの扱いって難しいですね」

「おまえだって子どもじゃないか」

ギルはパンをちぎりながらからかうように言った。

「冬に下働きの見習いで入った時はすっかりやっていただろう」

「私にはメイドの方が向いているんです、きつと」

あれをしてこれをして、といちいち指示を出される方が楽だ。そういう仕事ならいくらだってこなしてみせるのに。

「そもそもよく知らない子とふたりきりで部屋にいるっていうのが、居心地が悪いというか。アディナ様は話を聞いているんだか聞いてないんだかわからないし」

「おまえ、生徒を様付けで呼んでるのかい」

「だって、皆そう呼ぶんです。ユーリエ・ボルマンですら。……かなりの身分なんだと思います」

それが謎だ。本当に、何者なんだろう、あの子は。そして、なんのためにあそこにいるのだろう。

「で、おまえは生徒になんて呼ばれてる？」

「……カリン、です。そう呼びたいと言われましたので」

「それは先手をうたれたね」

ギルはパンを食べ終わると果物籠に手を伸ばした。

「先生と呼ばせるべきだったよ。たとえ年が近くても、教える側と教えられる側の立場の違いははっきりさせておかないと」

「ああ……」

そうだったのか、と今更思っても遅い。

そういえば、学院でも教師は敬うようにと口を酸っぱくして言われていた。ということは、初日から仲良くお話などしてしまった時点から、失敗は始まっていたのだ。もつと厳しくしなければいけなかったのか。

「やっぱり、なにもかもうまくいっていないような気がしてきました」

ギルは笑い、切り分けた梨を皿に載せて私の方によこした。

「これだけでも食べなさい。なに、そのうち慣れるさ」

夕食の後で私は、問題をたくさん解かせるときはまるつきりテストみたいにして時間を区切ってやればいいのだと思いついた。そうすれば時間が来たら問題を解くことをやめさせられるし、喋ろうとしたら「ほら、もう時間がありませんよ」とか言って封じることができる。

明日の準備として本を鞆に詰めていると、部屋のドアがノックされた。

「ちよつといいかい」

ギルの声だ。返事をするドアが開いた。彼は手に書類のような紙束を持っていた。

「ニュースだ。明日の朝刊に載る」

「なんですか？」

本社から送ってきたのだろうか。

ギルは深刻な顔をしていた。つられて私も心の準備をしたが、そんなものは何の役にも立たなかった。

「またカレーラ病だ。今度はベルトラン領」

指先まで、一気に冷えた。

「これがその記事。目を通して、なにか気づいたことがあったら教えてくれ」

「……はい」

ギルは私を気遣ってくれたのか、すぐに部屋を出て行った。

ベルトラン西部、メルニエにてカレーラ病発生の疑い――

見出しだけで、手が震えた。まともに読み進めることはできそうになかった。

どんなに強い感情も、持続するものではない。怒りも悲しみも、痛みも苦しみも、激しく吹き出した後は冷えていくしかない。

そうして冷え固まったものは、がさがさとした表面になり、心を覆ってくれる。己を偽るための鎧になる。

けれどまだ、奥底には眠っているのだ。

この冷え固まった鎧の下、地表の底に、うごめきつづける熱が。

第8話 七の月 三紫の日（1）

ベルトラン西部、メルニエにてカレーラ病発生の疑い

七の月、二紫の日、ベルトラン西部の町メルニエで二九歳の男性が死亡した。現地の保安局によれば、彼の死とカレーラ病との因果関係は不明である。しかし、三日後の三橙の日、同じくメルニエ在住の四七歳の男性と四三歳の女性が相次いで死亡。この二人は夫婦であり、先に死亡した男性と同じ集合住宅に住んでいた。これを皮切りとして、三青の日までに既に三人が死亡、百人以上が咳、嘔吐、発熱などの症状を訴えており、メルニエでは非常事態を宣言、町を封鎖している。

天使庁は未だ対策を発表しておらず、現地では一刻も早い救援が望まれている。

朝刊

——テニエス中央新聞 七の月 三紫の日

ああ、くそ、頭が痛い。

朝っぱらから容赦なく照ってくれている太陽は、林を抜けると熱心に私を暖めてくれようとした。まったく余計なお世話だった。昨夜寝付けなかったせいで気分が悪い。屋敷の門をくぐると、どこからか歌声が聞こえてきて、私は顔を上げた。

歌は開け放された二階の窓から降ってきていた。楽しげな、高い声。アディナに違いなかった。歌詞はまるでたらめな意味をなさないものだったが、メロディにはどこか聞き覚えがある。なんだろう。何に似ているんだろう。確かにどこかで……、なんだ、教会の

聖歌だ。わざわざ思い出して損した。

私はますます嫌な気分になりながらベルを鳴らした。

頭痛を抑えながらダニエラに笑顔で挨拶をし、階段を上ったのに、待っていたのはやる気のないアディナの言葉だった。

「今日は無理だと思うわ。……風邪をひいたみたいなの」

嘘つけ。今さっきまで機嫌よく歌なんか歌ってたくせに。

「馬鹿なことやってないで、始めますよ。面白い本を持ってきましょう」

こめかみの辺りがずきずきする。アディナは座ろうともしない。見たこともないくらいのかめ面、いったい何がそんなに気に入らないっていうんだ。

「これを少しずつ読めば、自然と歴史に詳しく」

「できないったら。帰って！」

アディナは私の手から本をひったくって、こともあるうに窓から投げ捨てた。

「ちよっ……」

あれは昨日の昼間、いくつもの本を読み比べて選んだものだ。物語の好きなアディナの興味をひきそうな、出来事が詳しく載っている挿絵も多いもの。喜ぶかと思ったのに。

「なんてことをするんですか！」

少し大声を出すと、それだけで頭がまた痛んだ。

この子どもにとつては貴重な物などないのかもしれない。大事にしなけばいけないとか、考えたこともないに違いない。こんなに多くの人形やおもちゃ、珍しいペットを与えられて、気に入った物だけを愛でて過ごしている。

なんだか泣きたいような気分だった。きっと眠れなかったせいだ。アディナは怒るでも悲しむでもなくじつと私を見ていた。一瞬、私はこの子の目にどんな顔をして映っているんだろうと考えて、いたたまれなくなった。

「——わかりました、今日は帰ります。また明日……、いえ、明後

日ですね。ゆっくり休んで、風邪を治してください」

それだけ言って、部屋を出る。悪化していた気分は最低のところまで落ちていた。廊下を戻ると階段の手前でダニエラとはち合わせた。

「すみません。アディナ様は風邪気味だとかで、帰れと言われてしまっ

まっ

「まあまあ。暑い中わざわざいらしてくださったのに、すみませんねえ。よかったら冷たいお茶だけでも召し上がってってください」朝食の時はなんともありませんでしたけど、とか言われるんじゃないかと待ちかまえていたのに、あっさり納得してしまった。やっぱり甘やかされてるな、あの子。

ダニエラの申し出は正直ありがたかったので、お願いしますと答えようとすると、階段を上ってきたユーリエが余計な口をはさんでくれた。

「いいのよ、ダニエラ。先生、お疲れ様でした。先生もお顔の色がすぐれないようですから、帰ってお休みになってくださいな」

「ああ、いえ、そんな。私は大丈夫です」

「いいえ、お疲れのようですわ。お加減の悪いときは休んでくださって結構ですから、無理はなさらないで」

ユーリエはきっぱりと言った。たかだか寝不足で仕事を放り出すなんて考えられないのだが、やはり感覚が違うらしい。くいさがったって仕方ないので帰ることにした。もういい、家で寝よう。

その前に……、本を拾わないと。

庭に出て井戸の側を抜け、壁を左手に歩く。ウィーダのいる窓の下まで来て、私は周囲を見回した。この辺のはずだけど。

ああ、あつた。

バラの茂みのすぐ手前で、歴史の本は這いつくばっていた。拾いあげてみると、数ページが折れていたが、その他に外傷はなさそうだった。

はたいて鞆の中に戻し、一息ついたところで、私は目の前のバラの茂みが枯れかかっているのに気づいた。虫でもついているのか、単に水が足りないのか。この暑気だからそれも仕方のないことかと思えた。

これが枯れたら、あの人の良さそうな庭師のおじさんが叱られるかもしれないな。そういえばこここのところ雨も降っていないけれど、この暑さだ、メイドが水くらい撒かないのだろうか。

庭師が来るのは次の赤の日。明後日だ。それまで放っておいたらだめになるかもしれない。どうしようかと考えていると、建物のすぐ裏に納屋があるのが見えてしまった。おじさんがいつも使うような道具がしまつてあるに違いない。井戸まで行って水を汲んで――

私は唐突に、自分の本来の役割のことを思い出した。

そうだ。あの中を調べてみよう。見つかつてとがめられたら、如雨露を探していたんですと言おう。庭師はいない、メイドも誰も見えない。今のうちだ。ちょうどいい機会じゃないか。何もなければもしれないが、そうならなつたで本当に如雨露を出してくれればいい。

木の留め具を外して、私は納屋の中にそつと忍び込んだ。

第9話 七の月 三紫の日（2）

納屋の外観は屋敷そのものと比べるとずいぶん新しかったが、中はさすがに土に汚れており、多少ほこりっぽくもあった。手押し車、二段に分かれた棚、壁に掛けられた帽子、大型から小型まで揃ったシャベル、鍬、ブーツ、植木鉢、土の付いた手袋、重ねられたバケツ、のこぎり、レーキ、巻かれた布、どれを見ても普通だ。

如雨露はどこだろう、いや、如雨露を探しているわけじゃないんだ、本当は。

鎌、空の酒瓶、ランプ、粉の入った袋、箒、大きな木箱の三段積み、中は……、空っぽだ。いや、上から覗いただけじゃわからない。下の方になにか入っているかも。一つめをよけると、二つめの中が見えた。これも空っぽ。一応それを持ち上げる、と、麻袋が見えた。二つめを、横に置いた一つめに重ねて、三つめに詰まっている麻袋の口を開ける。なんだ、肥料か。まあそんなところだろうとは思ったけれど。

元通りに積み直そうかと思って、ふと、せっかくだからと三つめを持ち上げた。

床に、なにか細い筋のようなものがあつた。なんだろう。肥料いっぱいの木箱の上に重ねてからしゃがみこみ、床の土を払った。すると周囲の床と同じグレーに染まった素っ気ない板の扉があらわれた。地下があるのだ。

私は後ろを振り向いた。納屋の入り口はちゃんと閉まったまま。隙間から薄い光が差し込んではいるが、人の気配などはない。

落ち着け。ただの地下室ならどこにでもある。それでも鼓動は勝手に速くなっていた。取っ手らしきへこみに指をかけて引っ張ると、あつけないほど軽い手応えで持ち上がった。

「……なんだこれ」

思わず呟いてしまったのは、騙されたような気分になったからだ。扉の下に、またすぐ扉。こちらは一回り小さく、装飾を施された赤茶の年代物だった。これを開けて次は橙の扉とかじゃないだろうな。違った。今度こそ当たりだ。冷たい空気を感じる。中は真っ暗。どうする。下りるか？

もちろんだ。

手で探ると梯子らしき物があった。どうやらグレーの扉は床下と地面の間をつなぐもの、そして地面に直に取り付けられているのが赤茶の扉だ。立ち上がった棚に戻りランプとマッチを借りた。それから逆になった木箱の重ね方を元に戻し、ちょうど入り口からの視線を遮るようにグレーの扉の真ん前にひきずってきて置いた。元通りの位置に戻すことはさすがに不可能だから仕方ない。

もし、地下に潜っている間に塞がれたらと考えるとぞっとしたが、ここで引き下がる訳にはいかなかった。念のためにそこら辺に転がっていた小石を一つ落としてみると、直後にかつんと乾いた音がした。

よし。

私は慎重に梯子を下りた。ただの地下室という感じではないのはすぐに分かった。周囲に何も置かれていない。そして、狭い。そう感じたのは左右にすぐ石壁がせまっていたからで、目が慣れるにつれて次第にそれが間違いであることがわかってきた。確かに幅は狭い。だが奥行きはずっと広がった。

これは、道だ。

さっきまでかいていた汗が冷えてくるのを感じながら、ランプを持つ手を前に出して、一歩ずつ進んだ。足元にも頭上にも注意を払ったが、危険はなさそうだった。一定間隔で古いランプが吊してあるが、当然火は入っていない。

ここは誰かが頻繁に行き来するために使っていた道なのだろう。なんのために？ それはこの先にたどり着けばわかるに違いない。曲がり角などではなくほとんどまっすぐだ。ただしわずかに上り坂。

この方向は屋敷からみて東、つまり林の方ではなく、屋敷が背にしている山の真下を歩いていることになる。

ほどなく、道は行き止まりになった。しかしまた扉があった。

私は張り切っていた。家庭教師の方が全くうまくいっていないので、このへんで挽回したいという思いが、もしかしたらあったのかもしれない。

ノブを回すとガチリと音がして手応えを感じた。鍵がかかっている。ここまで開けっ放しにしてそれはないだろ、まあいいけど。ランブを足下に置いてスカートをめくりあげ、腰のベルトから針金を二本引き抜いて鍵穴に挿す。鍵開けは、色々やらされた訓練の中でも簡単な部類だった。こういう、指先を使った小細工なら得意だ。

何度か試すと、うまく合って回った。

針金をポケットに落とし、軽く深呼吸して身構えてから、扉を開けた。押し寄せてきたのは光だった。目が眩み、外に出たことを知った。

痛みに耐えながら瞼を開くと、そこには夏の陽気に励まされて明るく色づいた緑があふれていた。

見上げれば空。雲はどこにもなく、一面に青い。

雲の上に天界があるというのが本当なら、今神様はこの監視をさぼっているのだらう。遮るもののない太陽の光に目が灼かれ、地上に視線を落としても視界の中に黒い染みを残した。瞬きを繰り返しながら映した足元には石段が敷かれていたが、それは扉の周囲だけで、あとは一面の草木だ。

振り返って扉を確認すると、入ってきたのと同じはげかった赤茶をしているのがわかった。その扉が取り付けである場所は、崖としか言いようがなかった。斜面は急で、岩肌がごつごつとしており、とても登れそうにない。

あの通路や扉に変な魔法がかかっているとおとぎ話みたいに空間をねじ曲げていない限り、どう考えてもここは屋敷の裏山で、という

ことはこれはただの抜け道だったのだろうか。よくある、脱出用のとか。けれどあの屋敷にそんなものが必要とは思えない。通路はだいたい古いもののようにだったから、ボルマン男爵より前の所有者が作ったのだろうか。

とりあえず扉を閉めて、辺りを調べてみよう。ここが山のどのあたりなのかくらいは調べて帰らないと。

ランプを吹き消し、扉の前に置き去りにして、崖沿いに歩きはじめる。

しばらく行くと、陽の光を映してゆらめいている池があった。白い水草が固まって咲いていて、水はとても澄んでいた。それを見ていると急に暑さを感じて、私は手と顔を濡らすことにした。流れているわけではないその水は、少しぬるかったが、それでも十分に気持ちよかった。

とにかく、きれいなところだ。よく見れば色とりどりの小さな花があちこちに咲いている。背の高い木は少なく、似たような低木が並んでいるのも意外な感じた。木には色づく前の青い実がずなりになっていて、もう少し早い時期だったら花盛りで美しかっただろうにと思った。

切り立った崖は途中で質を変えた。蔦が這い、曲がりくねった地層の見える土の壁だ。それでも急斜面で登れそうにないことには変わりなかった。しかも、高い。

崖に沿って歩き続け、赤茶の扉がまた見えてくるより前に、私は気づいていた。ここは、底だ。まるで大きな落とし穴の下にいるみたいに、どこにも登るところはなく、周りをぐるりと囲まれている。どうりで風が少ないわけだ。

赤茶の扉の前に戻って、私は座り込んだ。

ますますわからなくなった。つまり、地下の通路の先は行き止まりということではないか。ここは、少し離れた庭ということなのだろうか？

ダニエラあたりに訊くわけにもいかないし、かといってここにず

つと残つて調べても何も出てきそうになかった。そうだ、早く戻らないと誰かがあの木箱の位置が変わっているのに気づくかもしれない。納屋から出て行くときにメイドさんにばったり会つて「まだいらつしゃったんですか？」と訊かれるかもしれない。遅くなれば遅くなるほど、見つかったとき不審がられるだろう。

私は怖くなつて早足に地下道を戻つた。幸い誰にも会わなかったが、屋敷を離れるとき、窓から誰か見ていやしいかと背中がちりちりして仕方なかった。慌てて走つたり、振り返り振り返り歩いたりなどしたら見つかったとき余計に怪しまれると思い、堂々と歩いたが、影までくつきりと浮かび上がらせる晴天が憎らしくて仕方なかった。

林に入ると安心して、そこからは自然と早足になった。もう急ぐ必要もないというのに。

結局家に帰り着いたのはいつも授業をして帰るのと同じくらいの時間だったので、ギルには「ずいぶん疲れた顔をしているけど、お嬢さんとケンカでもしたかい？」と言われた。

その時になつてはじめて寝不足と頭の痛みを思い出した。そうなら私はもう横になりたくて仕方なくなり、あの屋敷の元の持ち主について後で詳しく調べてくださいとだけ伝えて、昼食も待たずにベッドに転がり込んだ。

第10話 七月 四赤の日（1）

七月、四赤の日。

新しい週の始まりだが、私にとっては何も嬉しいことなどなかった。屋敷に行つて一昨日の怪しい行動を咎められはしないかと心配だったし、またあのお嬢さんと対決しなければいけないと思うと朝から気が重かった。

いや、昨日一日何も言つてこなかったのだから、きっと気づかれていないに違いない。木箱もランプもちやんと元に戻したじゃないか。そうやって自分を落ち着かせながら、いつもより早く準備して家を出た。授業を始める前にユーリエと話をして、あの子がいったいどういう子なのか、どんな教育を受けてきたのかを、少しでも聞き出そうと思つたからだ。

だが樅の林を抜けてすぐ、私はいつもと違う屋敷の様子に気づいた。締め切られていたいくつかの部屋のカーテンがひるがえっている。

大掃除？ そうではなさそうだ。

音をたてないようにタイルの上を歩いて、口論する男女の声を察知すると、耳に集中してその方向を探った。左手だ。ちょうど応接室の方だ。すばやく周囲を見渡して誰もいないのを確認してから、植木の横を抜けて窓の近くへ移動した。

白壁に背をつけて立つだけで、会話ははつきりと聞こえた。

「エーレンフェストで仕事をしているとばかり思っていたのに、こんなところでどうしたんだ」

「スヴェンこそ、忙しいんじゃないかったの」

スヴェン。男爵家の長男の名だ。いつの間にかやってきたのだろう。呼びかけた方の声はユーリエで、ということはこれは姉弟間の会話ということになる。

ひよつとすると大手柄だ。早く出てきてよかった。なにひとつ聞き漏らすまいと思いつながら、私ははやる心臓をなだめるために意識してゆつくりと呼吸した。

「俺は毎年ここには来ているんだ」

「それは知らなかったわ。ダニエラつたと言わないんですもの」

「あいつは近頃まともに話ができないからな、ひどくなってるんだろ。そんなことより、あの子どもはなんだ。俺の書斎にあんなに物を運び込んで」

「お父様の書斎でしょう？ それに、ダニエラはよくしてくれてるわ。私、ちゃんとお父様に許可をいただいたのよ。ケルステンの別荘をこの夏、自由に使っていいって」

気弱そうに見えるユーリエも、弟に対しては能弁のようだ。

「俺だつてたまに使うよと、何年も前に……。ああ、もう、そんなことはどうでもいい。それで、姉さん、いつまでここにいるんだい」

「……しばらくの間よ」

ユーリエは口ごもった。

「しばらくつて、そんだよそれ。神殿をクビになったのか」

「違うわ。そんなわけないじゃないの」

神殿？ エーレンフェストの神殿といえば、水の神殿だ。ヴァン神教の総本山。あんなところに勤めているのか。

「ただ、大切な仕事があつて……」

ユーリエが声を潜めた。大事なところなのに聞こえないじゃないか。窓にもつと寄ろうとすると、誰かの近づく気配がした。なんて間の悪い。

「ああ、先生。おはよう。どうしたんだい、こんなところで」

庭師のおじさんだ。そうか、今日は赤の日だっけ。

「まあ、おはようございます、ティーロさん」

さりげなく窓から離れて、私は笑顔を作った。

「実は、さっきベルを鳴らしたんですけど、誰も出なくて……」

「ふうん。ダニエラのやつ、聞こえてねえのか、それともベルの調

子が悪いのかな。まあよくあることさ。儂にまかしときな」

先日会話をしたときにも思ったが、外見のいかつい印象とは違って、おじさんは人がいい。私の話を信じて、いそいそと扉の方へ歩いていった。私もその後をついて歩く。

「ダニエラ。ダニエラ！ 先生がお越しだよ」

ティーロはノックしながらダミ声を張り上げて呼んでくれたが、顔を出したのはダニエラではなくユーリエだった。

「まあ、先生。ごめんなさい、とりこんでいて気がつかなかったの。ティーロは帽子を取ってユーリエに挨拶すると、仕事に戻っていった。遅れてダニエラがエプロンで手を拭きながらホールへ転がり出てくる。このことで後でダニエラが叱られるかもしれないと思うと、なんだか申し訳ない気分になった。なんといっても、私は呼び鈴を鳴らさなかったのだから。

「誰だい、その娘は。いつたいここはいつから子どもの遊び場になったんだ」

注目を要求するような調子の声に、私は振り向いた。スヴェンは応接室のドアを開けたまま、不機嫌そうに壁に手をつき立っていた。整髪料で固めた頭から汚れない靴まで、高級品に身を包んだ彼はどこからどう見ても貴族だった。ユーリエとは大違いだ。

「そんな言い方はよしてちょうだい、スヴェン。先生、こちらは私の弟のスヴェン・ボルマンよ。しばらくこちらに滞在するの」

「はじめまして、カトリーネと申します」

姿勢を正し、緊張の面持ちを作って私は挨拶した。

スヴェンはじろじろと私を見た。

「先生だつて？ こんな子どもが」

「そうよ。先生、アディナ様がお待ちですから、どうぞ二階へ。ダニエラ、スヴェンと大事な話があるから、しばらく誰も部屋に入れないで」

ああ、それが聞ければいいのだが、二階へあがらないわけにはいかない。いい口実など考えつかず、結局私はそのままアディナの部

屋に向かった。

第11話 七月 四赤の日(2)

「まあ、やっと来たのねカリン。待ちくたびれたわ」

今日はピンクのリボンを二つ使って金の髪を束ねたアディナの、開口一番がそれだった。

「時間通りかと思いますが？」

「だって、だいぶ前に歩いてくるのが見えたわよ」
こいつめ。

「ダニエラがなかなか扉を開けてくれなくて……。お待ちせして、大変申し訳ありませんでした。さあ、ではお勉強を始めましょうか」
「もうそんな気分じゃないわ。通り過ぎてしまったの」

あなた一度だってまじめにお勉強しようとしたか……？
「ウィーダもきつと退屈してるわ。遊んであげないと」

言うなりアディナは窓辺に寄って、鳥籠に手を伸ばした。

「私はあなたにお勉強を教えるためにここに来ています。遊ばせるためではありません」

年の近い先生がいいから替えたとかいうのは嘘で、前の先生はこの生徒にさじを投げて辞めてしまったんじゃないか。きつとそうだ。そうに違いない。

「さつきねえ、こわいおじさんが来たのよ」

窓を閉めてかわりに鳥籠を開け、青い鳥を指の上に招きながらアディナは言った。

「いきなりドアを開けるからびっくりしちゃった。ウィーダも驚いてたわ」

話題を逸らそうとしているのは明白だったが、それは私も知りた内容だった。

「その人、なにを言っていました？」

「とつても怒つてたわ。勝手に他人を屋敷に入れるなんてけしからん、とか。あたしのこと、知らなかったみたいね。こっちも知らんぷりをしてやったけど」

「ユーリエさんのご兄弟のようですよ」

「そうみたいね。ユーリエが来て連れてったわ。カリンも会った？」

「ええ、さつき下で。……さ、その子を籠に戻して。窓を開けないと暑いでしょう」

アディナは唇をとがらせながらも従ってくれた。

私は椅子に座って、いつものように教科書と筆記具を取り出す。

「ねえ、お勉強が終わってから遊べない？」

アディナは窓を開け、椅子には座らずに私の隣までやって来た。

「それは、お勉強をしてから考えましょう」

「カリンはどうしてそんなにお勉強が好きなの」

別に好きだからあなたに教えてるわけじゃないんですが。

「なにがそんなに嫌なんですか？ お勉強ほど楽なものはないと思いますけど」

「お勉強が、楽？」

アディナは首をかしげた。

「そうですよ。だって痛くもかゆくも苦しくもないでしょう。ただこうしてペンを動かしていればいいだけ。疲れたら休むことだってできます。なにがそんなに嫌なのか、私にはわかりません」

「頭は痛くなるのよ」

なるほど。って、納得してどうする。

「たとえば、今日みたいにお日様のかんかな暑い日に、レンガを五つ抱えて積み上げに行つて、また戻つて抱えてきて、積み上げてを繰り返す仕事をするのと、このお部屋で座つてペンを動かしているのと、どっちがいいですか？ ね、体を働かせるより頭を働かせる方が、ましだと思つてでしょう」

「だってあたし、そんなことする必要もないもの。それにね、カリンは頭がいいからお勉強が楽しいのよ。一番なんですよ」

「それは、周りがバ……すすんでお勉強なさらないだけです」

授業中でも構わず髪の巻きを気にしたり、かっこいい天使様の絵を眺めて楽しんだり、こそこそお喋りしたり、舞踏会を夢想したりしている学院のお嬢さんたちを頭に浮かべて、私は今さらながらに先生方の苦勞を思いやった。

彼女たちとあまり変わらないのかもしれないな、この子も。

ただ、それでもお嬢さん方は授業中はちゃんと席についているし、先生が静かになさいと厳しく言うと、ちゃんとそのとおりにするのだ。ほんの少しの間だけではあるが。

やはり、私に足りないのは威厳だろうか。

「それに、アディナ様もよくできるじゃないですか。この間だって満点だったでしょう」

「でも、ひとつ間違ったわ」

「あのくらいの失敗は私でもやります。あなたは真面目にやりさえすれば、優秀な生徒ですよ。本も読めるようだし」

アディナは不思議そうに私を見ていた。なんだ、なにか変なことを言ったか。

「ほんと？ あたし、優秀なの？」

心なしか嬉しそうに、アディナは訊いた。そうか、忘れていた。満点を取った時、私は褒めてやるべきだったんだ。褒められて喜ばない子どもはいないし、そうすれば自然とやる気も出るだろう。

「ええ、とても」

「それは知らなかったわ」

アディナは真剣に言った。確かに、学校に行っていないなら、他の子と比べてよくできるかどうかなんて、わかるはずもない。少し遅れたが、言っただけでよかった、と私は思った。

第12話 七月 四赤の日(3)

「三藍の日の最後にあなたが解いた問題は、十歳くらいの子でも半分しかできないものだったんですよ。ちゃんと解けた時は、私も驚きました」

だめ押しとばかりに私は彼女をおだてた。これでやる気を出してくれるなら願ってもない。

「なんだ、そうだったの。ねえ、それじゃあ今日は遊んでてもいい？」

逆効果。

だめだこいつなに言っても無駄だ遊ぶことしか考えてない。

「そんなわけありません！」

「けち」

これは仕事、これは仕事、これは仕事。

心にしつこいほど言い聞かせて、私は平静を保とうとする。

好きな仕事を好きな時に好きなだけやっていればいいのなら、人生楽だろう。しかし誰だつてそうではない。だから私は今我慢をすべきなのだ。たとえ、これが自ら望んだ仕事でなかったとしても。

「カリンなんて大嫌い」

「嫌いで結構ですから、座ってください」

きつぱりと言ったが、アディナは下を向いたまま動こうとしない。仕方がないので、彼女の肩を手で押さえて、椅子の方に歩かせようとした。

「やめてよ。あたしを誰だと思ってるの」

知るわけがない。隠されているというのに。

「たとえあなたが皇女様だとしても関係ありません。私は先生様です。言うことを聞きなさい！」

勢いで怒鳴って、しまったと思ひながらアディナに目をやると、

彼女はぽかんとした顔で私を見上げていた。何にそんなに驚いてる？

まさか、図星とか――

「カリンは泣かないの？ どうして怒るの？」

どうしてこの状況で泣かなきゃならないんだ。いや、まあ別の意味では泣きたくもなるが。

「あたしが言うことを聞かないと、みんな泣くわ」

なんだそれ。おかしいんじゃないか。

「……それは、ユーリエさんも？」

「そうよ。あたしの聞きわけが悪いのは教育がイタラナイせいなんですって」

ユーリエなら言いそうだな。涙ぐんでいる姿をつい想像してしまっ

た。
「あなたの聞きわけが悪いのはあなた個人に問題があるからだとは思いますが」

「あたしもそうだと思うわ」

自覚があったのか。

「でも、ユーリエはそう思わないみたい。あたし、泣かれるのって困るの。だって、悲しくなるし、自分がとっても悪い人になったみたいな気がするでしょう」

「私は、泣いたりしませんよ」

「そうみたいね。安心したわ」

いや待て。安心されちゃ駄目じゃないか。むしろ泣いて困らせた方が事がすんなり運ぶような――ひよっとして、ユーリエはそれを知っていて泣き落とすのか。しまった。だけど今さら泣き真似したってはいじまらない。

結局この日はアディナを座らせるだけで半分の時間を費やしてしまった。その後も、アディナは机を太鼓代わりに叩いてリズムをとったりウィーダに話しかけたりするのに忙しく、歴史の本をたった三ページ読んでしかせただけなのに、その内容もちつとも覚えていないような有り様だった。

せつかくスヴェンが屋敷に現れたというのに、私がクビになる日は近そうだった。

家に戻ってから報告すると、ギルはもうスヴェンがケルステンに來たことを知っていた。

「私があのお屋敷に潜入している意味って、あるんですか……？」

「もちろんだよ。で、スヴェンはなんて？」

「まだ到着したばかりで、ユーリエがこちらに來ていることは知らなかったようです。もちろん、アディナ様のことも。なんだかもめていたようです」

「そうか。姉が居ることは計算外だったんだな」

「たぶんそうです。それと、ユーリエはケルステンにいる理由を仕事だと言っていました。……ユーリエが水の神殿に仕える光神官だって、あなたは知っていましたよね」

「ああ。言っていなかったかい」

「ええ、初耳でした！」

私が嫌っていると知っていて、わざと言わなかったに違いない。やはり、光神官か。どうりで貴族の割に、いつも地味ななりをしていたわけだ。

「資料にも書いてありませんでしたよ。あなたはどこまで知っていて、私に隠しているんです？ そりゃあ、私はただの調査員ではないでしょう。この子どもの容姿と記憶力くらいしか、他の調査員より優れたところなんて持っていない。でも、少しでも……、あなたの役に立ちたいと思っているんです。私なりに、調べて考えて、不正を暴きたいと思っていますんです」

「わかってるよ。別に、おまえを信用していないとか、そういうことじゃない」

ギルの声のトーンが下がった。なだめるような優しい声に。それだけでいたたまれなくなった。どうして言ってしまったんだろうと

後悔した。

「おまえは充分役に立っているよ。あの屋敷の中で見たこと、聞いたことを、ありのままに伝えてくれるだけでね」

ギルの手が私の頭の上で動かされる。くすぐったい。

「子ども扱いしないでください」

私は一歩引いて、その手から逃れた。

「もう部屋に戻ります。明日の準備をしますから……」

どうしてうまくいかないのだろう。どうすればうまくいくだろう。考えれば考えるほど、わからなくなる。

第13話 七月 四青の日（1）

あのわがままお嬢様を教えるようになって、まる一週間が経った、四青の日。

ぐったりするばかりの授業が終わり、帰りかけながらどうにかスヴェンの様子を探れないかと思っていると、本人の方から声をかけられた。

「きみ、カトリーネ先生。待ちたまえ」

「はい。なんででしょうか」

「ちよつと話があるんだがね。来たまえ、こつちだ」

スヴェンは時間はあるかとかそういうことも聞かず、勝手に決めて歩いていった。一階の応接室——先日立ち聞きした、ユーリエとの会話が行われていたあの部屋のドアを、スヴェンは開けた。

「そこに座つて。コーヒーでも淹れさせよう」

「あ、いえ、おかまいなく。先ほど、ダニエラさんにお茶をいただきましたから」

「そうかい？」

ゆつくりと、優雅に見えるような動作で、勧められたソファに腰掛ける。スヴェンは向かいに腰を下ろし、足を組んだ。

「ずいぶんかわいらしい先生だ」

どういう意味だろうか。

「おそれいます」

軽く頭を下げて答える。まずい、緊張してきた。コーヒーは淹れてもらふべきだった、そうすれば間を持たせることができたのに。

「きみ、フィリーネの特別入学で、しかも今学期の成績が一位だった？」

「はい。おっしゃる通りです」

「すごいな。俺は勉強は嫌いだったけど、それだけでできればさぞかし学校も楽しいだろうね」

さあ、ここで何と言うべきか。

受け答えをするたびに、それを考えていた。そのせいで人より少し話しはじめるのが遅くなった。しかしそれは「控えめな人」という印象を周囲に与えたようで、今ではその間を意図的に作るようにしている。

「先生方のご指導の賜物ですわ」

うむ、とスヴェンは片眉を持ち上げた。そしておもむろに立ち上がり、両手を合わせて揉むようにした。

「ちょうど避暑に来ているところを、姉さんに雇われたそうだな」

ちょうど、をわざとらしく強調しながら、スヴェンは言った。

「ええ。暑中休暇の二ヶ月間、こちらでゆつくりと過ごそうと思っておりましたら、折良くお声をかけて頂きまして」

普通の少女ならば、ここで何と言う？

それはもう考えなくとも反射的にできるようになっていた。努力の成果とも言うべきか。

「なぜ、わざわざケルステンに？ 同じアイスラー地方でも、もつと開けているいい場所がたくさんあるはずだが。たとえば、クレリングなんかがそうだ」

「それは、スヴェン様と同じ理由だと思います。たまたまおじさま……、義父の別邸がケルステンに建っていたから。それだけですわ」

私は、なにが問題なのかさっぱりわからないという顔を作った。

どうやらスヴェンは私の素性について探りを入れたようだ。それはやはり、後ろ暗いところがあるからに違いない。

「きみのことは調べさせてもらったよ。ギルベルト・マクシウスの養女。マクシウスというのはビレンブラント社の契約社員だそうだね」

スヴェンは一言ずつ踏みしめるように部屋を歩いた。私の座っているソファを中心に、ぐるりと円を描くようにして。

「はい。ユーリエさんにもすでにお話した通りです」

大丈夫、この男は何も掴んではない。ただ、問題がないかどうかどう

か確認したいただけだ。

「それにしてはすいぶんと、生活に余裕があるようだが」

スヴェンが横に回ってしまって、目のやり場に困る。とりあえず前を見ると、自然に、壁に飾ってある絵画が視界に入ってきた。

趣味の悪い、ごてごてした宗教画だ。

二人の天使が、そこにはいた。揃って金の髪、青い瞳で、向かい合ってたがいに手をさしのべている。けれどその指先は、もう少しのところが届いていない。二人が見ているのは互いの姿で、彼らが救済する対象である地上の人々は絵の中にない。中央にあるのは太陽で、そこから放射状に光が伸びている。左右対称である構図だけが、旧教の美意識を残しているようだった。

「仕事のことは、私にはよくわかりません。でもお金のこととは心配いらないから好きなだけ勉強して必要な物は買えばいいと、おじさまはよく言ってくださいます。貿易をしていたご両親の遺された財産があるのですって」

私はこの天使というやつが好きではなかった。はつきり言えば、大嫌いだ。

できれば目を逸らしたいくらいなのだが、この絵がとにかく大きい。私の身長よりずっと高い縦幅、そして横幅は縦幅を超えているのである。視界から閉め出すには目を閉じるか不自然にうつむくか横を向くかくらいしかなく、そんなあからさまなことをするわけにはもちろんいかない。

それで、逆にじっくり見ながら、絵のあらを探すことにした。指の曲がり方が変だとか、右の天使は陶醉しきった表情をしてるなとか。

第14話 七月 四青の日（2）

「今じゃ歴史あるフィリーネでも、学力がずば抜けていれば平民でも入れるそうじゃないか」

スヴェンがまた動いて、私の真後ろに立った。

「ええ、そうです」

学校に限らず、官吏でも、能力があれば採用される。テニエスが皇国と称するようになってからの政策で、唯一まともなのがこれだというのが、ギルの酔っぱらったときの口癖だ。

「そしてきみは、二年前、ネーフェの孤児院からマクシウスに引き取られている」

そこまでは、ユーリエにも話していない。調べたというのは本当のようだ。

「その通りです。覚えがよくて見込みがあると、推薦していただきました」

「ほう、それは初耳だ。ネーフェの方に問い合わせてみたらね、別の所と合併して先生がごっそり入れ替わったとかで、詳しい話が全くわからなかったものだから……。きみのご両親は、どうして亡くなったのかな？」

たかだか三日かそこらで、よくもそこまで。

「父は私が六歳の時、戦地で亡くなりました。兵士だったんです。

母は私を一人で育ててくれたのですが、無理がたたったのか、父のことがショックだったのか、その翌年に……」

背中からの視線を感じながら、私はうつむいてみせた。何度も繰り返した嘘だ。間違うはずもない。

「アリアーガ戦役か。きみのお父上はヴァン神の加護を広めるための戦に貴い犠牲を払ったわけだ」

芝居じみた口調に、気分が悪くなる。

カトリーネ、あなたは今悲しいの。亡くなった両親のことを思い出したのだから。でも、そう、いつまでも引きずってはいけないわ。この人はどうしてこんな事を聞くのか考えてごらんさい。「……あの。男爵家では孤児は雇わないという決まりでもあるのでしょうか」

「そんなことはないさ。孤児なんて今時、珍しくもない」

「それなら、安堵いたしました。人に教えることには不慣れで、私……。うまくいきませんの。でも、アディナ様のことは好きなんです。ご両親と離れておひとりで、おかわいそうでしょう。ですから努力したいと思っています。どうか、クビにするなんておっしゃらないで」

うまく声が震えた。

「いや、そんな話ではないさ。安心したまえ」

ほつと息をついて、胸の前で握った手をほどく。

「ただ、雇い人のことは知っておかないとね。家の中に入れるのだから、ちゃんとした人間でないと困るだろう」

「それでしたら、大丈夫ですわ。なんでも訊いてくださいませ」

私の左手の方に立ったスヴェンににこりと微笑みかける。スヴェンはうなずき、ようやく向かいのソファへ戻った。こちらからだ、スヴェンの頭の真上に、絵の太陽がくる。これは狙った配置なのだろうか。

ちようどいい。話を逸らそう。

「それにしても、素晴らしい絵画ですのね」

スヴェンを見てちようど目に入ったという風に、私はうつとと言った。こんな絵を飾るのは成金趣味か妄信的な天使崇拝者のどちらかであろう。こう褒めておけば、悪い気はすまい。

「そうだろう。絵師を雇い、特別に描かせたのだ。完成までに二年かかったが、待った甲斐があつたというものだ」

スヴェンは身をのりだして言った。なんだ、両方か。

「これは双歴一五二八年の天使降臨がモチーフなのでしょうか？

だとしたら、右の天使様は一番天使のサズナ様、左の厳しいお顔の方は三番天使のメイサス様ですわね」

「その通り！ きみ、なかなか詳しいじゃないか」

「学院の授業で習いますもの。でも私、神学の勉強はとても好きなんです。だって、私が今の父と出会えたのもきつと、天使様のおかげですもの」

私は心にもないことをぺらぺらと喋った。わかりやすいことに、スヴェンはすっかり機嫌を良くして、ヴァン神教のすばらしさについて肩がこるほど語りはじめた。

うまく食いついてくれたのはいいが、スヴェンの話はどんどん長くなり、ダニエラがお食事が冷めてしまいますと呼びに来てくれなかったら日が暮れるまで続いたんじゃないかとさえ思えた。

報告書によれば、スヴェン・ボルマンは三十一歳。ボルマン男爵家の長男で独身、教団派。持病は特にない。気前が良く、女好きで、賭博もよくやっているらしい。社交界での評判はまずまずだ。

その一方で、密造酒の売買に携わっているとか、高利貸しをしているとか、この一、二年で黒い噂が流れはじめている。昨年、教会に多額の寄付をした件でも、出所が怪しいとかなんとか——要するに、いくつかタレコミがあったのである。

その実態を調査するため、私は毎夏彼が訪れるという別荘にあらじめ送り込まれたのだ。

スヴェンが来てからというものの屋敷の門には警備が置かれるようになっていて。やはり、狙われるような何か、もしくは隠さなければならぬような何かがあるのだろう。それを探るのが私の役目なのだ——、正直、それどころではなかった。表向きの仕事であるところの家庭教師業が、さっぱり、うまくいかないからだ。

第15話 七月 四藍の日(1)

その翌日も、アディナは好き放題にやらかしてくれた。

この部屋だけ、昨夜は嵐だったのか？

ドアを開けた瞬間、そんな馬鹿げたことを考えた。室内はそれはひどい有り様だった。馬やら船やらのおもちゃが散乱し、椅子は二脚も横倒しになり、人形たちが総出で床を宴会場に使っていた。

足の踏み場もないとはこのことだ。

「……おはようございます」

その人形の輪の中心にアディナの姿を見つけて、一応挨拶をする。彼女はにっこりと笑った。

「おはよう、カリン。ああ、いけないわ。そこは壁よ。ドアはこっちなの」

アディナは椅子と椅子の間を指し示した。どうやら私には見えな人形の館がこの部屋の中に存在しているらしい。

もちろんそんなふざけた遊びに参加するつもりはないので、私は目の前に転がっている椅子を持ち上げた。

「だめよ！ 壊さないで」

制止の声を無視して、唯一元の位置にあった机の側へ椅子を運ぶ。おそらく、机は重すぎて動かせなかったのだろう。彼女の細腕では無理もない。

「せっかく作ったのに、ひどいわ」

アディナは唇をとがらせて抗議し、私を取り上げようとした人形を抱きしめて死守した。

座り込んでいるアディナはとりあえず放っておいて、私は彼女が持っている人形以外の物を全て片づけた。元の位置であったかどうかの自信はまったくない。要するに、適当だ。

椅子を引きずったせいだろう、波打っている絨毯も平らにして、

ようやく勉強のできる環境が整った。

「さあ、座ってください」

椅子の背に手を置いてアディナを見ると、彼女は取り壊された人形屋敷の跡地の真ん中から、ふてくされて私を睨んだ。

「座りなさい」

重ねて厳しく言ったが、アディナは頑として動かない。

「カリンのほか。意地悪」

確かに、意地は悪いかもしれないが、少なくとも馬鹿ではないつもりだ。だから腹は立たない。ハゲていないのにハゲと言われても何ら痛痒を感じないのと同じだ。

子どもの語彙ではこんなものだろう。だから私は余裕たっぷりに微笑んで言ってやった。

「……なんとでも」

「けちへびきゅうり」

なんだとこのガキ。

まあ、いやだ。ムキになつては駄目よカトリネ。

相手は小さな子どもじゃないの。甘やかされて育った貴族の子どもなんてこんなものなのよ、きつと。

「怒ってもいいのよ」

アディナは人形を腕の中に閉じこめたまま、挑戦的に私を見上げた。

「怒りません。こんなくだらないことで」

落ち着いて、まずはばれないように深呼吸。張り合って言い返したりしたら相手の思うつばだ。

「本当は怒ってるでしょ？」

「怒ってません」

「うつん、怒ってるわ。わかるのよあかし」

私は動こうとしないアディナに背を向けて、自分の準備を進めた。鞆を開け、本を取り出し、机の上に載せる。

「ぶす」

「誰がつ！ こう見えても一応、告白されたことくらい……」
しまった。

アディナは肩を震わせながら大いに笑ってくれた。

「カリンって面白いわ」

笑いすぎて苦しがつてしまいいには咳き込みだしたが、大丈夫ですかなんて声をかける気にもならなかった。

第16話 七月 四藍の日(2)

「ふざけんな！」

思い切り部屋の壁を蹴りつけてやったら、かなり痛かった。平気な顔をして家まで歩いてきたが、人目のないところまで来て少しづつ思い出したら、どんどん苛立ちが募ってきて——手近な物にあらなければ気が済まなかったのだ。

音に驚いたのか、ギルがやってきた。珍しく、ちゃんとした汚れない服を着ている。

「おかえり。ご立腹だね、可愛い生徒がなにかしでかしたのかい」
「かわいい？ どこがだ。」

「ああ、しでかしてるよ。あのガキ、勉強しないどころか悪戯ばかりしやがって、今日なんて爪で引っかかれた」

「いっそ殴ってやろうかと考えたくらいだ。さすがに思いとどまったが。」

「ずいぶんやんちゃなご令嬢だ」

ギルは芝居がかった仕草で肩をすくめる。

「ところで、エル。僕と話す時でもちゃんとテニエスの言葉を使うようにと言わなかったかい」

「……あ」

しまった。ひっかけられた。

私は途端に冷静になった。

なんて迂闊なんだろう。こんなだからさっきも、うっかりアリアーガの言葉で怒鳴ったりしたんだ。子どもが相手アディナで良かった。きょとんとして「今なんて言ったの？」って聞かれた時には冷や汗をかいたけど。

それにしても、わざわざアリアーガの言葉で話しかけてきたギルも相当意地が悪いと思う。テニエス語だったならきつと、すぐに頭

を切り換えられたのに。

私の話すテニエスの言葉は、フィリーネのお嬢さんがたに染めていただいたものだ。どこから聞いても上品な、女性特有の喋り方。私は普段から、カトリーネらしくあるために、思考すらテニエスの言葉でするように心がけている。

一方で私のアリアーガの語彙といえば、片田舎の、乱暴なものだった。それしか知らないというわけではないが、話すとなると身に染みついた田舎言葉の方が出てきてしまう。

「申し訳ありませんでした」

うん、とギルが頷く。なぜか嬉しそうに。

「おまえがそんな風になにかに憤るところを初めて見たよ」

「……すみません」

感情的になりすぎだ。子ども相手に。

「いや、悪いとは言っていないよ。それより、ずいぶん苦戦してるようだね」

「はい。いろいろと方法を考えてはいるのですが……、どんどん悪化していくみたいです。今日はなにひとつ進みませんでしたし」

そう言うともた落ち込んできた。やっぱり、家庭教師として別荘に出入りするなんて無理があつたんじゃないか。

「クラスで他の女生徒たちに勉強を教えたりしたんだろう」

「学院のみなさんは私より年上で、少なくともあのお子様よりは落ち着きがありました。第一、お嬢様方は教えて欲しいと自分から来るんですから、やる気があります。そう、あの子にはそのやる気が全然ないんですよ！ だから、人の話を聞かないし、席に着こうともしないんです」

「じゃあ、やる気を起こさせればいいわけだ。ひとつ解決したね」
そんな簡単なことじゃないんです、と反論しようとしたが、ギルがそれより早く話題を変えてしまった。

「そうそう。今日、フローエの旦那さんに会ったよ」

「え、ダニエラの？」

「うん。ちょっと気分転換に散歩したくなっただんでね、ハーブ園まで行ってそれとなく聞いたんだ。あの子どもだけど、体が弱いから夏の間涼しいところについていうんで親がこっちによこしたらしいよ。それが本当かは知らないけどね」

それでは、あの日は本当に具合が悪かったのだろうか。確かにかなり痩せてはいるけど、普段は元気いっぱい健康そうに見えるぞ、あの子。

「それから、ダニエラがおまえのことを礼儀正しいいいお嬢さんだつて褒めてたつてさ」

「……はあ。それはよかったです」

そうか、情報収集で町に出かけていたから、今日のギルはまともな格好をしているのか。

「で、ここからが面白いんだが」

意味深に前置きをして、ギルは椅子に座った。どうも長い話になるようだ。ギルの意図を了解して、私も椅子を引いた。

「裏山の所有者はやはりボルマンだそうだよ。あの辺一帯、全部だ。それとね、あの別荘の元の持ち主もわかったよ。これがずいぶん古い話で……」

第17話 七月 四紫の日（1）

その日は朝から雨が降っていた。

よって、別荘までの道のりには傘の力を借りることとなった。こんな日にまた追い返されたりしたらたまらないな。昼前に帰る頃には止んでいればいいけど。

雨だと、あの子はご機嫌ななめかもしれない。でももしかして逆に、雨も好きだとはしゃいでいたりするだろうか。そんなことを考えながら頭の上ではねる水の音を聴いた。

屋敷に着くとダニエラが「雨の中わざわざありがとうございます」とねぎらってくれて、湯気のアがるハーブティーを二人分持たせてくれた。

トレイを片手に階段を上り、いつもの南端の部屋をノックする。が、珍しく返事がない。

「アディナ様？」

呼んでみても反応がないので、仕方なく勝手にドアを開けた。いつまでもトレイのバランスを保っているのは疲れそうだったから。ウィーダが籠の中で羽ばたく。それ以外、動くものはなかった。広い部屋はアディナひとりがないだけでひどく色あせて見えた。閉め切つてある窓を雨粒が叩く。机にハーブティーを置いて、私はアディナの名をもう一度呼んだ。やはり返事がない。

どうということだ。もしかして、誘拐とか。いやまさか。

どっちにしてもユーリエかダニエラに報告すべきだ、と思いついたとき、机の上の置きっぱなしの本になにかが挟まっているのに気づいた。

フィオナ・オレアリー著、『外つ国訪問記』だ。開くとカードが

出てきた。

「カリンへ。今日はかくれんぼをします。カリンが鬼です。私をみつけれたら、授業をはじめましょうね。アディナ」

「ご丁寧に縁飾りの絵まで添えられている。例によって下手くそだ。

あの、クソガキめ。

私は深く深く溜め息をついた。

探し出してどなりつけてやるべきなのかもしれないが、なんだか急にどうでもよくなってきた。思惑に乗ってやるのも癪だし、怒りが限界を超えたというか、馬鹿馬鹿しくなったというか、呆れ果てたというか。

もういい。ここはあえて無視してやろう。

私はアディナがふざけた伝言を挟んでいたページより前の方をめぐり、章の分かれ目で手を止めた。

読もうと思えばいつでも読めたが、そのつもりになれなかった本。椅子を引いて腰掛けた。どうせすることもない。ちよつとくらい、読んでやるかな。

第三章「アリアーガの少年」

この章ではアリアーガを訪れた時のことを記そうと思います。聖歴二四年の春先、ちょうど一年前のことでした。特になにか目的があったわけではありません。まとまった時間がとれそうだったので、旅に出ようと思い立ち、さてそれではどこへ行こうかと考えた時に浮かんだのがアリアーガだったのです。

改めて言うまでもなく読者のみなさんにはお見通しでしょうが、異国に出かけるのが私の趣味です。生き甲斐と言い換えてもいいでしょう。

アリアーガも若い頃からいつかは訪れてみたいと思っていた国のひとつでした。実際に計画を立てたこともあったのですが、残念な

ことに戦争がはじまってしまい、旅行どころではなくなりました。それが七年前のことです。

行けぬとなればますます行きたくないのが私の性分で、アリアーガへの思いはますます強まりました。そこでこの休暇の時は、丁度いい、すぐ行くこと、思い立ったその日に準備をはじめたのです。

みなさんがこれを読まれる頃にはどうなっているかわかりませんが、当時のアリアーガでは局地的な混乱が続いていました。ですから、一般的な国民から見ればアリアーガはまだ物見遊山に出かけられるような場所ではありませんでしたし、友人にももう少し待ったほうがいいと止められました。しかし好奇心旺盛な人間の性、とでも言っておきましょうか、私はそういうアリアーガも見てみたかったです。これからテニエスに染められていくであろうアリアーガも、今ならまだ私の見てみたかった元の色を残しているだろうと、そう考えたのです。

かつてのベルトラン・アリアーガ国境付近から、私はアリアーガへ入りました。古くはクレスパインを興したイグレシア率いる解放軍、近年では悪魔征討軍も通ったというロルカ街道を馬車で南下したのです。

しばらくは、両脇に広がっていたのは荒地でした。私の行く道の先は蛇のようにうねって細くなり、空の青と出会って途切れる。進むたびに蛇はその形を変えるので、私は馬車に揺られながらそれを見つめて楽しみました。また、横たわっている大岩を目にしては、これはいつからこの姿でここにあるのだろうか、古代の戦士達は何に似ていると言い合っただろうかと空想しました。

もちろん、この道を行き来したのは軍隊ばかりではないでしょう。大荷物を積んだ商人も、国を追われた貴族も、異国に嫁ぐ姫君も通ったはずです。かの有名な南トラインからギリシアに嫁いだ最後の王女のことを私は思い出しましたが、その時たまたま、どうしてもその名を思い出すことができず、もう年だろうかと不安になったものです。みなさんはご存知でしょうか。もちろん、カルディナ王女の

ことです。しかし帰ってから調べて知ったのですが、カルディナ王女は船で内海を渡ってギリシアへ向かったそうで、ロルカ街道は通らなかったそうです。

突然、奥のドアが開けられた。飛びだしてきたのはアディナだ。どんな隠れ方をしていたのか知らないが、金の髪がくしゃくしゃになっっている。

「カリン！」

私は本を閉じ、にこやかに応じた。

「まあ、そちらにおられましたか」

アディナは机の上のカードと私の手にある本とを見比べて、伝言がちゃんと読まれたことを察したらしい。

「ど、どうして探しに来ないのよ。あたしが勉強しなくてもいいって言うの？」

「お勉強したいのですか？ それなら、どうぞ座ってください」

第18話 七月 四紫の日(2)

アディナはむくれて黙り込んだが、決して座ろうとはしなかった。ただ小刻みに震えながら絨毯の柄を睨みつけているだけだ。怒っているのか、泣きそうなのか。もうどっちだって構いはしない。好きにすればいいのだ。

私は閉じていた本をもう一度開いた。どこまで読んだっけ。

と、目的のページを開くより先に、訪問記はひったくられた。

「これはあたしの本よ！」

ああ、やつぱり怒ってるんだな。

「それは、どうもすみません」

アディナは本を胸に当てるようにして抱え込んだ。別に取り返そうとも思わないので、私は今日初めて筆記具と教科書を取り出し、机の上に置いた。いつもの倍くらいの時間をかけて。

「……あたし、今日はお勉強しないわ。だってカリンは私を見つけられなかったでしょう。約束だものね」

一方的に宣言されたものは断じて約束とは言わない。

「でも、もう一度だけチャンスをおいてもいいわよ。あたし、また隠れるから、見つけてくれれば許してあげる」

私はカモミールのお茶を口に運んだ。まろやかな舌触りとさわやかな香り。少し冷めてはいたが、かえって飲みやすかった。すっきりした後味と一緒に気持ちが落ち着いていく。カップをソーサーに戻し、息を吐いてから、私ははつきり言った。

「あなたがどれだけサボったって、どんなに頭が悪くなったって、私は困りません。こうしておいしいお茶をいただけで、座っているだけでお給料がもらえるのですから、こんなに楽な仕事はないでし

よう」

別に、始終見張られているわけでもなし、なにをどこまで教えましたと毎日報告してるわけでもなし。だいたい本業じゃないのに、勉強を教える段階で苦勞するならまだしも、授業をはじめることにここまで手こずらされるなんてのは、契約外だと思う。

「あたしが全然勉強してないってわかったら、クビになるんじゃないの？」

「私をクビにしたいのならすればいいですよ。なにも椅子に縛りつけてまで勉強させようなんて思っていないから、勝手にしてください」

もう一度カップを手にして、お茶を飲む。なんだか少し暑くなってきた。雨のせいで空気が湿っているんだ。汗が気持ち悪い。

「あなたがお勉強しないのは、私が気に入らないからですか。それとも、お勉強自体が嫌なのですか？ 誰が教えたって勉強しないなら、替えても無駄でしょう。私は毎日来てこうしてここで黙って座っていますから、好きに遊んでください。もし他の先生であれば勉強するというなら、すぐに探してもらえばすむことです。どちらにしますか」

できるだけ冷たい目でアディナを見ると、彼女はうつむいたまま、さつきと変わらない姿勢で立っていた。腕の中に守られた本は、奪われてはならない宝物のように見えた。

「だって、カリンはあたしのことが嫌いだわ」

小さな声だった。それはどちらの答えでもなかった。しずくが落ちて、ほんの小さな部分だけ絨毯の色を染め変えた。

「……そんなこと言ってません」

だいたい、それが泣くほどのことか。

「言わなくても思ってるわ。だったらもう帰ってよ。あたしだって嫌になるから！」

アディナは本を投げつけ、また大きな音をたてて寢室の方に引っ込んでしまった。本は私の肩にあたって落ちた。

……なんだそれ。

私は、嫌がらせをされていたんじゃないのか？

これじゃあまるで、こっちがいじめたみたいじゃないか。

本を拾って机の上に置くと、伝言のカードが目に入った。よくわからないが多分、あの子は私に追いかけてきてほしいんだろう。それだけはわかった。

寝室に踏み入るのは気が進まなかったが、仕方ない。そつとドアを開けてみると、アディナは大人が体をうんと伸ばしてもはみ出すことのないような大きなベッドの真ん中に埋もれて——正確には、うつぶせていた。

「入りますよ」

返事はなかった。断られないのいいことに、私はベッドの端に腰掛けた。うわ、柔らかすぎる。

よく見ると、室内は以前のぞいた時とはずいぶん違っていた。なんとというか、あちこちが変なのだ。姿見の位置がずれていて壁の間に妙な空間があるし、タンスの隙間から服の裾がはみ出しているし、カーテンが妙にふくらんでいるし、ベッドの横にはいつもなら本棚の隣に座っているはずの人形が転がっている。

おそらく、これは偽装工作だ。隠れている場所をすぐに知られないために、アディナがわざわざ準備したのだろう。

カードの凝り方といい、なんて暇なんだ。ひとりでいそいそこの小細工にいそしんでいるアディナを想像して、私は思わず笑ってしまった。

「なにがおかしいのよっ！」

アディナが勢いよく体を起こして、涙でぐしゃぐしゃになった顔を見せた。

「お目覚めですか？ おはようございます」

その情けない表情を目にしたりますます笑いがこみ上げてきたが、どうにかこらえた。こんな子どもを相手に本気で憤っていたことが馬鹿らしかった。

第19話 七月 四紫の日(3)

「帰ってって言ったじゃない」

アディナは手のひらでごしごしと顔をこすったが、その結果は真っ赤になった頬じゅうに涙を広げただけだった。

「私は、あなたのことを嫌いじゃありませんよ。ちゃんと言うことを聞いてくださればもつと好きですけど」

潤んだままの青い目が私を見ていた。

「それに、私を大嫌いなのはあなたの方でしょう」

「あんなのウソよ。信じないで」

はじめからそうして素直にしていればかわいいのに。

アディナは鼻をすすりながらももう一度涙を拭い、それから私の腕に触れてきた。

「あの、痛かった？ ごめんね……ごめんなさい」

「ああ」

昨日のことを、アディナは彼女なりに気にしていたらしい。私は一晩眠ったらすっかり忘れていたというのに。

「あたしもひつかいていいわよ」

少し考えるようにしてから、覚悟を決めたような表情でアディナはそう言った。

「できません、そんなこと」

「人に痛みを与えたら、自らもそれを受けなさいって。対等にならないといけないんですって」

どこの教会長のありがたいお言葉だ、それは。

「対等じゃないですよ。だって、私はもう怒っていませんから」

「じゃあ、明日からも来てくれる？」

「それは無理です」

アディナはまた泣き出しそんな顔をした。

「明日は聖休日ですから。赤の日になったら、また来ます」

「ほんと？」

「仕事ですから」

私は乱れたままの金の髪を撫でた。ギルがしてくれたことを思い出しながら。

「カリンって、お母様みたい……」

それはかなり嫌だ。

そう思ったけれど、膝の上にすり寄ってきたのを放り出すわけにもいかないので、結局私の手はアディナの柔らかい髪に触れたまま。
「でも、時々は遊んでね、カリン」

仕方ないなあ、もう。

「悪魔が出るらしいね」

その夜、突然部屋にやってきたギルは、予想もしない話題を口にした。

「は？」

私の間拔けな声とほぼ同時に、しゃきんと音をたててハサミが布を切り落とした。

「いや、町で噂になってるんだよ。夜中に怪しい人影を見た、悪魔に違いない、ってね」

「はあ。どうしてそうとわかるんですか？」

「天使と違って悪魔はわかりやすいよ。僕は研究熱心だからね、ちゃんと調べたんだ」

悪魔はデニエスにはいないはずだ。なんといっても天使の守護する国だから。少なくとも、教団はそう主張している。

私は針刺しから一本抜いて、糸の先を舐めた。

「悪魔に関してはいろんなイメージが出回っているが、ひとつだけ共通している部分があるんだ。これは確からしい」

注意深く針に糸を通しながら、ギルの演説に適当な相づちを打つ。

「ツノでもあるんですか」

「いや、目が赤いんだそうだよ。本当に知らなかった？」

「悪魔の特徴なんて学院では教えませんよ。天使のことなら嫌というほど聞かされますけど」

「なるほど」

無事に糸が通ったので、私は布きれをとりあげた。

「まあ、噂されてる悪魔っていうのは要するに、その怪しい人物っていうのが顔を隠していたってだけの話らしいけど」

「なんですかそれ」

「だから、目が赤いのを見られないために、悪魔はいつも顔を隠してるって話なんだよ」

その理論だと、目深にフードをかぶっている人物は全員悪魔だということになってしまふ。要するに、くだらない噂だということはよくわかった。

「白ウサギでも怖がっていればいいんですよ」

本気で面白いと思ったかどうかは知らないが、ギルは軽く笑った。

「どっちにしても、怪しい人物がうるついてるってのには違いがない。要注意だね。ところで」

ようやく本題だろうか。

「おまえは何を作ってるんだい」

違った。なんだ、ただ暇を潰しに來ただけか。

「クツションです。アディナ様が今使っている椅子、低いんですよ。どうも集中力が続かないと思ったら、テーブルが高すぎて肩がこるみたいなんです。だからこれを敷いて座らせよう」と

ナネットに分けてもらった端切れは、大きさも色も柄もまちまちだったが、パッチワークにすればそれなりに派手になり、アディナも気に入ってくれるのではないかと思えた。

「ふーん。学院では裁縫も教えているんだっけ？ まったく、おまえは器用だね」

「そうですか？ 私、実技は苦手です。手芸の先生にはセンスがないと言われたこともあります」

今度こそギルは大笑いしてくれたが、あまりうれしくなかった。

第20話 七月 第四聖休日（1）

眠りにつくまで降り続いていた雨も、目が覚めればあがっていた。いつもなら朝食の後すぐに準備をして男爵の別荘へと向かうのだが、今日は聖休日だ。仕事はせずに祈りを捧げる日と決まっている。敬虔な信者たちは普通、昼前から教会へと出かけるのだが、私はこの暑中休暇に入ってからというもの、一度も礼拝に参加していない。ギルもそうだ。だが今日は支度をして教会へ行こうと私は決意していた。

それもこれも、情報を集めるためだ。ダニエラと違ってほとんど部屋に引っ込んでいるためになかなか話す機会の見つからないユーリエをつかまえるというのが第一の目的で、ついでにスヴェンとも話せれば言うことはない。光神官だということからはユーリエは礼拝を欠かさないだろうし、スヴェンもあの崇拜ぶりなら来てもおかしくないだろう。

そういうわけで、私は晴れあがった空の下、町の教会へと向かった。昨晩のうちに仕上げたクッションを手提げ鞆におさめ、礼拝用の白い服を着て、いつものように編んだ髪を揺らしながら。さわやかな風が吹き、混じりけのない鮮やかな白の雲が少しずつ形を変えて流れていた。こんな日は、全てうまく回っていきそうな気がする。教会はケルステンの中心部にあり、オルデンベルクや他の町のものと同じように、外壁が渦を巻いていた。敷地に足を踏み入れた瞬間から儀式は始まっている。螺旋を描きながら歩く人波の中、誰一人として口をきく者はない。それは話をしてはいけないという決まりがあるからではなく、三步の間息を吸い、次の三步の間は吐くという、呼吸のリズムがあるからだった。

緩やかなカーブを描いた後で、開かれたままの扉の中に人々は吸

い込まれていく。礼拝堂の中ではすでに大勢が席に着いていた。ざっと四百人はいるだろうか。田舎の割に熱心なことだ。これだけいれば、私がこれまでこの町の礼拝に参加していなかったことなど、誰も把握してはいないだろう。

私は列を作ったまま歩き、足が止まったところの席に腰掛けて小さなカップを取り出した。それを目の前のテーブルに置いた後は、準備を済ませた他の信者たちと同じように、膝の上で手のひらを重ねて目を閉じた。

このテニエス風の礼拝が、私は嫌いだった。かといって故郷のものが今でも好きなのかと問われると、複雑だとしか答えようがない。幼い頃は確かに、神に祈ると澄んだ気持ちになれると感じていたはずだ。けれど今はそれに意味を見いだすことができないから、結局どんな形式であっても、あまり好きにはなれないのだろう。

重々しく響く遠雷のような音が背後でして、扉が閉まったことを知った。目を開けると、壇上に白い聖服をまとった教会長が立っているのが見えた。いよいよ始まるようだ。好きになれないのは事実だが、学院の寮でも簡略化された礼拝の時間があるので、主義を曲げて参礼すること自体は今さらどうということもない。むしろ学院のものより気楽なくらいだ。なぜかというに、学院では説教の感想を述べさせられたり内容を自分なりにまとめて提出することを求められたりするからである。つまり、ここでは注意深く聞く必要がない分だけ気が楽なのだ。

そんなわけで神妙に聞いているふりをして説教の時間をやりすごそうと思っていたのだが、いつもの癖でついすっかり耳を傾けてしまった。結果、後でまとめられることを意識している分、学院の教長の方が筋の通った話をしているということだけはよくわかった。

説教が終わり祈りの時間が過ぎると、甘いお茶がふるまわれた。皆が持参のカップの中に、光神官たちが注いで回るこの液体は、天上の飲み物だということになっている。とろりとした不思議な舌触りで、たった一杯を飲んだだけで夜までお腹が空かない。聖休日

これを昼食代わりにするのが信者たちのならわしで、たいして信心深くなくともこれを目当てに礼拝に参加するという者までいるくらい人気の一品だ。まあ、節約の一環としてならありだろう。

この味が好きだという女生徒は多かったが、私の個人的な感想としては良くも悪くもない。甘いのだがどこかぴりりと舌にひっかかるような気がする。少なくとも、他のどの飲料とも違う味だ。

あまりたくさん飲もうというつもりになれないので私はわざわざ小さめのカップを持ってきたのだが、ちなみに、大きなカップを持ってきても少なめに注がれるだけである。物好きの誰かさんが様々なカップで通って実証済みだ。その誰かさんは自分の研究結果に満足して以来教会に興味を示さなくなり、今も家でごろごろしているはずである。

そんなことはどうでもいい。ユーリエを探そう。

私はカップのお茶を一気に飲んで、席を立った。

お茶が配られた後に静寂を守る必要はなく、祈りの間は一転して社交場と化している。飲むだけ飲んでささと帰る者もいれば、知り合い同士呼び合って近くの席を確保したり、立ち話を始めたりと様々だ。

私はとりあえず扉の近くで邪魔にならないよう気をつけながら立ち、出て行く人々の姿を確認した。たまたま目の前で転んだ子どもを立たせてやった時、脇から若い女性の声がかかった。

「まあ、カトリーネさんではなくて？」

ケルステンで私を見知っている人間はそれほどいない。聞き覚えのある声だったが、残念ながらユーリエではなかった。

イエニー・カペル。こんな辺鄙な田舎町には似合わない都会風の貴婦人だ。私は挨拶をして、一歩下がった。人通りを避けるためにカペル夫人も自然な様子で私に歩み寄り、そつとささやいた。

「調子はいかが？」

「はい。特に変わったこともなく……」

「そう、気をつけてね。ギルベルトは一緒じゃないのかしら」

彼女はフィリーネ女学院の卒業生で、大地主の妻であり、私とは違って生粋のお嬢様だ。それにもかかわらずギルと親しく、色々と情報を流してくれる「お得意様」の一人だった。

第21話 七月 第四聖休日(2)

「あの人は留守番なんです。男爵家の方をここで見かけませんでしたか」

「お仕事熱心なのね。見てきましようか」
「いえ、そこまでは」

「あちらの方でね、町の婦人会の皆さんが集まるらしいわ。ほら、お聞きになったかしら、悪魔のことで」

出口とは別の扉を彼女は示した。どこの教会も同じような作りだから多分、あの奥には談話室でもあるのだらう。

「ああ……。ええ、そうらしいですね。テニエスに悪魔だなんて、珍しいことも」

「ここは外から来る人で成り立ってるような町ですからね、もうすぐお祭りもあるし……。悪魔が出たなんて噂が広まったらお客さんが来なくなるでしょう。だからその対策を話すのよ。私も顔を出すことになっているんだけど、ユーリエさんはどうかしらね、外の人だから」

それまで声を低めていたカペル夫人は、ふと顔を上げて、普段の陶器を打ち鳴らすような通りのいい声質ではきはきと話した。

「休暇を楽しんでね、お嬢さん。それじゃ、あたくし用がありますから、これで」

「はい。お気遣いありがとうございます」

カペル夫人が歩み出し、それを見送るために振り返ると、まばらになった人の中にユーリエの姿が見えた。目が合うとユーリエはおつとりと微笑んで、まっすぐ近寄ってきた。よかった。やはり今日は物事がうまくいく日だ、と思いながら挨拶をした。

「おひとりですか？」

「ええ。ダニエラと一緒にだったのだけど、用があるって残ってしまったの」

カペル夫人の向かった扉の方を、ユーリエは見た。ではユーリエは一人なのだ。話をするには都合がいい。

「よろしければ、お屋敷まで一緒にさせていただきますか？ アデナ様に渡したい物があって、帰りに寄ろうと思っていました」
口実に持ってきたクッションは、もちろん今日すぐに渡さなければいけないなどということはないのだが、こう言えば断られることはあるまい。計算通り、ユーリエは了承してくれた。

「嬉しいわ。ひとりだと思っていたから」

こうして、私はユーリエと一緒に教会を出た。中央通りはいかにも礼拝帰りとわかる白い服の人々で賑わっていた。

「今日は、スヴェン様はいらっしゃらなかったのですか？」

「ああ。スヴェンはね、お客様があつて別荘に残っているの」

それとなく探りを入れると、気になる答えが返ってきた。客人とは誰なのだろう。つつこんで聞くのはさすがにためられるが、着いたらわかるだろうか。

「聖休日に訪ねてくるなんて思ったけれど、仕事の関係の人だつていうから、仕方ないわね」

私の心を読んだということはないだろうが、ユーリエはあっさりとこの疑問に答えてくれた。

「あの子と会うのは三年ぶりなのよ。礼拝くらいは一緒にと思っていたのに、今日は残念だったわ。子どもの頃は夏の休暇をよくここで過ごしたの。あなたと同じようにね。その頃はあの教会もまだ工事中でね、広場に大勢で集まって礼拝をやっていたのよ」

「そうだったんですか……。仲がよろしいんですね」

はじめにのぞき見た口論が印象に残っていたので、少し意外だった。

「ええ、昔はそうだったわ。スヴェンはね、わがままな子でいつも

お父様を困らせていたの。でも私の言うことは不思議とよく聞いてくれたのよ。まだスヴェンの小さい頃に、母が亡くなって……私は母のことを覚えているけれど、スヴェンはあまり思い出がないのじゃないかしら。だからね、それほど年は離れていないけれど、私、スヴェンの母がわりをしなければと思うているくらいよくしてあげたのよ。と言つても、子どものすることだから、せいぜい自分のおやつをわけてあげたりこつそり勉強を手伝ってあげたり、その程度ね。でもいつもあの子の味方をしてあげようって決めてたわ。それであの子ども、私のことだけは立ててくれたのね、きつと。懐かしいわ」

ふたりきりの姉弟。彼らはどんな風にこの通りを歩いただろうか。今より少し若いダニエラもそこにはいたのだろうか。私が生まれるより前の風景を思い描こうとしても、情報が少なすぎて、どうにもうまくいかなかった。

「今は、違ふんですか？」

隣を歩くユーリエはちらりと私を見、それからゆつくりと前に視線を戻した。吐息のような笑いのような小さな呼吸の後で、背をまっすぐに伸ばして言う。

「そうね。もう一緒に遊びに出かけるような年でもないし、離れて暮らしているから滅多に顔を合わせることもなくて……。でもそれが大人になるということね」

性別の違う兄弟というのは、そんなものなのだろうか。そんな風になつてしまうのが当たり前なのだろうか。

「離れて……、そういえばユーリエさんは、エーレンフェストに住んでいるんですね？」

「ええ、そうよ。話したかしら？」

「いえ。その……アディナ様が、エーレンフェストにお住まいだと聞きましたので、ユーリエさんもそうなのだろうと勝手に思い込んでいました。でも、やはりそうなんですね」

「この前の緑の日、スヴェンがあなたをひきとめて帰してくれなかったのですって」

ユーリエは唐突に話題を変えた。やはりアディナに関することは、話したくないらしい。

「あの子、なにか言っていた？」

それならそれで構わない。私とユーリエは、スヴェンのことやダニエラのこと、この町のことなどをとりとめもなく話しながら、山のふもとへ向かってなだらかな坂を上り続けた。

メルニエの集団発症、カレーラ病と断定

七の月、四橙の日、天使庁は先遣隊の調査により、メルニエで広がる病をカレーラ病と認定した。これにより、周辺地区は完全立ち入り禁止となり、取り残された住民の安全が心配されている。

天使庁はこれに第三天使メイサスを代表とする救援部隊を派遣すると発表しており、明日にも水の神殿を出立する見込みである。

聖歴二三年にアリアーガの農村で初めて確認されたこの伝染病は、終息したものと思われていたが、昨年末より各地で報告されており、原因究明が研究者たちの大きな課題となっている。今回の感染拡大の原因は、七の月、二紫の日に死亡した男性の葬儀にあるとする見方もあり（後略）

日 朝刊

——テニエス中央新聞 七の月 第四聖休

番外編 北大陸史

双歴0000 古ルカフィス王朝が北大陸の西半分を統一、トライ
ン帝国と称す。もって双歴元年とする

0100〜 トライン帝国領の減少。反乱等の頻発、異教弾圧
の続く暗黒時代に入

0381 トライン帝国、南北に分裂

0530 北トライン滅亡、小国分立

1022 南トライン消滅

1030 大陸南西にイグレシア女王の治めるクレスパイン王
国成立

1207 クレスパイン倒れ、ルカフィスの流れを汲むアリア

ーガ国成立

1413 北部で小国が統一されテニエス国成立

1429 南大陸から侵攻、大陸全土を巻き込む戦乱へ

1441〜 疫病の大流行、人口激減

1519 テニエスよりさらに北、エインズワース島のカヴァ
デル国に巨大隕石墜つ

首都ハーグリーヴス壊滅。のちに「裁きの落星」と呼
ばれる

周辺海域にも星が降り、周辺各国に津波の被害が広がる
1520 カヴァデルが国家機能麻痺、滅亡

滅びた国から出で来た悪魔が隣国^{ジャイヌ}ディーリアスに出没
しはじめる

1521 ディーリアス国で悪魔の被害甚大に

エインズワースを捨てた難民が海を挟んだ隣国のテニ
エス、ベルトランへ押し寄せる

1524 デイリーリアス国滅亡。エインズワース島は悪魔の支
配地となる

1525 悪魔が海を渡り、ベルトラン国に侵入をはじめる。

テニエス、アリアーガが軍備増強

アリアーガ、国境付近に長大な防壁を築く

1526 テニエス、アリアーガ両国軍、同盟してベルトラン

救援軍を派遣

1527 テニエス国王リユーディガー戦死

同盟軍、撤退を余儀なくされる

1528 テニエス新国王ハルトムート二世即位

テニエス王都に天使降臨^{シャイラ}

テニエス軍、ベルトランに再進軍開始

1529 ベルトラン戦役集結

悪魔はエインズワースへと後退し、大陸に平和が訪れる

テニエスが天使によるヴァン神教を国教と定める

1530 テニエス、ベルトランを併合

1531 神聖テニエス皇国成立、聖歴元年とする

エーレンフェスト宣言が出される

テニエス聖令施行

聖歴 002 ファネール神殿建設開始

各地に教会を新設

011 ファネール神殿完成、巡礼の儀式はじまる

018 テニエス、アリアーガに侵攻開始

021 アリアーガ降伏。テニエス皇国の支配下に

026 カトリーネ、アディナと出会う

「はじめの方はだいぶ省略しましたが、近代に関してはそこそこ

重要な事項を拾ってあります。特にこのエーレンフェスト宣言は有名な、神の代弁者たる天使と共に我らは世界に平和をもたらす使命を持つ、という出だしから——って、最後になにを書き足してるんですか！」

「あら！　だって関係ない話ばかりじゃつまらないでしょ？　聖歴十七年、アディナ生まれる……カトリーネは、えっと、十三年でいいかしら？」

「まあそうですね。って、書かない！　書かなくていいですから！」

第22話 八月 一黄の日(1)

八月の月になって、太陽は迷惑なほどにやる気を増大させていた。

アディナはいつものごとく、ひらひらした服だけでは飽きたらず、キャンディ・ストライプのリボンを右腕に、紫と緑と白の三種のリボンを左腕に、それぞれ巻き付けていた。

そのちぐはぐで多彩な色合いに、私は思わず自分の服を見直した。襟や袖に白いレースが使われている他は濃青一色のワンピース。いや、決して私が地味なんじゃない。アディナが派手すぎるだけだ。

「道のしるべはつくられし幻、おのが灯りのみを持って、さすれば道は拓けんと。赤の夢は目を閉じて、橙の夢はあたたかく、黄の夢は振り返る」

アディナは詩を暗唱していた。時折つかえる点さえのぞけば、澄んだ声での朗読はとても聴き心地がよかった。

「宵の川は花しずく、触れてはならぬ定めより……」

「そこは、消えゆく前に、です」

「ああ、そうだったわ。宵の川は花しずく、消えゆく前に渡りきり」
アディナは青い瞳をうろうつとさまよわせていたかと思うと両手で頭を抱えて目を閉じたり、存在しないなにかを指で追ったり、とにかくいろんなポーズを取りながら記憶を辿っていた。

「頼れる君にさしのべて、繋いでゆけば次の道。ねえ、頼れってど
ういう意味？」

「力がなくなつて、倒れたりへたりこんだりすることです」

「ふうん」

そこでふと、私は気づいた。

「そこ、ほどけていますよ」

「あら、ほんとね」

右腕のリボンが彼女の手首からだらりと下がっている。直しまし
ようかと言うより先に、アディナはぱくつとその先をくわえて左手
だけできつちりとくくりつけた。

「……器用ですね」

まさかひとりでやっていたとは。

「そのリボン、なんのために巻いているんですか？」

ついでに、前にも気になって訊けなかったことを確かめることに
した。

「かわいいでしょ？」

同意を求められても困る。

「ちよつと、服に合わないように思いますが」

「だって、ここのお洋服少ないのよ。あんまり持って来られなかつ
たの……その、おうちのは。あたし、毎日違うのがいいの。こうす
れば少しは違う感じになるでしょう？」

「はあ」

理解しがたい感覚だった。要するに、彼女なりにおしゃれをして
いる、とそういうことなのだろうか。

「カリンにも結んであげましょうか」

「ああ、いえ、遠慮します」

アディナが机に膝をあげて勝手に近寄ってきたので、私は軽く腰
を浮かしながら辞退した。

「さ、ちゃんと座って。これが暗唱できるまでは遊ばない約束です
よ」

「はあい」

歌うような調子の返事は決して真面目なものとはいえなかったが、
アディナはちゃんと言うことをきいた。

あの仲直りの後の授業は、最善とまではいえないが、このように
いくぶんましな形に落ち着いていた。要するに、足りなかったのは
威厳などではなく、信頼関係だったということだろうか。

何度目かでついにつかえずに言えるようになったアディナは、さっそく窓辺へ走ってウィーダの籠を取り外し、戻って机の上に置き、それから思い出したようにまた駆け戻って窓を閉め、満足げにうなずいた。

「カリンには特別に、あたしのウィーダにさわらせてあげる」

それがどのくらいの榮譽なのかは知らないが、ありがたく受けることにする。アディナが小さな扉を開け、指を差し入れると、ウィーダはすぐにそれを止まり木にした。

金の檻から連れ出されたウィーダは、きよろきよろと首を動かした。目の下から背中 of 辺りまでつづく黒いまだら模様がいつしよになって伸び縮みする。短く鳴いた一声は、とりすましているように聞こえた。

「はい、指を出して」

私はアディナがしているのと同じように、人差し指をのばしてウィーダに近づけた。ウィーダは群青の胸をふるわせて、怯えたようにアディナの手の甲を伝い、右腕へと避難した。

「まあ、大丈夫よウィーダ。カリンはあなたをいじめたりしないから」

アディナは左の指に鳥を登らせて、再度私の方へ差し伸べた。ウィーダは観念したように私の指へうつってきた。かまれやしないだろうな。

「風切り羽を切って、遠くへ飛べないようにしてあるから、大丈夫。逃げたりしないわ」

私が心配してるのはそんなことじゃないんだ。ああ、なんだかくすぐったい。

「ウィーダは小鳥の時から飼われているのですか？」

「ええ、そうよ。だからあたし達とっても仲良しなの」

ウィーダは居心地悪そうに体を揺らし、羽ばたいて机の上に降りた。半分は落ちたと言ってもいいくらいの不格好な着地だった。

「じゃあ、この鳥は大空を飛んだことはないんですね」

この分ではとても無理だろう。なんだか、少し、アディナに似ている。

第23話 八の月 一黄の日(2)

「外へ出してあげたいと、思いませんか。他の鳥みたいに」

「どうして？ ここは安全だわ。雨も降らないし、ちゃんとかわいがってあげてるし、毎日カゴの掃除もしてもらってる。この子は食いしん坊で、たくさん麦を食べるのよ。放したりしたらかわいそうじゃない」

「……そうですね」

アディナは外に出られないことを、不自由に感じていないのだろう。確かに、なにも困ることはない。コックの作る贅沢な料理を食べ、散らかしてもメイドが片づけ、好きなように自分を飾って遊んで暮らす毎日。ウィーダという友だちがいて、本もたくさんある。

彼女は、幸福だ。彼女がそう信じている限り。

時々見せる寂しそうな表情も、親元を離れているからで、きっとエーレンフェストに戻ればなにも不満などなく、屋敷の中で同じように生活するのだろう。

「どうしたの、カリン」

アディナがてのひらでウィーダを遊ばせながら訊いた。

「いえ、少し思い出していたものですから……、鳥のことで。そう、もうすぐ大鳥祭があるのを知っていますか？」

「なに、それ」

「この町のお祭りです。八の月の第三聖休日に、毎年行われるそうですよ」

ギルに聞いた話を、私はそのまま教えた。

「大鳥って、物語に出てくる飛べない鳥のこと？ 確か、星空まで飛べる大きな翼がほしくてたくさんご飯を食べたら、重くなって少

しも飛べなくなっただっていうかわいそうな鳥だったわね」

あいかわらず、どうでもいいことはよく知ってるな、この子。

「ええ、そうです。でも大鳥は物語の中だけでなく、実際にもいたんですよ。本当は別の理由で大きくなっただけでしょうし、ほんの少しくらいは飛び上がることもできたらしいですけどね」

「知ってるわ。でも五百年くらい前にみんな死んじゃったんですよ」

「と、私も最近まで思っていたのですが……、実は違うんです。ケルステンでは、百年くらい前まで大鳥が生きていたそうなんですよ」

「ほんとに？　ここにいたの？」

ウィーダはアディナの親指の付け根の辺りをくちばしでさかんに挟んでいる。痛くないのか、これ。

「ええ。それも、この家の持ち主が保護していたそうなんです。この屋敷が建てられたのは百五十年ほど前、ちょうどテニエスが小国として成立した直後ですね。このアイスラー地方もその折、テニエスに加わりました。その時の領主がマイゼンブークという名で、この家の最初の所有者だったんですって」

せっかくなので、歴史の話も交えながら話す。だって今は一応授業中なのだ。

「テニエスの初代国王の名を言えますか？」

「ハルトムートでしょ」

「そうです、よく覚えていましたね。そのハルトムート一世がアイスラーを視察しに来た時、領主さんは絶滅したと思われていた大鳥の卵を調理して国王に出したんだそうです」

「大鳥のタマゴっておいしいの？」

「さあ、喜ばれたらしいですから、おいしかったんだと思います。それが味付けのためなのか大鳥の卵だったからなのか、それはわかりません。ともかく、国王はこの珍しい鳥を是非譲って欲しいと交渉して、一羽の雛をエーレンフェストに持ち帰ったそうです」

「ふうん、それで？」

「そのことで、ケルステンに大鳥がいるという話が国中に広まったんです。大鳥を見たい、研究したい、買いたいなどという者が後を絶たず、領主さんは大変困ったらしいです。貴重な鳥ですし、数も少なかったもので、誰にでもあげるといいうわけにはいきませんからね。見せることは許しても、売ることだけはしなかったそうです」

「そりゃあそうね。タマゴくらいなら売ってもいいと思うけど」

アディナは大鳥の運命より、大鳥の卵料理の味の方がよほど気になるらしい。

「ところが、しつこい人が恐喝まがいのことをしたり、盗みに入られたりして、領主さんはついに、もう人に見せることもしない、誰も来るなと怒ってしまっただんです。それで、しばらくケルステンは静かになりました。ところがその領主さんが死んで、息子があとを継いでからがいけません。商売気を出して、見るだけの客をとり、しかも高額をふっかけたんです。ケルステンは大鳥の町として有名になりましたけど、大勢が押しかけたからか、卵が孵らなかったり病気になったりして、十年もしないうちに大鳥はみんな死んでしまっただけです」

「王様がもらったヒナは？」

「さあ、そこまでは聞いていません。でも……、ちゃんと育ったかそうでないか、どちらにせよ一羽では繁殖のしようがないですから、一代きりだったでしょうね。まあそんなわけで、死んでしまった大鳥のことを忘れないようにと、ケルステンの町では毎年お祭りをするようになったそうです」

「それじゃあ、お祭りっていつでもお葬式みたいな感じなの？」

「まさか。皆でにぎやかにやる、ふつうの楽しいお祭りですよ。頭に羽根飾りを付けたり、藁でできた大鳥の人形を飾ったりはするんですよ」

「なんだそうなの。それ、カリンも行くの？」

「……さあ、どうでしょう。町の外からたくさん人が来るようですから、私でも参加はできるはずですけど」

祭りといって思い出すのは、おばさんが煮詰めていたジャムの甘い香りだ。豆をむき続けた爪が緑に染まって、顔を見合わせて笑った。それが最後の、明るい祭りの記憶。

正直に言って、気は進まなかった。二人で一緒に楽しむはずの日は別れの日になった。あの苦しみを、思い出すから。

「アディナ様は？」

「あたしは……、行けないと思うわ。だってここから出ちゃいけないことになってるもの」

「それは、病気だからですか？」

アディナは静かに首を振った。

「病気とか、そういうんじゃないわ。あたしの体、きつとどこか足りないの。だから時々おかしくなるのね」

他人事のように言って、アディナはウィーダを鳥籠の中に戻した。

第24話 八月 一緑の日

相変わらずの晴れた日が続いていた。

ひとりで坂道を下っていた私は、ふと足を止めた。荷物を山と積んだ馬が繋がれていたからだ。柵の向こうには小さな水車小屋があり、その陰になにか不自然に動くものがあつた。

私はバッグをさぐって眼鏡を出した。視界がはつきりすると、ワインの瓶の底の方が斜めになって見えているのだということがわかった。真つ昼間からこんなところで、隠れてラツパ飲みするような人間がいるんだろうか。

不審に思っていると酒瓶が消えて、ひょいと姿を現した男がいた。スヴェンだ。

私は素早く小屋に背を向けて眼鏡を外した。かわりにハンカチを出して汗を拭くと、何事もなかったかのように歩き出す。

「先生じゃないか？」

案の定、いくらか行かないうちに声がかかった。

「まあ……。こんにちは」

私は振り返って軽く頭を下げた。ユーリエの思い出話を聞いていたらそれほど悪い人間とも思えなくなってしまったのだが、やっぱりどこか怪しいな、この男。

「やあ、今お帰りかね」

「ええ。遅くなってしまったので昼食まで出していたで……。その後もアディナ様とお話をしていましたら、こんな時間に」

幸い、スヴェンにはこちらを怪しむ様子はなかった。馬の背の荷物をほどこしながら、機嫌良く話す。これが演技ならたいしたものだが、酔っているのだろうか。

「俺はクレリングからの帰りなんだ。ちょうどよかった、お土産があるんだよ」

「は。私に、ですか？」

スヴェンは笑顔で茶色い包みを差し出した。

「うん。競馬のついでだからね、気にしないでくれたまえ」

調べによると、五年ほど前、スヴェンは破産しかかったらしい。

表向きは事業の失敗ということになっているが、実際のところは運がなかったようだ。——ギャンブルの。

「スヴェンは本当に賭け事が好きなようですね。しょっちゅう来客があるんですけど、ダニエラがこぼしていたところによると、カードをするために集まっているようですし。まあ、その裏でなにか取引をしていないとも限りませんが……」

「うーん、さすがに二階にいながら聞き耳立てるというわけにもいかんだろうしな」

ギルは元々ぼさぼさの髪をさらにかき回した。

「それから、お酒も好きなようですね」

「うん。女好きに酒好きでギャンブルまでやるとなると、支出が激しいのも道理だね」

まったく呆れたことだ。

「そんなので信心深い教徒だとかいうのは、矛盾しているような気がします」

「でも、表向きだけという感じでもないんだろう、彼の天使好きは」

「ええ、まあ、散々語られましたから……」

おかげである日、午後のお茶の時間に至るまで昼食にありつけなかったことは忘れない。

「それで多額の寄付をする余裕があるというんだから、不思議だね。どこからそんな資金を捻出しているのか、いつからそんなに金回りがよくなったのか、そのあたりが問題だな。借金していた頃のこと

は、もう少し詳しく調べてみる必要があるね」

「わかりました。私もそれとなく周囲に探りを入れてみます」

「ほどほどにね」

ギルはハーブ園で分けてもらってきたという青いお茶をポットから注いだ。

「たぶん今は疑われていません。というより……、なんだか気に入られたのかもしれませんが。今日なんて本をもらいましたし」

へえ、とギルは面白そうに言った。

「どんな本を？ 宗教書かい」

カップが私の前にも置かれたが、まだ熱そうなので少し待つことにする。

「いいえ。以前、家庭教師は初めてで自信がないというようなことを言っただけです。そうしたら、参考になるかもしれないからと、家庭教師ものの物語を」

「ふうん。もう読んだの」

「ええ」

「で、どうだった。ためになったかい」

「いえ全く。……教師と生徒の恋愛物語でしたので……」

ギルは軽く吹き出した。

「危ない危ない。もう少しでこぼすところだ」

「たぶん、表題だけを見て買ったんでしょうね。暇だったのでつい最後まで読んでしまいましたが」

ハッピーエンドの物語だったから、きつとお嬢様方にも受けがいいだろう。普通の少女らしさを演出するために有効活用できそうなので、寮に持って帰って、新学期が始まったら彼女たちに貸し出そうと私は決意していた。

「うん、このお茶はうまいな。明日あたりに一袋買ってこよう」

カップを傾けながら、ギルはひとりでうなずいた。

「スヴェンというのは変な人ですね。慣れてみるとやたらによく笑う、調子のいい男で……」

「そういえば、恋愛物語というので思い出したけど、スヴェンについてはこちらの話も聞いたよ。いろんな女とつきあってそのたびにずいぶん貢ぐらしいんだが、相手は一度に一人きりで、二股とかそれ以上はしないらしい。変なところで誠実なんだな」

「そういうのも誠実って言うんですか？」

ギルは笑った。おまえはまだ子どもだからと暗に言われたようで不快だった。

第25話 八月 一青の日

朝、仕事に向かう途中の道で、なにか違和感を覚えた。誰かの気配がするとか、そんなことではなかった。風の匂いがいつもと違うような、なんともいえない感じた。微妙に嫌な気分になって、首をひねりながらも屋敷へ急いだ。

いつもの南端の部屋を開けようとすると、勝手にノブが回った。

「いらつしゃい、カリン！」

アディナは見たことのないかわいらしい服を着ていた。褒めるとおじさんにもらったのよと言う。おじさんといえば、当然、スヴェンのことだろう。

「この前はね、お菓子をもらったの。でもお菓子はダニエラが美味しいのを焼いてくれるし、どうせなら服が欲しいですって言ったら、こんなにたくさん」

アディナは私を寝室まで引つ張って行って、タンスを開けた。これも、これも、とかわるがわる取り出してみせた高価そうなひらひらの服は、四着もあった。今着ているのを入れれば、五着か。

「いつの間に、お土産をもらうほど仲良くなっただんですか？」

はじめは確か、険悪だったような。それに、ひがむわけではないが、私へのお土産よりずいぶん金がかかっているじゃないか。

「なんだかよくしてくれるの。ユーリエがうまく話してくれて、あたしがここにいることを納得してくれてからはずっとそうよ」

「はあ……、なるほど」

スヴェンはユーリエからアディナの正体を聞かされて、それで下手に出るべきだと判断したのだろう。私はあらためて彼女の生い立ちに思いを巡らせた。巨額の遺産を相続して親族に命を狙われ、こ

ここに匿われているとか。実は高貴な人物の隠し子で、正妻の目の届かぬ所に隠されているだとか。……色々とパターンは浮かぶのだが、なぜかしっくりといかない。

「ねえ、どれが一番似合うかしら？」

アディナはこの贈り物がたいそう気に入ったらしく、上機嫌だった。それに知られて、私もいつしか朝の嫌な予感のことはきれいに忘れていた。

「おかえり、無事だったんだね！」

家に帰ると、やたら大げさに出迎えたギルが私を抱擁しようとしたので肘で防いだ。

「痛いな」

「不気味なまねをしようとするからです」

「かわいい娘の帰りが遅かったら、心配するのが男親ってものだろう？」

「はいはいそうですか」

扉を閉めて靴の泥を落とすと、私は今日の戦果を伝えようと口を開いた。

「報告があります」

「僕にもあるよ」

「そうなんですか？ では、お先にどうぞ」

「いや……、ナニーに昼食を温めてもらってからにしようか」

なにかじっくり話さなければいけないようなことだろうか。それとも、お腹を空かしているかもしれない私を気遣ってくれているのだろうか。

「すみません、昼食はいただいてきたんです」

「またかい？ 用意が無駄になってナニーが嘆くよ」

「……ナネットさんには、私から後で謝っておきます」

せっかくだから、私の報告の方を先に済ませてしまおう。

「実は明日から、午前中は家庭教師、午後からは遊び相手として引き続きアディナ様のお相手をする事になったんです。だからお昼はあちらでいただくことになりました」

「ほう。ますますお嬢さんに気に入られたみたいだね、よかったじゃないか」

「何言ってるんですか、それとなくそう頼まれるように仕向けたんです。せつかくスヴェンが来ているのですから、屋敷にいる時間は長い方がいいでしょう」

「ああ、そうだね。しっかり頼む」

「はい」

ギルは満足そうに微笑んでくれた。褒めるのではなく頼むと言われたことが、一人前と認められたようで嬉しい。

「さあ、とりあえず食事にしよう。エル、おまえも席について、付き合いなさい。歩いてきた後だ、喉が渴いているだろう。ミルクでいいかい」

珍しくギルは真面目な調子だ。

「まだ食べていなかったんですか？ 私を待って？」

「帰ってきたのが遅かったんだよ」

どこから、と不思議に思ったが、それはすぐに明かされた。ギルはハーブ園に出かけていたのだ。空腹だったのか、ソーセージをはさんだパンを二切れ平らげてからようやくギルは話しはじめた。三つめにバターを塗りながら。

「ハーブが枯れてた。ほとんど全滅だ」

一瞬、なんの事だろうかと、理解に苦しんだ。

「……枯れてた……って、あのハーブ園のハーブですか？ 全部？」

「一晩のうちにね。いよいよ悪魔の仕業だってみんな騒いでたよ」
私は今朝のことを思い出した。なんだか変な感じがしたのだ。そうか、ハーブ園の近くを通る時、いつものあのほのかな香りがしなかったんだ。

「フローエの旦那さんもいったん家に戻るって言ってたけど、おまえとは入れ違いになっただろうね」

「そうですね。全然知りませんでした……」

「うん、まあ、明日あたりにはもう町中に広まるだろうけど。虫に食われたって感じでもなかったし、今度ばかりは、悪魔が出たと皆が思い込むのも無理はないかな」

ギルは三つめのパンをかじった。

「凶事をなんでもかんでも悪魔のせいだと決めつけるのは、テニエス人のよくない癖ですね。第一、そんなことをして悪魔の側になるの利益があるんです」

カレーラ病も、悪魔がばらまいたのだなどと言われていたつけ。

「いや、悪魔が植物を枯らすというのは本当にあつたらしいよ。悪魔に国を追われたデューリアス難民が見たっていうんだから間違いない」

「へえ、そうなんですか」

「なんとか天使様に来てもらえないかって話もしてるみたいだね。悪魔族に対抗できるのは彼らだけだから」

「……こんな不確かな話で、天使庁が動くでしょうか？」

「どうだろう。難しいかもしれないね」

ぬるいミルクを飲みながら、暗い気持ちになった。ハーブが枯れた原因がなんであれ、普通ではありえない。この町に、一体なにが起こっているのだろうか。

第26話 八月 一藍の日（1）

空の上は寒いらしい。と、なにかの本で読んだ。

普通に考えれば、太陽に近づけば暑くなる一方のようにも思うのだけど、逆なのだそう。高い高い山に登ると、だんだん気温がさがってくる。そして頂上の方では、一年中雪が積もったままだ。だから高い方が寒い。言われてみればそう。

とすると、あの空を飛んでいる鳥も、いくぶんここよりは涼しい空気を感じているに違いない。見上げながらそんなことを思う。

私の歩いている道は坂道で、しかも上り坂だ。ということはこの一歩一歩ごとに、涼しくなってもよさそうなものだけど、ちっともそうなってはくれない。むしろ運動のせいで、暑くなってくる一方だ。

ああ、鳥になりたい。空高く舞い上がりたい。

このケルステンの町も一応、有名な避暑地の中にあるはずなのに、今日は風がそよと吹かず、とにかく暑い。見上げる空に浮かんでいる雲は、ほんの小さな切れ端だけで、まったく太陽の光を遮ってはくれない。

ああ、暑い。

同じことをぐるぐる考えながら足を動かす。

辛抱しよう。もう少しで林に入れるし、その先には冷たいお茶だ。って待っているんだから。

ここよりずっと暑いところで生まれ育ったのだから、テニエスの夏なんて問題にならないと思っていただけ、湿っぽくて嫌になる。汗がにじんでくる鼻すじを指で押さえ、屋敷に入る前にもう一度香水を使っておこうと私は決意した。

家々の立ち並ぶ通りを抜けて、ハーブ園の脇にさしかかる。少し様子が気になって立ち止まったが、静かなものだった。

悪魔なんて、本当にいるんだろうか。

それはずっと私の中にある疑問だった。いや、実際に悪魔と呼ばれるものが現れたことは間違いないだろうが、それが伝説の中にある世界を滅ぼすほどの存在だったのかどうか、いまだに信じる事ができないでいる。

この目で見ていないせいなのだろうか。悪魔が大陸から駆逐された後に生まれたからだろうか。

そして、その疑いは天使に対しても同様につきまとっていた。

神様というのはいづいぶん勝手に、えこひいきだ。天上での生活と翼を捨て、地上を救うために降りてきたという天使たち。悪魔を打ち倒し、傷ついた民衆を癒した奇跡の存在。慈悲深き神の使いは、完璧にこの仕事を成し遂げた。彼らの存在をまっさきに受け入れたテニエスだけを救い、テニエスの守護者として、テニエスだけを守り続けている。他国を次々と飲み込みながら。

体が重くなるのを感じた。もうやめよう。今考えたって仕方のないことだ。

ぬるい風を受けながら、帽子のつばを引っ張る。ここを越えれば、やっと樅の林だ。早く行こう。アディナが私を待っている。

そうして歩き出した矢先、私は彼に出会ったのだった。

その男は、麦わら帽子をかぶって木陰にたたずんでいた。私を見て、まるで古くからの友人を見つけたかのように破顔する。

誰だ。

知らない顔だ。しゃれたシルクのシャツを着崩したそのなりからして、少なくともこの町の人間ではないだろう。

男はやおら帽子を脱ぎ、胸に当てて、気取った挨拶をした。

「おはよう、素敵なお嬢さん」

見回さなくても辺りに通行人などおらず、ひとりであることはわかっていた。どう考えても、こいつは私に対して話しかけている。

とりあえず頭を下げてそのまま通り過ぎようとすると、男は突然叫び声を上げた。驚いて振り返ると、男は変なポーズを取って嘆いていた。

「なんて人だ。僕のようなとびきりの色男に話しかけられて、足を止めないなんて……」

前屈みになり額に手を当てていた男が上目遣いに私を見た。ばつちり目が合った。

しまった、つい、あまりにも滑稽だったから見入ってしまった。目が合ったそのとたん、男は姿勢を戻して早口にまくしたてた。

「ひよつとしてあれかな！ 目が悪いのかな！」

あんたの頭の方がおかしいよ。

「勿体ない、実に勿体ないね。この僕が目の前にいるというのに、そのすばらしさを実感できないなんて」

私はバッグから眼鏡を取り出してかけた。

「ご満足頂けましたか？ では、さようなら」

こういう変な手合いは無視するのに限る。背を向けて歩き出すと突然、火がついたような馬鹿笑いが聞こえてきた。

……なにがそんなに面白いんだ？

本気で頭おかしいなあいつ。これ以上かかわらないでおこう。私は歩く速度を速めた。変態は追ってこなかった。よかった。

第27話 八月 一藍の日(2)

「カリン、暑いわ」

そう言われても、暑いのは私のせいではないから困る。

昼食を済ませたばかりで、これから遊ぶ時間なのだが、アディナはぐったりと机に顎をつけて両腕を投げ出すという変な姿勢をとっていた。

「あたし、今日は水になりたい気分だわ。ねえ、カリンはどうしてそんな長袖を着ていて平気なの？」

「ここは外に比べればだいぶ涼しいですよ。それに私、暑いのにには慣れていきますから。南方のネーフェで育ったんですよ、アリアーガとの国境付近——だったところですよ」

今はもう国境とはいえないだろう。アリアーガは国でなくなったのだから。

「ああ、知ってるわ。アリアーガって暑いんでしょう。冬も雪が降らないって書いてあったわ」

「外つ国訪問記、ですか」

「それよ。確か、カリンに似た名前の人が出てきてたわ。なんだっただかしら」

「そんなことを思い出すより、歴史の人物名でも覚えてください」
アディナは鳥のように唇をつきだす。それが不満を訴える時の彼女のいつもの仕草なのだ。予想通りのその表情が現れて、私は笑った。

「なんで笑うのよ」

アディナは体をまっすぐに起こした。

「内緒です」

「くすぐつちやうわよ?」

「やめてください」

私は両手を前に出して防御の姿勢を取った。

「あの本は好評だったので、今度続編が出るそうですよ。週に一回、新聞に連載されているらしいです」

「本当? 詳しいのね、カリン」

「まわりの女生徒たちが話していたもので。私は、読んでません。あの著者が、あまり好きじゃなくて」

「ふうん」

アディナはまた背を曲げて、今度は頬を机にあてた。

今日は本当に、元気がない。朝からずっとこんな調子だ。

「楽しみだけど……あたし、買いに行けないわ」

「出たら送ってあげましょうか。エーレンフェストの住所を教えてくださいなれば」

さりげなく言ってみたが、アディナの答えはなかった。

「……秘密、でしたね」

アディナがそのまま動かないので、私はウィーダのいる窓辺に目をやった。相変わらず、これでもかという具合に晴れている。こう暑い日が続いちゃ、参るのもわかる気がするな。何のための避暑地なんだか。

午前中も勉強に身が入らない様子だったし、このままではいけない。どうにかして気分を変えさせる必要があるだろう。そうだ、野外学習なんてどうだろうか。近くに林もあることだ、あそこならいくぶん涼しいから気持ちよく過ごせるだろう。植物を観察したり、そう、絵を描くのは好きみたいだからスケッチでもさせてみようか。「アディナ様、今日はせっかくのいいお天気です。いつも部屋の中ではつまらないでしょう? 今から外に出かけませんか」

学院の令嬢たちが秘密を打ち明けるときのように、軽く身を乗り出しわずかに声を潜めて、私は提案した。アディナはつられたように顔を私に近づけたが、まばたきを繰り返した後で椅子の背にもた

れた。

「……あたし、行きたくない。外に出ちゃいけないの。駄目だってユーリエが。だから無理よ」

すまなさそうにアディナは言った。

行きたくないのと行けないのでは大きな差があるのだが、どちらの比重が大きいのかは量りかねた。

「どうして駄目なんですか？」

「……知らない人に会うからだと思う。それに、具合が悪くなるかもしれないし」

ちらりと外を見て、それからアディナはまた机に伏せた。

「でも、私の知る限り、あなたは一度もこの屋敷の屋根の下から出ていないでしょう。それじゃあ気が詰まるのも当たり前です。大丈夫ですよ、最近のあなたは顔色もいいし——そうだ。いいことを思いつきましたよ、アディナ様」

「うー？」

へばったままのアディナから、力の抜けきった声が返った。

「私、とても涼しい場所を知っているんです。そこなら大丈夫、絶対に人に会ったりしません」

「でも……」

「要は見つからなければいいんでしょう？ ダニエラとユーリエは午後から教会で話し合いだと言っていたし、今頃きつとコックさんとメイドさんはお片づけの真っ最中です。それに今日は藍の日ですから、庭師さんもおいません。スヴェンのおじさんは朝から出かけていましたよね」

「門番の人は？」

私は立ち上がって窓を開けた。ウィーダのいる方ではなく、東の山に面した入り口近くの窓だ。タンスの上に鎮座したお人形が邪魔だったが、床の方にご遠慮願って足場を確保する。

「ご心配なく、門は通りません」

見下ろすと、そこがちょうど、納屋の真上。思った通り、いい距

離だ。

私は机のそばまで戻り、念のため、私の帽子をアディナにかぶせてリボンを結んでやった。アディナは例によってそれが似合うかどうか気になるらしく、本棚のガラスに自分の姿を映しながら右を向いたり左を向いたりした。

「さあ、出かけましょう」

返事を待たず、私は開け放した窓から飛び降りた。納屋の平たい屋根に着地して振り返ると、アディナがこわこわとこちらをのぞいていた。

第28話 八の月 一藍の日(3)

「いらつしゃい」

アディナはいったん振り向き、きよろきよろと見回した後——そんなことをしても、室内にはウィーダ以外いないのだが——窓枠に足をかけてすっと落ちてきた。意外と度胸があるんだな。もっと怖がるかと思つたのに。

次は、納屋の屋根から庭へ。こちらはさっきより距離がでかい。先に降りて手を差し伸べると、アディナはうなずいて思い切りよく私の腕の中に落ちてきた。

「成功ですね」

ささやくように言うと、アディナはにっこりと笑った。どうやら彼女も少しずつ、この小さな冒険が楽しくなってきたようだ。

私は納屋の扉を開け、アディナを中に招き入れてすぐ閉めなおした。そこは以前と同じように粉っぽく、雑然とした空間だった。ランプをアディナに持たせて木箱をよけ、床のグレーの戸をあげる。と、アディナは青い瞳を輝かせた。

「地下室？」

ふたつめの戸を開けて、ランプを受け取る。私が先に降り、アディナがそれに続いた。

「わあ、本当、涼しいのね」

アディナのはずんだ声が、暗い地下で反響した。

「このことは、他の誰にも喋ってはいけません。ふたりだけの秘密ですよ」

「うん。あたし、秘密は守るわ」

「よろしい」

アディナは気持ちよさそうに伸びをして、道の先へと数歩進んだ。

「これ、どこまで行くの？」

「知りたいですか」

「知ってるの」

両手を左右に広げた格好でアディナは振り返る。その勢いでペンダントの飾り石が踊り、ランプの光を受けてきらきらと光った。

「もちろん」

私はランプ持った右手をまっすぐに伸ばし、道の先を照らした。

「この地下道は、百年前の世界に通じているんです」

「嘘」

「信じてないんですか？」

「だって……」

アディナはぐるりと見回した。

「何の仕掛けもなさそうだわ」

「魔法というのは仕掛けの見えるものではないんですよ」

私は歩き出した。アディナもちよこちよと後をついてきた。

「魔法使いなんて本当はいないんだって前の先生が言ってたわ」

「トライン帝国が分裂する前までは、どこの領主もおかかえの魔法使いを雇っていたんですよ。歴史の教科書にはそんな余計なことは書いていませんけどね」

「それって千年以上も昔じゃないの。カリンは信じてるの？」

「さあ、どうでしょう」

少なくとも、怪しげな術に頼る領主がたくさんいたのは事実だろう。効き目があったかどうかは知らないが。

「ねえ、槍とか飛びだしてきたりするんじゃない？ こういうところには罠がつきものなのよ」

仕掛けがなさそうだと言う割に、アディナは想像力を駆使して勝手に怖がり、私の左手の袖につかまってきた。

「平気です。そういうのは私が全部解除しておきましたから」

「本当に？」

それは疑いよりも尊敬を多めに含んだ返答だったので、つい笑いそうになった。

「……嘘なのね。もう、カリンの言うことなんて信じないわ」
待て待て。それはさすがに困る。これからどうやって授業するんだ。

それにしても、よくこんな暗いところで、私の表情が読めるな。それとも雰囲気で察したんだろうか。

「すみません。もうこういう冗談は言いませんから、今度だけは許してください」

袖につかまっていた小さな手を握ると、アディナがこちらをじつと見上げてきた。

「……絶対？」

「絶対です。あなたに嘘はつきませんよ」

「わかったわ。今度だけね」

「はい」

あやうく失いそうになった信頼は、どうにか取り戻せたようだ。ほっと安心しながら、この少女は私が感じていたよりもずっと聡い子どもなのではないかと、今さらながらに思った。

これは、油断できないな。

「どうかした？」

「いえ……。では、本当のことを話しますね」

「うん」

アディナは繋いでいない方の手を胸元で握っていた。

「この先にあるのは、大鳥の巣です。たぶんそうなんだと思います。マイゼンブークがあの家の中で大鳥を飼えるわけがないでしょう？でも放し飼いにするのも危険すぎます。とすれば、どこかに大きな鳥籠があったと考えるのが一番自然ですよね」

「大鳥ってあたしより大きいような鳥でしょう？それが何匹も入る鳥籠なんて作れないと思うわ」

「だから、マイゼンブークが作ったんじゃないんですよ、きっと。」

彼もしくは彼の先達は鳥籠を発見しただけで、作ったのはせいぜいこの通路くらいでしょう」

それは私の勝手な憶測だったが、たいして外れてはいないだろうと思えた。

アディナはよくわからないというように首をひねったが、見ればわかりますとつけあつて歩いた。そんな話をしているとすぐに終着点までたどり着いた。前にひとりで来た時はもう少し長い道のりに感じたのに。

「これが出口ね」

アディナがノブを回した。あ、そういえば鍵が、と思ったが、あつさりと開いた。

どうやら私は閉めるのを忘れていたらしい。しまった、あの時は急いでいたから。まあこの子の目の前で針金を使うのもなんだから結果的にはよかったということにしておこう。

暗がりに慣れた目に、光があふれる。アディナは歓声とともに石段を駆け上り、くるくると回った。連日の強い日差しにもめげず緑はいきいきと濃く色づき、七の月に見たときより更に美しくなっていた。

「どうしてこんな素敵な場所を知ってるの？」

「秘密です」

「魔法？」

私は笑った。

第29話 八月 一藍の日(4)

アディナはこの場所を気に入ったようだった。自然の豊かなことなどより多分、謎めいているところがお気に召したのだろう。花の名前を尋ねたり、地層のしわとにらめっこをしたり、水面に木の葉を浮かべたりして方々を歩き回る。

彼女の口ずさむ歌は、それこそ魔法の呪文のようだった。調子のはずれたでまかせのメロディ。ルルルとかラララだけでなく、なんだか変な音があればこれと混ざっている、気まぐれな歌。かと思うと同じフレーズが繰り返し出てきたりするので、実は曖昧に覚えている歌を無理矢理繋げただけなのかもしれない。

ふたりで池のほとりの大きな岩に腰掛けて、休憩をした。さすがに疲れたのか、アディナは崖の上の方を眺めながら黙っていた。そろそろ帰った方がいいだろうか。

「ねえ、どっちが先かしらね」

不意にアディナが言った。

「なんのことです？」

「この谷底が大鳥の家だったとして、領主さんが大鳥をここに連れてきて住まわせたのかしら、それともはじめからここに生き残っていたのを見つけたのかしらって考えてたのよ」

ああ、なるほど。そういえばそこまでは考えていなかった。

「あたし大鳥は元々ここにいたんだと思うわ。はじめはね、ただ落ちたの。あの崖の上からね。それを恋人が見つけて、引き上げられないから、かわりに自分も落ちたのよ。そしてこの大きな鳥かこの中で、二人で暮らしはじめたの。きっとそうよ。一人だけだと増えないものね」

ロマンチックなんだか間抜けなんだかよくわかんない話だな。

「それで、こんな場所だから誰にも見つけられずに、他の場所で仲間たちが死んでしまっても、ここだけは大鳥が生きていられたの。ね、そうだと思わない？」

「確かに……、大鳥が絶滅したのは乱獲が原因らしいですから、ここにいた大鳥だけ生き残ったというのはあるかもしれませんね」
「でしょう？」

賛同を得られたことに満足してか、アディナはにこにこしながら足をぶらつかせた。岩の下の方は苔が生えていて、灰と緑のまだらになっていた。

「これだけ大きな鳥籠だなんて想像もしなかったけど、ここなら暮らしやすそうだわ」

そう言って、アディナは足を止めた。

「ウィーダも恋人が欲しいかしら。……ずつつとあの籠の中は寂しいかしら」

太陽の下にいるせいだろうか、ペンダントの石がいつもより強く光って見えた。

「風切り羽が伸びれば飛べるようになりますし、訓練すれば、虫も捕まえられるようになりますよ」

「そんなことができる？」

「ええ。自然の中で生きていく力は、元々備わっているものです。引き出してやりさえすれば、きっと」

「ふうん……」

アディナはうつむいて、もう一度足を揺らした。そしてそのまま、またじっと考え込んでいる。

私はそれを邪魔しないように、池の方を眺めた。とても静かだった。それなのになんだか落ち着かない。なにかを見落としているような、変な気分になる。

「カリンのお母様って病気で死んでしまったんでしょう。その時、どんな気持ちでした？」

唐突な質問に、私は驚いた。ああ、スヴェンが話したのか。否応なく母の顔を思い出して、言葉に詰まった。

いや、そうじゃない、あの女とは違う誰かの話だ。カトリーネの――私の母は私を思いながら死んだのだ。

「……それは、もちろん、悲しかったですよ」

「ごめんなさい。嫌な気持ちにさせてしまつて」

「いえ、そんなことは」

冷たくなつた指先を手のひらの中に握りこんで、私は意識的にゆつくりと呼吸をした。

「あたしのお母様はね、お喋りはしないけど優しいのよ。あたたかくて、いつも、いい子いい子つて頭を撫でてくれるの」

うつむいた肩からさらさらと金の髪がこぼれる。

「かえりたいな……」

ぼつりと落ちた眩きは空気に溶けて消えた。ぶかぶかの帽子が前に傾きすぎるのを、私は手を伸ばして直してやった。

「ユーリエに頼んでみてはどうですか」

「それはしてはいけないことだもの」

普段はわがまま勝手に振る舞うくせに、ずいぶん物わかりのいい答えだった。

「……してはいけない事ほどしたがるのが子どもでしょう」

「そうね。でもそれは、その結果何が起こつてしまうのかちゃんと知らないからできてしまうことなのよ」

初めて会つた日に見たのと同じ、からつぽの表情だった。全てを諦めたような、冷めた瞳。いつか見た、鏡の中の自分。

そうか、ただ暑かつただけじゃない。アディナは悲しみ、思い悩んでいる。けれどその理由は、私の触れられないところにあるのだつた。

第30話 八月 第一聖休日

その週の聖休日も、私は礼拝に出かけた。皆悪魔の噂に怯えて外出を控えているという話なのに、参礼者の数は前回より多いくらいだった。祈りで気を紛らわそうというのか、救いを求めようというのか――どうせ、天使は水の神殿にしかないのに。

枯れたハーブ園は確かに異様だが、私から見れば、誰一人怪我もしてないこの状況で悪魔が出たなんて騒ぐ方がどうかしている。そもそも、悪魔は人を襲うもので、だからこそ恐れられているのだ。ハーブだけ枯らしてなにもしないなんておかしいじゃないか。

けれど原因のわからないことほど人は恐れるものだ。カレーラ病もそうだった。異変が今後続かないにしても、しばらくは皆不安を抱えて過ごすのだろう。

この夏は、暑さのせいか体調を崩す者も多く、ケルステンの町は全体的に沈んでいた。

教会長からは、町の問題をむやみに触れ回ったりしないよう気をつけて欲しい、天使庁にも連絡はしてあるという話があった。が、人の出入りの多くなる夏に、噂を抑えようとしても無理だろう。実際、滞在客の多くはこの避暑地を捨て、もっと涼しい場所に出かけるか暑い自分の家に帰るかどちらかを選んだようだ。彼らの散っていった先で、この事件は伝聞に伝聞を重ねながら広まることだろう。

この日はユーリエと話すことはできなかったし、スヴェンもまた来ていなかった。

それで、私はひとりで家に戻って、仕事のない退屈な午後を過ごした。

これから始めるのは、アリアーガのかつての首都、ハシントの近くまで来た時の話です。濃い青の空から太陽の光がまっすぐに降り注ぐ、よく晴れた冬の終わりの日でした。

噴水の近くに腰掛け、手帳を覗き込んでみると、突然見知らぬ子どもが声をかけてきます。

「その店はマズいよ。外国人には失敗作を出すって評判だ」

私が顔を上げると、彼はにっこりと笑いました。どうやら、メモしていた店の名を盗み見たようなのです。

「オレならベルデリーオをお薦めするよ。店長は無愛想だけど、おいしい味もそこそこなんだ。あっちの通りをまっすぐ行ってさ、緑の看板が出てる店だよ」

彼の上衣はぶかぶかで袖を折り返してありました。ズボンは逆に小さすぎ、ただでさえ細い足を余計に細く見せています。髪はもつれてぐしゃぐしゃ、頬には泥がこびりついて、琥珀の瞳だけが澄んでいました。

「おばさん、どこの国の人？」

「ディーリアスよ」

「ウソだろ。……だって、あそこもう国はないんだ」

驚いたのは私も同じでした。十歳そこそこの子どもが、祖国を知っているとは思わなかったからです。

「その通りよ。今はテニエスに住んでいるわ」

私はつたないアリアーガの言葉で答えました。

「ふーん」

テニエス、と言うとやはりいい顔はされませんでした。それは当然の感情でしょうから、私は黙っていました。

「……ベルデリーオね。ありがとう、行ってみるわ」

もう一度手帳に目を落として書き付けると、ふと差し出されたものがありました。私の財布です。いつの間に鞆から抜き出したのでしょうか、彼はそれを手帳の上に置きました。

「おばさん、騙されそうだから気をつけて。隙だらけだよ、もっと注意しないと」

私は怒るべきだったのですが、その間合いをはかれず、答える間もなく彼は去っていきました。

「じゃあ、さよなら」

残された私は財布と手帳を鞆にしまい、不思議な手品をみせた少年のことを考えながら緑の看板を探しました。確かにその店の料理はまずまずで、店長はむっつりとしていました。私は支払いの段になってふと思いついて財布の中身を確認しました。たぶん減っていません。たぶんというのは細かい数字まで覚えていなかったからです。それより確実に問題だったのは、旅券がなくなっていたことです。

私は食事の後、街境の詰め所へ向かいました。しばらく待たせてもらうと、予想通り、衛兵に引つ張られて彼がやってきました。

「おかえり。待ってたわ、ぼうや」

手を縛られた彼は私に気づいて無然と顔を逸らしました。私は旅券を返してもらって、ついでに少年の身柄も引き受けました。

「使おうとしたらすぐに捕まるのはわかってたの。この旅券、特徴もなにも書いてないから大丈夫だと思うでしょう？　ところが、この端の色、これが性別なの。それで、このハンコのギザギザが年齢ってわけ。あなたが使えない訳、わかったでしょ」

噴水前で出会った時の彼は演技をしていたらしく、詰め所から出た後はほとんど無言で、あの明るい人懐こさはどこかへ行っていました。

「ねえ、どうして街に入りたいの？」

この時——現在でもそうですが——ハシントでは人の出入りが厳重に警戒されており、テニエス本国の旅券がなければおいそれと入

つていけませんでした。財布をわざわざ返したことから、少年の目的は、ただハシントに行くことだろうと私は推測したのです。

「父さんに会いに」

彼は短く答えました。

第31話 八の月 二黄の日（1）

八の月、二黄の日。まだ昼食前で、授業中だった。私はいつものようにアディナと机をはさんで向かい合わせに座り、彼女がペンを動かすのを待っていた。

二人とも黙っていたせいだろうか、一階から悲鳴のようなものが耳に届いた。ユーリエの声だ。私が顔を上げると、同じように驚いているアディナと目があった。

「……立ってもいい？」

「どうぞ」

アディナがそうつと椅子を離れてドアへ向かう。私も気配を抑えて廊下へ向かった。いざという時はアディナをかばえるように、距離を詰めて、緊張しながら。

なんとか様、とユーリエが言うのが聞こえた。どこか安心したような声だった。それで、私は足をゆるめた。

「やあ、ユーリエ。怪しい奴らがうろついてたんで、捕まえてきたよ」

聞き覚えのある明るい声が届いた。

アディナが急に速度を上げて階段を駆け下りる。私は追わなかった。

「レオ！」

ココア色の髪をした男が振り返る。

「やあ、おチビちゃん。元気そうだなによりだ」

アディナがレオと呼んだその男が誰か、ようやくわかった。数日前に声をかけてきた、あの頭の軽い軟派男だ。

「……もしかして、迎えにきたの……？」

アディナが暗い声で言った。私は二階の廊下からそれを見下ろしていた。

「いいえ。あなたの様子を見に、ちょっとね」

レオは暢気な調子で答える。その足元に、縄でくくられた男が二人も転がっていた。

ユーリエは口をばかんと開けたままで片手を胸に置き、もう片方を壁について、精一杯に体を支えているというような雰囲気だった。玄関を入ってすぐの所にはティーロもいて、剪定バサミを持ったまま突っ立っている。アディナはきよろきよろとそんなホール全体を見回した。

「シュテフは？」

「あいつは居残りです。レシリア様についていますよ」

「……そう」

明るくなったアディナの声が再び沈んだ。誰だ、シュテフって。

「メルニエの騒ぎでみんなが忙しくしてるところに、悪魔の噂が聞こえてきてね。手が空いてる奴がいなくて、僕が立候補したんだ。ご不満ですか？ アディナ様」

「ううん。来てくれて嬉しいわ。でも……」

男爵家のユーリエが様をつけて呼ぶこのレオという男が、アディナを敬う。一体、彼女は何者なのだろうかと改めて不思議に思った。前に冗談で言ったみたいに「皇女様」なんかじゃなきゃいいけど。「ちよつと失礼」

レオがアディナの前にひざまずいた。

「ずいぶん溜まってますね。シュテフがいればよかったんですが」
「あたしがやったの？」

不安そうにアディナが言った。なんのことだかさっぱりわからない。とりあえず、ただの変態かと思ったこの男とアディナは知り合いで、それかなり親しいということだけはわかった。

「さあ、どうでしょうか」

曖昧に答えて、レオは立ち上がった。

「ユーリエ、こいつらが何をたくらんで屋敷の近くをうろついていたのか、僕が訊き出しておくよ。保安局に突き出すのはその後でいいかい？」

「え、ええ……。お任せしますわ」

事の経緯は、ティールが屋敷の庭で不審者を見かけて声を上げ、ハサミを武器に追い回そうとしたところ、ナイフで応戦された上に不審者が二人に増え、万事休すというところでレオが駆けつけ命を救ってくれた、という具合らしい。

レオはフルネームがレオポルト・グラフ・フォン・フラウンホルファー。つまり伯爵様だという。この若さで、あんな軽い頭をしたやつが。いや、貴族だからといって素晴らしい人間だとは限らないというのは学院のご令嬢方を見ていれば普通にわかる。わかるが、レオの言動のおかしさは彼女たちとは明らかに一線を画していた。

いや、伯爵様のくせに変態だとかそんなことはいい。この際もつと問題なのは、アディナのことだ。この、信じがたいが一応曲がりなりにも伯爵だという男がアディナにひざまずくという事実。伯の上といえば公くらいしかなくて、その更に上といえば皇家。いや、外国の要人ということも有り得る。滅亡したエインズワースあたりの王家の末裔とか、あるいははるばる南大陸から留学のためにやってきた姫君とか。それならアディナに常識がないのもうなずける。

想像するだに遠い世界の話になってきて、頭が痛い。だがもうそのくらいでないといつじつまが合わないのだった。

昼過ぎになって戻ってきたレオはアディナの部屋にも顔を出した。私のことを覚えていたようで、運命に感謝するとかなんとか意味のわからないことを相変わらずの妙な口ぶりで繰り返した。正直うつとおしかったのだが、立場上邪険にするわけにもいかず、笑顔をうかべてそれなりに愛想よく対応するようつとめた。

しかし、あまりに馴れ馴れしかったのでつい我慢しきれずに、へらへらした大仰な話し方は好きになれない、真面目で寡黙な男性の方が好みですなどと言ってしまった。

この意見にはアディナも賛成してくれた。

「やれやれ、二人もの将来有望なレディに否定されるとは」

レオは大きく肩を落として嘆いたが、それほど落胆しているようには見えなかった。

第32話 八月 二黄の日(2)

「フラウンホーファー伯爵だって？」

家に戻って事件のあらましを説明するとき、ギルが一番意外そうに反応したのがやはりここだった。

「ええ。知っていますか」

「一応ね。確か二、三年前に先代が急死して、その跡を継いだっていう一人息子だろう。よくは知らないが優秀な若者だって聞いたことがあるよ」

優秀。あれがそうなのか。自分が優秀だと言われていることが急に空しくなるな。

「で、フラウンホーファー卿は何をしに来てたんだ？ 泥棒を捕まえるためにあんな町はずれにいたってわけじゃないんだろう。スヴェンかい」

「いえ。アディナ様に会うためのようです」

「へえ」

「やはり、あの子は相当身分が高いとしか……。本当に何者なんでしょうか？」

問いかけに答えぬまま、ギルは室内を見回した。

私の部屋にはほとんど物が無い。寝たり出かける準備を整えたりするだけの場所だから余分な飾りなどは必要ないのだ。

ともかくその地味な部屋の中に、あるのはベッドと机と、私の今座っている脚のすり減ってバランスの悪い椅子、それからチェストと鏡くらいだった。何を探しているのだろうかと思えば、ギルはベッドに腰掛け、腕を組んだ。

どうやら立ちっぱなしで話すことに疲れただけらしい。

「庭師の人は、今日はお休みじゃなかったっけ」

ギルはさつくりと話題を戻した。いくらスヴェンの件とは関係がなさそうだとはいえ、少く興味を示してくれたっていいのに。「そうなんですけど、庭のバラが枯れかかっているのを気にして、具合を見に寄ったらいいんです。そしたら顔を隠した怪しい男が庭の中にいたので、声をかけたら逃げようとしたと……」

「覆面ねえ。とすると、はじめに目撃された悪魔というのはその男たちのことだったかもな」

「ああ……、そうかもしれませんね。伯爵が保安局に連れて行つたので、余罪があれば明らかにするでしょうけど」

実はギルの腰掛けた場所のすぐそばに、私がさっきまで読んでいた本が隠してある。真上に座られなくてよかったが、手を横についたら感触でわかってしまうのではないかとほらはらした。いや、見つかったからといってそこまでまずいものでもないが、今さら読む気になったのかいと笑われそうで。

「ふむ。これで町の人たちの不安が少しはおさまればいいんだが」

ギルは顎に手を当てて考えるそぶりを見せた。

「それと、気になることが」

言いかけて姿勢を正すと、椅子がキィと耳障りな音をたてた。

「伯爵は天使庁からの要請で悪魔の調査に来たらしいのですが、メルニエのことでどうか言っているのを聞きました。……今、メルニエはどうなっているんですか？」

「ああ、カレーラ病のね。フラウンホーファー卿は天使庁に進んでいたのか、初耳だな」

わずかに首をかしげて、ギルは言った。

「天使庁は救援隊を組織して現地に派遣したらしい。もうとっくに着いているはずだよ。ただ、どのくらい助けられるかはわからないが。メルニエ周辺は封鎖されているから、詳しい話が入ってくるのはもう少し後だね」

私が聞くまで話さなかったということは、気を遣われていたのだ

ろうか。

「そうですか……」

カレーラ病は致死率が極めて高く、集団発症するが、その範囲は狭く爆発的に流行したりはしない。信仰に熱心でない地域での発生が多いために、天罰であるとか悪魔の陰謀であるとかいう噂の絶えない奇病だ。今のところ、これを治療できるのは天使の光呪だけだから、各地で発生するたびに天使庁が動くことになる。

「それから。メルニエ周辺はヴァン神教の受け入れに反対で、教会の建設を妨害する動きもあったそうだ。今回の件は教団にとっていいことづくめだな」

「……カレーラ病が人為的に引き起こされているのではないかという話ですか？」

ギルはこの説にこだわっている。村一つが全滅するような強い伝染病の割に、周辺に波及しないことがおかしいとかなんとか。

「悪魔が病をばらまいてるとは言われるのに、教会の陰謀という噂にはならないんだから、不思議だね」

「そりゃあそうでしょう。あつたとしてもすぐに揉み消されると思えますよ」

確かに、カレーラ病が起こった後の地域では、入信率が高くなる。カレーラ病は天使の治癒力に関するいい宣伝になっているといえるだろう。

「でもカレーラでは天使なんか来ませんでした。そりゃあヴァン神教の受け入れには反対でしたけれど、それはアリアーガ中どこを見渡しても同じでしたから。あの病気が天使庁の有利に働いているとしても……、それは病気の発生を天使庁が利用しているだけで、流行そのものまで動かしているとは思えません」

「まあね。ヴァン神教の信者だって犠牲になつてゐるわけだし、誰がなんのために、というのが絞り込めないんだよなあ。そこが問題なんだが」

「だから、違うんじゃないですか？ あんなものを人が引き起こし

ているとしたら……、人間の方が、よっぽど、悪魔です」

勢いで口にしてしまったが、ギルがどんな表情で私を見ているのか、知りたくなかった。

「ちよつと汗でもかいてきます。……最近、なまっているような気がしますので」

だから振り返らずに部屋を出た。鼓動は速くなっていたが指先が震えたりはしていない。少しはよくなったかな、とひとりで満足して、私はうなずいた。

第33話 八月 第二聖休日

それは街のはずれにある広場でした。四方を緑で囲まれ、中央には剣を持った天使の像が立てられています。突き出されたその石の剣先は、誰に向けられているのでしょうか。悪魔ではないような気がしました。

なんのための場所なのでしょう。広くはありましたが、昼間にもかかわらず人はあまりいませんでした。ちらほらと見かけるのは制服を着込んだ見回りの警備兵だけです。

こんなところに彼の父親がいるのだろうかと思いましたが、少年は黙って天使の像を見上げていましたが、私が声をかけるより先に、ぽつりと言いました。

「父さんはここで死んだんだって」

彼は相変わらずの無表情でした。私は思わず辺りを見回しました。聖なる白で敷き詰められた広場はひっそりと息を詰めていて、わずかな風に揺れる木々も音をたてることを遠慮しているようでした。

「神父だったんだ。占領軍に逆らって、村で聖休日の礼拝を続けてた。それで、捕まって……」

この広場が公開処刑の地だったことを、私はその時まで知らなかったのです。突然、美しく整えられたその場が血なまぐさい臭いに包まれたように感じて、ぞつと身震いをしました。ここで何百人という旧教の信者たちが殺され、そして、彼の父親も。

——こんなこと書いてて、よく発禁にならないな。

「うち、母さんがよそに男ができて、出てってさ。父さんが連行されたら、オレと妹の二人だけが残される。それがわかってたのに、父さんは最後までずっと信じて、神様を信じて……、ウソもつかなかった。もう信じないってそう言うだけで、助かったかもしれないのに」

おばさんならどうする？

私には答えられませんでした。子どもを持ったことがなく、また、信仰を捨てよと迫られたこともなかったのですから。

「オレと妹は結局、父さんにも母さんにも、捨てられたんだ。母さんが出てったときは父さんが可哀相だと思った。母さんを許せないと思った。だけど、一緒だよ。父さんも神様を選んで、オレたちをおいてった。よその男の人を選んだ、母さんと同じ、なんだ」

「その、妹は？ 今はどうしてるの？」

少年は笑いました。けれどそれは奇妙にひきつった、悪魔の仮面のようにも見えました。

「オレがどこから来たと思う？ カレーラだよ」

カレーラと聞いて、私はさらに彼に興味を抱きました。

普段から新聞を隅々まで読む習慣のない人は知らないかもしれないので、一応説明しておきましょう。中には読んだけれどもう記憶がないという読者もいるかもしれません。

それは聖歴二三年、夏の終わりに起こった悲劇でした。

アリアーガ中部にある農村、カレーラで、村人が次々に倒れ、命を失うという事件が起こったのです。原因は未だ以て不明ですが、伝染病であろうということになっています。村人のほとんどが犠牲になり、助かった者は指で数えられるほどで、波及を防ぐために村は焼かれました。前例のない病だったので、これをカレーラ病と呼ぶことになったのです。

そう、この本が書かれてる頃はまだ、各地でカレーラ病が発生す

ることになるなんて思いもしなかったんだ。オレもあいつも。

「オレがカレーラから来たって聞いて、逃げ出さなかったのはおばさんが初めてだよ」

そう言いながらも、あまり意外そうには見えず、彼は淡々としていました。

なにも感じていないかのように落ち着いて——そんな風に見えただろうか。よく覚えてないな。

「だって、半年ほども前のことだろう。カレーラ病はいったんかかったら二、三日で死ぬって聞くよ」

落ち着いてたのは向こうの方だ。

ああ、父さんも焼かれたんだろう。そんなことを考えながら天使の像を見上げていた。

知らなければ幸せだったなんて嘆くのはいやなんだ。知ってしまったから、もう無知だったあの頃には戻れやしない。

「そうらしいね」

まるで他人事のように答えると、彼は困ったように笑って手を差し伸べた。

「じゃあ、きみは一人だ」

父さんはきつと幸せだった。最後まで神を信じていた。救いを待っていた。それがないと知るとは、認めることは、闇夜に灯りを手放すことと同じだ。

「これからどうする？ 墓参りの後の予定は」

大丈夫だ、きっと助ける。そう言って駆け出した。ベッドの中から懸命に伸ばされた手は、行かないでと呼んでいた。傍にいてやればよかったのに。今ならそう思うのに。

そして炎に巻かれて、全ては消えた。息絶えた村人たちは罪人のように焼かれた。灰の臭いが嫌いだ。思い出すのは、ねじれた赤。

「これから……？ 別に、考えてない。働ければそれでいい。生きていけるなら、なんでもいいんだ」

無慈悲なヴァン神の使いは剣をかざして勝利を謳う。敗者は跪けと見下ろす。

だけどまっぴらだ。天使も、教会も、神も、認めない。

信じる神を間違えた？ 確かに、リースレットの神は何もしちゃくれなかった。だけどヴァン神はオレたちからなにもかもを奪っていっただけ。そんなものを信じると？ そんなものに祈れだど？ 冗談じゃない。

「じゃあ、僕がきみをガイドとして雇おう。きみの名は？」

「……エルナン。エルナン・リベラ」

第34話 八の月 三赤の日（1）

嫌な夢で目が覚めた。

きつと、本を読みながら眠ったせいだ。やっぱりやめておけばよかった。そんなことを考えながら、日課の朝稽古をこなし、シャワーを浴びて身支度をした。髪を編んで、薄化粧をして、オランジェの花の香水をひとふり。暑いのを我慢して、できるだけ体の線を隠してくれる丈の長い地味な服を着込み、私はいつものように別荘に向かった。

アディナは今日も元気がなく、勉強どころか、遊びすらはかどらない。冗談を言って笑わせてみても、どこか無理をしているようで心配になる。

少なくとももう一月以上、親元を離れているのだ。情緒不安定にもなるだろう。まったく、家族が様子を見に来たりとか、しないのか。

いったいこの子の親は、どこにいて、何をしているんだろう。念のために調べてみた皇家の系譜には、九歳の女の子はいなかった。正直ほっとした。いや、もしそうだとしたら私が困るわけではないけれど、アリアーガを征服したテニエス皇家の人間なんて——やつぱりいい気はしないじゃないか。

「あたしのせいなのかしら……」

昼食を終えてからというものの、アディナはなぜかますます落ち込んで、小さく呟いた。

「――なにがですか？」

「お祭りがなくなって、残念ねって言ったの」

見当違いに答えて、アディナは憂鬱そうなため息をついた。

確かに食事の際、ダニエラから大鳥祭の中止の話は聞いた。町の皆で話し合った結果だそう。

「まあ、いいじゃないですか。どうせ行く予定ではなかったのですから」

「そうだけど、きつとみんな楽しみにしていたわ。それに、いなくなってしまった大鳥のためのお祭りなのに……」

腕に巻いたりボンの先っぽを指でいじりながら、アディナは言う。なにか誤魔化されているようでいらした。いや、実際そうなのだろう。

隠し事があるのははじめから承知の上だ。だけど無理に訊き出すとすることは、これまで一度もしてこなかった。

聞いてやりたいな。

ふとそう思った。好奇心というより、そう、今、なんだかアディナが聞いて欲しそうにしているような気がしたんだ。

「アディナ様。なにか私にできることはありませんか？」

机の上で両手を重ね、背筋を伸ばすと、私は先生をする時の口調で真面目に切り出した。

「悩み事でしょう。話してみませんか？　少しは楽になるかもしれないし、ならなくても気休めくらいにはなります」

アディナは手を止めて困ったようにうつむいたが、どこことなく嬉しそうに見えるのは私の思い込みによるものだろうか。

「……誰にも言わない？」

「ええ、もちろん。ふたりだけの秘密にします」

逡巡の後、彼女は顔を上げた。

「あたしのせいかもしれないの。ハーブが枯れたのは」

それを聞いたときは正直、この子はなにか勘違いをしているので、自尊心を傷つけないよう気をつけながらそんなはずはないですよと

優しく諭す必要があると思った。

「ほら、お庭のバラもだめになったでしょう」

だって信じられるはずがない。それとこれと何の関係があるんだ。……あなたはハーブ園へ行ったことすらないでしょう？ バラはともかく、どうやってハーブを枯らすんです」

「あたしが、天使だから」
シャイラ

聞き間違えようもない、はっきりとした口調だった。取り違えようもない、簡潔な言葉だった。それなのに意味がわからなかった。待ってくれ。誰がなんだって？

「——天使？ あなたが？」

どこら辺がだ。

神学の授業で聞いた話を脳裏に蘇らせる。曰く、天使とは天上天下全ての生命をひれ伏させる力をもって神に背く者を裁く。曰く、深い慈悲をもってあまねく人を癒す。曰く、神に匹敵する広き叡智をもって賢き者に分け与える。

……どう考えてもこの目の前のちんまりしたものに關する説明文とは思えないんだが。

そもそも、子どもの天使なんて存在するのか？

「あの、ぜったい内緒にしてね。ほんとには誰にも教えてはいけませんってユーリエに言われてるの。あたし、カリンとの秘密はちゃんと守ってるわ。カリンも守ってくれるでしょう」

なんの冗談だ、それ。もしかして本気で言っているのか。

「信じてない？」

めまいがしそうだ。私は額を抑えた。

「あなたが天使なら、なぜこんなところにいるんです」

地上に降りた天使は翼を失い、二度と天上へ戻ることができないという。

ファネール神殿——通称「水の神殿」は、悪魔を討伐する役目を終えても帰る場所のない彼らのために、エーレンフェストに建てられた。天使はそこで、国中から集まる傷者病者に癒しを与えている。

引きこもって、滅多なことがない限り人前に姿を現さないはずだ。

「……待ってるの」

「なにを？」

「言いたくないわ」

けれど、彼女は言ったではないか。エーレンフェストから来たと。天使ならたとえ伯爵であつても、皇王であつてもひざまずく。ユーリエは水の神殿に勤める光神官で、つまり天使に仕える仕事をしていて、スヴェンもユーリエに話を聞いて態度を改めた。

嘘ではあるまい。

アディナは、天使なのだ。

「……怒ったのね、カリン。黙っててごめんなさい」

背筋に震えが走った。視界が陰って、胸の前で手を組んでいる彼女の姿が異質なものに見えた。

「怒ってなんか……」

作り笑いがひび割れる。唇が乾くのを感じた。ダニエラに冷たいお茶をもらったばかりだっていうのに。

「じゃあ、悲しいのね。どうして？」

青い目が瞬く。あの応接室に飾られていた絵の天使と同じ色をした目が、迫ってくる。不快感が首筋にまでせりあがる。

近づくな。やめろ。

「いえ、そうじゃなくて……」

どうしよう、うまく息ができない。寒い。そうだ立たなくては。こんなものとは一緒にいられない。バッグをつかんで後退すると椅子が音をたてて倒れた。

「すみません、気分が悪くて。今日は、もう、おしまいにします」

第35話 八月 三赤の日(2)

頭がぼんやりとして痛かった。

狭い部屋の中、体が重くてただ座っていた。机の隣の壁にかけられた鏡がカトリーネの姿を映していた。黒い髪をおさげにして、この上なく陰気な表情を浮かべた少女。

そういえばずっと昔、世界中の鏡は繋がっているんだと想像したことがあった。鏡の奥には別の世界があつて、そこでは全てが反転していて、どの鏡からでもこちらの世界に出てこれるのだとか。今も誰かが鏡の向こうからこちらを眺めているのではないかと心配したりとか。

鏡に限らず、あの頃は見えない何かをいつも意識していた。どこからどこまでが世界なのか、世界はどこまで広がっているのか、その境界をいつも探っていた。それは世界を知らない不安と期待からきていた。願えば明日は晴れるとか、なにかきっかけがあれば空を飛べるはずだとか、壁の割れ目から誰か出てくるんじゃないかとか、そんなことを真剣に考えていた。

今では鏡を見て不安になつたりはしない。世界の果ては知らないけれど、今自分のいるこの場所が広がったり縮んだりしないことを知っている。鏡は鏡で、この平面の他に何も持っていないことを理解している。だから不安にならない。だから期待しない。

鏡の中に広がる世界がないと悟るのと同じように、神に祈ることが無益だと知った。

神は母を返してくれなかったし、父を振り向かせてくれなかったし、妹を助けてくれなかった。

ゆるりと立ち上がって鏡の中のカトリーネに近づく。口紅はもう

ほとんど落ちていて、琥珀の瞳には力がない。額をつけると鏡の表面はひやりとして心地よかった。

このまま鏡の中のカトリーネと入れ替わって、本当に彼女になってしまえばいいのに。生い立ちは不幸でも、名門学院はじまって以来の天才と褒めそやされ、かわいがってくれる養父がいて、けなげに生きている少女。けれど彼女になりきれないのはわかっていた。これは擬態だ。外側を繕っているだけだ。怒りと憎しみで固めた鎧を着て、この鏡のように冷え切っている。

ノックの音に、鏡から離れる。

「……ギル？」

「やあ」

机にもたれて、部屋に入ってくるギルを見た。出かけていたのだろう、紺のベストに白いシャツというまともな姿だが、さっそく着崩している。

「今日はずいぶん早いじゃないか。ナニーが心配していたよ、一言も口をきかないで部屋に閉じこもってるって」

「どこに行ってたんですか」

「郵便局まで、電信を打ちに。本社が悪魔の件で報告書を送れと言ってきたんでね。まったく、人使いの荒いことだ」

ギルの勤めているビレンブラント社は、新聞出版社である。田舎で事件が起こったところに社員がちょうど滞在していたとなれば、誰かを派遣するよりもそいつを使ってやろつと考えるのはまあ合理的な発想といえた。

「どうせ調べてるんだから、ついでもいいじゃないですか。たまにはちゃんと表向きのお仕事もしないと、外部からの不審をかいますよ」

両手を机について後ろに体重をかけた。皮肉な笑みはちゃんと作ることができた。

「でもまだ来週の分ができてないんだ。その、裏向きの方がさ。ぎりぎりだよ」

「一ヶ月分置いてきたって言ってたじゃないですか」

ギルベルト・マクシウスは、テニエス中央新聞に連載を持っていた。フィオナ・オレアリーという偽名を使って、旅行記を書いているのだ。

本当のフィオナは、彼の祖母らしい。ディーリアスから大陸に逃れてきて、故郷へ戻る日を夢にみながら死んだと聞く。

「スケジュール的には余裕だったはずなんだが、暑くてはかどらなくてね」

そんな風に言い訳して、ギルはベッド脇の椅子に勝手に座った。

「で、おまえはどうした？」

話せ。と、目が言っていた。

別に秘密にしなければいけないようなことではない。むしろ報告すべき事柄だった。ただそれを口にするこゝと自体、気が重い。

それでも、黙っているわけにはいかないだろう。

「あいつ、あの子が天使だって言うんだ」

黒い自分の靴を見下ろしながらありのままを吐き出した。

「普通の……、いい子だと思ってたのに」

「悩んでるようだから話して欲しいって昨日も言ってたじゃないか。秘密を教えてもらって嬉しくないのかい」

なんでもないことのようにギルは言った。それがアディナかどうか確認もしなかった。いや、他にいないけれど——そうだ。

いつでもこうやって帰ってきてから話すのは、結局スヴェンのことなんかより彼女についての方が多かった。

ここまできてやっと気が付いた。

「知ってたんだな、ギル」

顔を上げた。ギルは笑っていた。

「怖い顔だ」

「どうして——なんで言わなかった！」

「何故かって？ 考えてごらん。わかるはずだ」

ギルは腹が立つくらいに平然としていた。机の端を握る手の爪が

痛んだ。

「おまえが天使を嫌っている、いや、憎んでいるのは知ってるよ。僕だって好きじゃないさ。だけど、近づかなければわからないこともある」

呼吸の音がやけにうるさく耳の奥で響いた。そうか、そういうことか。

「本当はスヴェンではなく、アディナのことを調べさせてた——」

「スヴェン・ボルマンは、もちろん問題のある人物さ。証拠は残していないが、裏の社会とつながりがあることは確実だろう。だけど、それを暴いたからといってたいした旨味はないね。実際に被害を受けている人間以外には」

第36話 八月 三赤の日(3)

こそこそ悪事をはたらくような貴族など、天使に比べればそりゃあ小物だろう。実際、天使の実態について一般に知らされることはほとんどない。偶像化された、伝説と区別の付かないような話が教団から発表されるだけだ。

息を深く吸って止め、ゆっくりと吐き出す。

冷静になるんだ。全部、ギルの計算通りだった。なにも取り乱すようなことはない。さあ、カトリーネになれ。

「そうですね。天使に近づけることなんてそう滅多にありませんから、教団の裏側を探るには絶好の機会といえるでしょう。でもそんなの、初めから言うてくださってよかったです。私だって、ちゃんと割り切って仕事をするくらいできます」

「知らない方が自然に接することができて、先入観のない情報を得られるだろう。それに――」

ギルは立ち、一步、二歩と私に近づいた。

「まだ手が震えてる。覚悟が出来たつもりでも、まだ精神的には弱いよ、おまえは」

大きな手が私の手の上に重ねられる。悔しいけれどその通りだ。カトリーネのふりをしないと自分を支えることすらできない。

だいぶ強くなったつもりでいたのに、ギルの方が私のことをよくわかっているみたいだ。

「大丈夫だ、エル。気が付いたことを話してごらん。まずはそう、証拠だ」

「え……」

「なにか証拠を見せてもらって、それでただの子どもにしか見えな

「いおまえの可愛い生徒が、天使だと信じたんだろう。たとえば、光^{エン}呪^{レザ}とか」

光呪。人を癒す天使の奇跡。

いや、そんなものはない。アディナは真剣だった。嘘を言っているようには見えなかった、それだけだ。

「……もしかして、なにもなしに子どもの言うことを信じたのかい」
答えないと意外そうにそう言われて、私は拗ねたいような気持ちになった。

「だって、つじつまが合うんです。ユーリエやスヴェンの態度も、人目についてはいけないとかいうことも、エーレンフェストから来たということも」

「まあ、それはそうだが。しかし、その全部を知っていて不思議に思っていないながら、生徒が天使という可能性をおまえがまったく考えでもないかったとはね。ユーリエが光神官だつてこともわかったんだから、いつ気づくかそこちは待ちかまえてたつてのに」

「それは……」

想像もしなかった。天使が操^{カンティザ}光師もつけずに神殿から出てくることなんてありえないと思っていた。それこそ教団の刷り込みの成果だ。あのいまましい神学の授業のせいだ。

「天使が任務もなく神殿から出るなんて……、そんなことがあるんですね」

「あるだろうね。教団に属さず、あちこちを旅しながら救済を行っている天使もいるそうだし。もちろん、教団はそういう天使の存在を隠したがってるから、公にはされてないが」

「そうなんですか」

なんだか自分が情けなかった。

「おまえには探偵は向いていないようだね」

「……すみません」

「別に探偵になれなんて言っていないさ。充分だよ。おまえはよくやつてくれる」

頭を撫でられても文句を言う気力さえ沸かなかった。

「どうしても嫌なら、もう引き上げてもいいんだよ」

そんなことを言われるとは思ってもいなかった。

このまま引き下がれて？

私はゆっくりと首を横に振った。中途半端なままは耐えられなかった。

「これは仕事だし、途中で放棄したりはしません。そういう、約束ですから」

そうと決めたら、腹をくくるしかない。

「……それで、何を調べさせたいんですか？」

間近にあるギルの顔を見上げると、彼は満足そうにひとつうなずいた。

「おまえは天使についてどう考える？ 好悪の問題じゃなく、その在り方についてどう思うか、ということだよ」

「そうですね……。天使庁が彼らを神聖な存在として扱い、多くの情報を秘匿しているために、国民の間では勝手な理想像が横行していると思います。実際、天使なんてありがたくもなんとも思っていない私でも、彼らはもつと特別な存在だと思っていました」

私は慎重に言葉を選んだ。ギルに軽蔑されたくはなかったからだ。「でもアディナは、少なくとも私の知り得た範囲では、ごく普通の子どもと変わりませんでした。あの、これ、気づかなかったことに対する言い訳じゃないですよ。そりゃあちよつと変わったところはありませんけれど、それは人間らしくないという意味ではなくて、むしろちよつと大人びていると感じるくらいのもので……」

ギルは私の手首を離し、頭の後ろで手を組みながら大股に椅子に戻った。

「一般に言われる天使らしさは感じなかった、ということだな」

「はい」

「それでも、彼女は本物だと思うんだね」

「だって……、アディナはそういう嘘をつく子じゃないんです」

理屈ではないことを言ってしまったが、ギルはそれ以上追及せず
にいてくれた。

第37話 八月 三橙の日（1）

とりあえず、考えなければいいんだ。

己を憂鬱にする思い出は封じ込めて、カトリーネとして、厳しく時には優しく接すればそれでいい。扉の前に立って深呼吸すれば、いつもと同じ「私」になれる。

朝の縦林の中を歩きながら、私は自分に言い聞かせ続けた。途中、たきつけを集めているダニエラに行き会って挨拶をした。大丈夫、いい笑顔ができた。

日なたに出ると屋敷の赤い屋根が見えてくる。ゆるやかな坂をのぼって、門衛さんに挨拶をして、ベルを鳴らして——そんないつもの手順を踏むはずだった。

けれど、その日は違った。坂をのぼりきる前に、門のところから駆けてくる小さな影が見えたのだ。

ああ、そんなに走ったら危ないのに。

「カリン！ おはよう。具合はどう？」

アディナは私に体当たりするようにして止まった。小さな手が私のスカートを握る。

どうしてここにいるんだ。待ってくれ、心の準備が。

「あのね、今日はカリンがこの前好きだって言っていたお茶をまた容れてもらうようにしたわ。覚えてる？ 杏の香りがするやつよ。それでね、あたしね、言われた三ページ分をちゃんと昨日寝る前に覚えてきたし、今日のお昼はダニエラがおいしいパイを焼いてくれるって」

おはようの挨拶を返すより先に、アディナは次々と話した。

平気な振りをして、いつもどおり振る舞わなければいけない。憎しみは忘れなければいけない。

そんな覚悟は必要なかった。私は気が付けばアディナの髪を撫で、微笑み返すことができていた。

いつから外で待つてくれていたんだろう。指に触れる金の髪が熱をもっていた。

「もう怒ってない？ カリン」

心配そうに見上げてくる青い瞳をのぞきこむようにして、私は額を彼女の額にくっつけた。

「ありがとうございます。すっかりよくなりましたよ」

アディナが笑う。ああ、本当に、あたたかい。

お人形に囲まれながら、いつもの部屋でアディナと向かい合った。何を恐れていたんだろう。今私の目の前にいるのは、得体の知れない生き物ではなく、ただの寂しがり屋の女の子だ。

「率直に言って、昨日は驚きました。考えてもみなかったものですから」

アディナはちゃんと本を広げて授業の態勢をととのえていたのだが、私はすすんで無駄話をふった。

「カリンは天使がこわいの？」

「……いえ、まさか。あなたはかわいい私の生徒ですよ。でも、疑うわけではないですが、いまいち実感が湧かないというか」

そんなに怯えていただろうか、昨日の私は。

「信じられないのね」

「まあ、そうです。だからアディナ様、なにか証拠を見せてくれませんか？」

「証拠？ そうねえ」

じゃあこれ、と、アディナはいつも首にさげているペンダントを

つまみあげた。

「冷命石っていうの。天使にしか作れない石よ」

濁った白だと思っていたその石は、近づいて見ると、内部から燃えるような輝きを放っていた。

「確かに、不思議な感じのする石ですけど……」

「天使はね、癒しの力を持っているでしょう。怪我や病気を治せる」
アディナは話を変えた。それともどこかで繋がっているんだろうか。

「^{エンレザ}光呪ですか」

「そう。あれはね、生きるための光をね、注ぐからできるのよ。でも、それを注ぐためには光を集めなきゃいけないの。太陽の光じゃないのよ。それはね、命あるものがみんな持っている活力なの。天使たちは、神殿にやってくる病氣の人たちを治すために、温室の花から少しずつ光を集めてるのよ。あのね、カリンたちが息をしたり食事をしたりするのは、生きるための力を空や食べ物からわけてもらうためでしょう。それと同じことを、天使は別の方法でできるの。そして人に与えることもできるのよ」

初めて聞く話だった。私はうなずきながら、全てを記憶することに神経を注いだ。

「その光を蓄積しておくことができるのが、この石なの。天使は自分の体の中にも光を持っているけれど、溜めておける光の量には限界があるのね。だから、これを常に身につけて、無駄が出ないようにしているの」

命の力が宿っているという石は、見つけ続けると目が痛くなってきたそうだった。そういえばレオが、なにか溜まっているとか言っていたっけ。

「その光を集めるといふのは、意識的にやるんですか」

「普通はね。よくわからないけど、自分が弱つているときに体が勝手に光を集めることもあるって聞いたことがあるわ。ほんと、天使はいつも、普通にしててもその力が少しずつ溜まっていくの。で

もたくさんの人を治すには足りないから、かわいそうだけど花や木からわけてもらうんですって。あたしは、まだそれがうまくできないの。でもこの石に、ずいぶん力が溜まってしまってるし、ひよつとして気づかないうちに……」

「ハーブを枯らしたかもしれない、と？」

「そうなの」

私はまた、悪魔が天使を狙って寄ってくるから、ここのハーブが枯れてしまったとかいうことなのかと思っていた。

第38話 八月 三橙の日(2)

「光呪には二種類あるのよ。光を集める採光と、光を与える送光ね。カリンは操光師^{カンティザ}を知ってる？」

「……天使の護衛、ですよ」

噂には聞いていた。ものすごく難しい試験を通らないと入学できない専門の学校があつて、しかも年間数人しか資格が取れないとかいうやつだ。

「うん、それも役目だけど、彼らは本当は天使の弟子みたいなものなの。天使は数が少ないから、天使だけで集まってくる人たちを治療するのにも限度があるわ。だから、もっと出来る人を増やそうとしてるの。素質のある人を捜し出して、光呪を教えているわけね。送光なら操光師にもできるのよ。……修行をすればね」

「へえ……」

それはすごいことだが、ある意味、天使の特殊性を薄める話だ。天使でなくても光呪を使えるとは。だからこそ、操光師の本来の役割について、教団側は国民に知らせようとしないのだろう。

「でも採光は天使にしかできないから、操光師は、天使が光を集めた冷命石を持っていないと、力が使えないというわけ」

「はあ、なるほど」

そう言うってから、私はあることに気づいて笑った。

「なに？」

「今日はアディナ様の方が先生みたいです」

「まあ、ほんとね」

アディナは嬉しそうに目を輝かせて、それから、似合わない咳払いをした。

「そういうわけで、才能があるってわかった操光師は、そこから三年くらい勉強してやっと送光が扱えるようになるの。でもあたしの……、あたしの操光師のシュテフは、一年でできるようになったのよ。すごいでしょう」

自分のことでもないのに妙に得意げだ。

「あなたはまだ力が使えないのに、どうやって教えるんですか？」

「あたしが教えたんじゃないわ。すぐできるようになったから習う必要が無くなって、あたしのところに回されたの」

つまり、そいつは弟子ではなく、純粹に護衛としてアディナにっ
いているわけか。

「その人はどうして、あなたの操光師なのにここに来ていないんです？」

「それは……、その。シュテフが残りたいって。治療の必要な人がいて、それで。あたしはひとりでも大丈夫だから。ほら、ユーリエがいるしね」

そのユーリエはいつも部屋にこもっていて、ほとんど姿を見せないじゃないか。

ひとりでも大丈夫だなんて、嘘だ。こんなに寂しそうにしているくせに。

「早く会えるといいですね」

ああ、そうだ。レオが来た時、確か言ってたな。シュテフは、レシリア様についているのかなんとか――

「うん。あのね、シュテフはね、すごくかっこいいのよ！ カリンも見たらびっくりすると思うわ。澄んだ空のような瞳で、髪は明るい赤なの。背が高くて、でも私といるときは膝についてよく目を合わせてくれるの。そしてね、口数は少ないんだけど、低く響く声で、ささやくとそれは歌のように綺麗なんだから！」

アディナは目をきらきらさせながらその男について語った。

なんだか嫌な気分だった。別にそんなこと詳しく教えてもらわな
くたっていいんだが。興味もないし。

そうだ、話がそれてる。元に戻そう。今は情報を引き出すんだ。

「ともかく、その。なんでしたっけ。採光と送光の二種類が光呪でも送光は天使ではなくてもできる、と」

「そう。カリンもやってみたい？」

「三年も修行するのはさすがに……。で、まとめると、天使の力というのは、その生きるための力、光を、取り上げたり与えたりできるということなんですね」

それでは、救済の天使の持つ光呪の力というのは結局——いや、今言っても仕方のないことだ。黙っていよう。

「うん。死んだ者は生き返らないし、天使にも治せない病はあるけれど」

「では、しおれた花を咲かせることは？」

「そのくらいなら簡単よ」

「ハーブ園にその力を使えないのですか？」

アディナは意外そうにまばたきをした。

「それは、できると思うけど……あたしにはまだ無理だわ。採光だっと思うようにいかないのに」

「そうですか」

「……でも、いい考えかも。ハーブが元に戻ったら、お祭りができるかしら？」

「悪魔がいるという噂がなくなれば、可能かもしれませんね」

「じゃあ……、やってみる価値はあるわね」

アディナは私の手を引いて、階段を下り、庭に出た。納屋の側のバラの茂みは、ティーロの努力もむなしく、くすんだ色でしよげていた。

「これで練習するわ。春はまだ無理だったけど、もう九歳になったんだし、そろそろできてもいいと思うの」

この茂みの生命を奪ったのも、アディナの無意識の力なんだろうか。

「私、天使は生まれつき奇跡を操れるものだと思っていました」

アディナは茂みに右手をかざし、左手でペンダントの石を握った。
「人それぞれだけど練習がいるの。乗馬みたいなものね」

奇跡の業と交通手段を同列に語るのはどうかと思ったが、妙に納得してしまった。

「あたしの場合、集中力が足りないらしいわ」

「……そうでしょうね」

これには大いに納得した。

第39話 八月 三橙の日(3)

アディナの特訓はなかなか上手くいかなかった。

庭で暑気にあてられてしまつて具合が悪くなり、途中から部屋に戻つて対象を切り花に変更したが、花瓶にさされたバラはしおれたままだ。

私はそもそもやり方を知らないから、励ますくらいしかできるところがない。アディナは「やっぱり無理なのかもしれないわ」とまた落ち込みだしてしまった。

気分を切り替えさせようと、それからしばらく授業をした。

お昼ですとダニエラが呼んでくれた。アディナが言っていた通り、とてもおいしいパイが出てきた。

食後に部屋に戻ると、少しは疲れも取れたのか、アディナはまたバラに挑戦しようとした。ところがそこへレオがずかずかと入り込んできて、授業見学だと言いながら空いていたアディナの椅子に陣取った。

「午後は遊びの時間なんですよ。授業見学はできません」

追い出そうと思つてそう言ったのだが、まったく通じなかった。

「そうなの？　じゃあ一緒に遊ぼう。なにをしていたのかな」

「内緒よ」

アディナはさりげなく花瓶から離れてウィーダをかまっていた。練習のことは、レオには教えられないらしい。

「女同士の秘密、つてわけかい？　仲間はずれは寂しいな」

「貴方はハーブ園の調査をするためにいらしたんじゃないんですか？」

「うん、調べたよ。刈り入れてあつたらベンダーは無事だったみた

いけど、残りはだいたい全滅かな。まあ僕は草花の専門家じゃないし、それ以上はわからないよ。そんなことより、僕の興味は君のような美しいつぼみにあるな、先生。君についての授業をしてくれると嬉しいんだけど」

「そこ、あたしの席よ、レオ」

「これは失礼」

アディナに椅子を奪われると、レオはソファの上の人形をよけてそこに座った。

「あー暑い暑い。ここ本当にアイスラーなの？　せっかく避暑地に来たっていうのに、こう暑い日が続いちやたまらないよ」

「わかったわ、レオ。あなたほんとはお仕事ついでに涼みに来たんでしょ」

「よくわかってるねおチビちゃん。そう、エーレンフェストはもつとすごいことになってるんだよ。日照り続きで、今年の収穫はやばいんじゃない？」

悪びれずにレオは言った。

相変わらず、ふざけているのか馬鹿なのかよくわからない男だ。ユーリエたちの前では一応、真面目な好青年の皮をかぶっているのだが、その皮もごくごく薄いものだった。

ぺらぺらとしゃべり続けるレオに、私は溜め息をついた。

アディナが気落ちしているっていうのに、心配りというものができないのかこの男は。まあできないんだろうな。他人の感情なんてまるでおかまいなしなんだから。

「カトリーネ、君ももつと楽しそうにしないか。せっかく僕といえるんだから、笑顔を見せてほしいな」

あんたがいるから不機嫌なんだよ。

「まあ、申し訳ありません。気が付きませんでしたわ」

結局、レオはダニエラが呼びに来るまでずっと人形を抱いて座っていた。スヴェンが呼んでいると聞くとしぶしぶ立ち上がって出て行ったが、去り際にもまたくだらないことを言った。

アディナはおかしそうに笑ってから、もう一度花瓶の側に寄った。

「レオはあなたが天使だと知っているんですよ」

「ええ、そうよ」

「やっぱり。」

「他の方は？」

「おじさんには、ユーリエが話したって。ダニエラは知らないと思うわ」

「じゃあ、どうしてレオに隠したんです」

「だって……、練習して、結局できなかったら情けないもの。この特訓のことはユーリエにも秘密にしてね、カリン」

私は約束をした。

無駄話も結果的にはいい休憩になったようだ。アディナはすっかり元氣を取り戻していた。

「ねえ、レオってカリンのことが好きなのかしら」

「まさか。ふざけているだけでしょ」

「そうよね。そんな真剣な感じはしないものね」

子どもにまで見抜かれてるぞあいつ。

「きつと暇なんでしょうね。仕事とはいえこんな田舎に派遣されてせいぜい好意的に解釈してそう言っと、アディナもしみじみと返した。」

「そうねえ。レオも操光師の勉強はしてるみたいだけど、天使庁の人じゃないものね」

「そうなんですか？」

「うん。陸軍庁だったと思うわ」

よりによって軍人かよ。

私は今より更にレオを嫌いになることにした。

第40話 八月 三橙の日(4)

「カトリーネ、話をしないか」

門を出たところでレオが待ち伏せしていた。本当にしつこい男だ。
「私はあなたとお話するようなことはありません」

「僕の方にはあるんだ」

坂を下って林へ向かう。たぶん、こいつとはある程度親しくなつた方がいいんだろう。それだけの価値を持っている男だ。けどそういう利害の問題以前に、話をしていたくないと思うんだから仕方がない。怒らせない程度にあしらおう——と、考えていたのだが。

「アディナが何者かもうわかってるんだろう。君は彼女の正体を誰にも明かさないと誓えるかい」

レオが切り出した内容はいつもの軽口ではなかった。

私は足を止めて、彼と向き合った。

「……はじめからそういうお約束ですから。仕事のことを口外したりはいたしません」

「演技はそこまでにしてもらいたいね」

「私は演技なんて——」

レオはいつもと変わらない、余裕のある表情をしていた。けれども何故か私の体はすくんだ。

「僕は真剣に話しているんだよ。営業用の笑顔はやめて、あの林の前で見たような冷たくさげすむような表情をしてくれないかな」

……そんなひどい顔をしただろうか。

レオはおかしそうに吹き出した。緊張は一気に緩んだ。

「そんなに困った顔をしなくてもいい。つまり、本音を見せてくれるってことさ。君の言う、へらへらした大仰な物言いもやめただろう。」

友達のような感覚で、腹を割って話してほしいんだ。わかるね？」

彼は馴れ馴れしく私の肩を叩いたが、意外なことにそれほど不快ではなかった。

「僕だつて本気で君を奥方にしたいなんて思つてないさ。実際、君はちよつと若すぎるしね。さあ、僕の本心をひとつ打ち明けたよ。次は君の番だ」

私はひとつ深呼吸をした。

「私はアディナ様のことがとても好きなんです。ですから、誓つて彼女に害の及ぶような真似はしません」

「……それは、神に誓うの？」

「いいえ、あなたと私自身に」

私はもうすでにアディナの正体をギルに話している。けれど口にしたことには嘘はなかった。

「やつぱりいいね、君は。話していて気持ちがいい。どうだい、年の離れた親友つてことで、ひとつ」

「お断りします」

すげなく言い捨てたつもりだったのだが、それほど冷たい口調にはならなかった。

「君、フリーネに通っているんだろ。オルデンベルクにもうちの別荘はあつたような気がするな。ねえ、今度誘いに行つてもいいかい」

そのせいか、レオは私の言葉を無視して調子よく続けた。

「家族以外の面会は禁止ですよ」

「そんな決まりがあるの？ いやだなあ。変えてもらおうよ」

まるで夕食のメニューの変更を希望するかのような口ぶりだったが、本気で学園にかけあいそうにも聞こえるのがこの男の怖いところだ。私はおかしくなつて笑つた。まあ、変な奴だけど、慣れてしまえば悪くないかもしれないな。

「採光に送光か。なるほどな。一般的なイメージでは送光ばかりが天使の能力とされているが、そちらは実は人間にも扱えてしまう、と」

「そうなんです。しかも採光は、あなたの言葉を借りるなら、一般的なイメージでは」

「悪魔の能力だ」

私と同じ結論にギルは達した。腕を組んで、難しい顔をしている。「伝説上」ではなく近年の悪魔には、触れただけで人を昏倒させるとか、近づいた者が衰弱するとかいう話が多い。草木を枯らすというのも本当なら、ますます同じだ。

「誰もがそう思う。教団が隠すのも道理だ。これは本部に報告する必要があるな――だが電信はまずい。帰ってから直接、というのがいいだろうな」

「私もそう思います。慎重になるべきです」

ギルは私を見て、ふと笑みを浮かべた。

「よくやった」

「は、はい。ありがとうございます」

真正面から褒められて、くすぐったいやら照れくさいやらだ。昨日あんな醜態をさらしたところだっていうのに。

「今後もしけそうか？」

「多分。怪しまれてはいないと思います。ただ……、伯爵のことは少し気にかかりますが」

「フラウンホーファー卿か。天使の能力のことももちろん把握しているんだろうな」

「はい。なんでも操光師の資格を得ようとしているとか。アディナの話では陸軍庁に所属しているらしいのですが、それで天使庁にも出入りできるという時点で、相当深く関わっていますね」

「そうか、軍か。どちらかな」

テニエスには神兵团と皇国騎士団の二つがある。神兵团は教団が意のままに動かせる新設の組織で、皇国騎士団は以前からの王国軍

を改名したものだ。

教団と皇家、この二つは、軍以外でも対立している。貴族は教団派と国王派に分かれて、水面下で争っているのだ。

教団派はいち早く天使とヴァン神教の開祖フーゴにすり寄った者たちで、今では大きな権力を得ている。国王派はそれにあやかれなかった負け組だ。皇王と称されるようになったのに、未だに「国王」という呼び名を使っているところからも、過去にすがっている連中だと知れる。

たとえば、スヴェンは教団派だ。姉が光神官にあがっていることを見ても、ボルマン家は根っから熱心な教団側なのだろう。

「それは、やはり神兵团じゃないですか？ スヴェンも親しそうにしていましたし、というか、下手に出ているというか。もちろん爵位のこともあるでしょうけど」

「ふむ。どちらにせよ、気になるな。僕も彼については噂程度しか知らないし、戻ったら調べてみるか」

「ええ、お願いします」

レオが油断ならない人物なのは確かだ。あの口車にのせられて、うっかり余計なことを喋らないようにしなければ。

休暇はあと一週間と少ししか残っていないが、気を引き締めてあたらうつ、と私は決意を新たにした。

第41話 八の月 三緑の日

「潰えし息吹よ、失われし躍動よ、目覚めよ。今、我が力をそなたに与えん」

アディナは一輪挿しを握りしめ、眉間にしわを寄せたままぶつぶつ呟いていた。特訓を始めて二日、成果は未だ現れていない。

私はこのところだいぶ懷いてきたウィーダと戯れながら、そんなアディナを眺めていた。なんていうかどうにもこうにも、癒しの奇跡を起こす天使って顔つきじゃないんだよな。

「……アディナ様。私が意見するのもどうかと思うのですが……言ってもいいですか」

「なあに？」

「その、光呪なんですけど。どんな風に光を与えるんです？ 感覚的に」

「うんとね、こう、伝われー、伝われーって、力を込めてる感じね」
変な節をつけながらアディナは言った。

「はあ。……あの、これは個人的な考えなんですけど、そんな難しい顔をせずともよいのでは？」

「だって難しいのよ」

「いや、それはそうなんでしょうけど。でも、花を咲かせるというのはもつと、穏やかな気持ちでするものですよ。私の父は庭で花を育てていたんですが——ここのような広い庭ではなく、小さな花壇でしたけど。花や命を輝かせるのは思いやりだといつも言っていました」

「カリンのお父様は優しい人なのね」

あの人のあれは優しさだったのだろうか。今はもうわからない。
答える代わりに私は訊いた。

「あなたのお父様は？」

「あたしには……いないの」

私はすかさず突っ込んだ。

「天使には、母親しかいないんですか？」

「そうじゃないわ。ただ、あたしは会ったことがないだけ。たぶん、どこかにいるか、いたんだと思うけど。だってそうじゃないとおかしいものね」

そうか。天使にも両親はいるものなのか。そうなるとますます人間に近いな。

「ちよつと、お借りします」

私は一輪挿しからバラを抜いて、棘をひとつひとつ折った。

「素人の浅知恵かもしれないませんが、手をかざすより、持った方が直接に力を伝えられる感じでいいのではないかと思うんです」

済むとアディナに渡して茎を握らせた。アディナは私を見上げて、
「じゃあカリンも、言った。」

「私？」

「そう。一緒に持って。そしたらあたし、うまくできそうな気がするの」

まあ、気休めになるならいいか。私はバラに手を添えた。ちょうどアディナの手を包むようにして。

「穏やかな……、落ち着けばいいのかしら。花に水をやるように、
つていつてもよくわからないんだけど。想像してみて、カリン？」

「そうですね。水は朝のうちにそつと、やさしく降りかかるように……葉や花にはかからないように、土をめがけて撒くんです。とてもいい天気で、風が吹いていて……光の加減によつては虹ができません。花壇にはたくさんのお花が。緑の先っぽにのぞいた紫や赤が、割れてやがて花になる」

目を閉じれば、色とりどりのクラベルが咲き誇った。もうずつと

思い出すこともなかった、遠い日の朝。当たり前にあった風景を。

「あつ。ねえ、ほんの少しだけ、しゃんとしたような気がしない？」

アディナの声に目を開けると、バラは心なしか色を取り戻していた。いや、単に光のうつり具合が違っただけかもしれないが、思い込みでもいい。できるといふ気になれば大丈夫だ。

「もう一息ですよ、きっと」

私のはげましにうなずいて、アディナは祈った。

「咲いてください。元気になってください」

それは優しい願いだった。子どもを寝かしつける母の手のような温かさを思い浮かべた、その途端、私の手の中で奇跡が起きた。

光が部屋中にあふれた。眩しく目を灼くような普通のそれではなく、あたりを取り巻く色が一気に鮮やかになるような不思議な光で包まれている間はまるでさわやかな朝の空気を胸一杯に吸い込んだような心地がした。バラは今しがた摘んだばかりのような瑞々しさで私たちの手にあつた。

「咲いたわ！」

アディナは頬を紅潮させて言った。花と同時に彼女まで元気になったようだった。

「ありがとう、カリン。あなたのおかげよ」

「いいえ……」

こんな笑顔は見たことがない。今の光のせいなのか、とても綺麗に見える。

「あたしわかったような気がするわ。お庭に出てためしてみましよう。ね」

アディナの手が離れた。咲いたバラを花瓶に戻して、駆け出す後ろ姿を私は追った。

その日の夜、私はアディナとハーブ園に出かけた。女の子だけじゃあぶないからなどと言って強引にレオも付いてきたりしたが。

アディナはうまくやった。一度の祈りで周囲を満たし、冷命石に溜まっていた光を降り注がせた。その姿が神々しかったことは、認めなければならぬ。彼女は本物の天使で、そして天使は奇跡が起こせる。それは信じざるを得なかった。それ以上のことは、私にはまだわからないけれど。

ケルステンに奇跡を起こしたのがこの小さな天使だということはほんの数人しか知らないことだったが、ともかくこれで町全体が救われたのだと皆が信じた。畑の作物まで生き生きとし、人々の表情も明るくなった。

レオが出て行って教会長を上手く説得したおかげで——何を言ったかは知らないが——祭りの開催はすんなりと決まった。ただ、雑草も異様に元気だったことが唯一の問題で、アディナは「さすがにまだそこまではうまく使い分けられないわ」と肩をすくめた。

第42話 八の月 三紫の日

もう、夏が終わろうとしている。

アディナはいつまでここにいるのか、それはわからないが、夏期休暇の終わりが迫っていた。あと数日もすれば私は、九の月から始まる学院の授業のためオルデンベルクに戻らなければいけない。

ユーリエはそのことを承知してくれていたが、アディナにはまだ言っていない。ユーリエが話したかもしれないけど。

せめてアディナがエーレンフェストに戻るまで、学院をお休みしてここにいられないだろうか、と私は思った。天使のことを調べるためというより、ただアディナがひとりになることを心配したためだ。近頃のアディナはずいぶん健康そうに見えた。よく食べるし、庭で遊ぶようになったし、初めて会った時に比べればだいぶ頬や腕にも肉が付いていた。私がいなくなったならこの子は誰と遊ぶんだろう。レオはなんか信用できないし、ユーリエはいつも部屋の中だ。スヴェンは……、そう、一応こいつのことも気になる。結局なんの手がかりもつかめないままだなんて。

だけどギルにも仕事があるし、わがままは言えない。

もう二度と会えなくなるのがわかっていても、別れなきゃいけないんだ。

「明日ですね、お祭り」

「そうね」

三紫の日、綴りの練習をしているアディナの前に、私は座っていた。

「もう飾り付けが始まっていて、皆準備に忙しいようでしたよ」

「そうなの？ いきなり決まって、間に合うのかしら」

「大丈夫ですよ、毎年やっていることなんですから。……楽しくなるといいですね」

「うん」

アディナは止めていた手を再び動かし始めた。

「行きたいですか？」

「ちよつとだけ……。だって、見たことないんだもの、そういうの」

「じゃあ、一緒に行きましょうか」

私は思いきつて言った。アディナがとても行きたがっていることも、禁止されていることも、承知の上で。

「あなたの力でできるようになったお祭りです。せつかくですから、見ないともつたないでしょう」

「そうね……。きつと人がたくさんいるけど、お祭りは楽しいことなんだし、カリンと一緒にならきつと大丈夫だわ」

アディナは声を潜めて、嬉しそうに言った。

「連れてつて。ユーリエには内緒よ」

「わかりました。こっそり行くんですね」

大鳥の巣へ出かけた時と同じように、納屋の屋根を使って屋敷の外に出よう。門番には適当に言い訳をして行けばいい。どうせ彼が見張っているのは外からの侵入者で、アディナではない。

お昼過ぎ頃に迎えに行きますから、と計画を立てていた時、いつもよりせわしない足音のあとにドアがノックされた。私たちは口をつぐんだ。お茶を持ってくる時のダニエラは、こんな歩き方はしない。現れたのはユーリエだった。

「アディナ様。シュテファンが参りました」

アディナは手にしていた人形を取り落とした。シュテファン。何度かアディナが楽しそうに口に使っていた、操光師のシュテフのことだろう。なのに、私の見たアディナの表情は、硬くこわばっていた。「すみません、先生。アディナ様、お早く、こちらへ」

ユーリエの言葉に、アディナははじかれたように駆けだした。ユーリエは歩いてそれを追った。私は……、そのまま部屋にいることなどできなかった。ユーリエに止められないのをいいことに、彼女の後について階段を下りた。

ホールでは、白い服を着た一人の男がひざまずくところだった。いったん下げた頭を上げる動作は恭しく、まるでそこが舞台で彼らは姫君とそれに仕える騎士を演じているかのようだった。たぶん、似たようなものだ。天使と、それに仕える聖職者。

「シュテフ……」

「アディナ様。お迎えに参上しました」

男の声は低く、美しく響いた。

「そう……そう」

アディナは泣きそうな顔をした。けれど泣かなかった。

私はその横顔を見ながら、なぜか、抱きしめてあげたいという気持ちになった。彼女が一体何に心を痛めているのかすら、わからないのに。

「お元気そうで安堵いたしました。よく、辛抱なさいましたね」

実際には、アディナに手を伸ばしたのはシュテファンだった。私は離れて見ていただけ。シュテファンはアディナの金の髪を指で軽く梳くようにして、ひとつ頷いた。それから、膝を伸ばしてまっすぐに立ち上がる。

背、高いな。どれくらいあるんだ。

「あの……。明日までいてもいいかしら。今すぐ出かけなきゃいけないわけじゃないんでしょ？」

アディナが思い切ったようにそう言い、シュテファンは少し意外そうに瞬いた。

「あたし、戻る準備をするわ。でもすぐには終わらないと思うの、だから」

アディナはちらりと私を見てくれた。そうだ、私たちは一緒にお祭りへ行くのだ。

「はい。それがよろしいでしょう」

そう答えたシュテファンと目が合った。アディナがいつか言っていた通りの、空のような青い瞳だった。

いやな感じの顔だ。

なんでこんなに不快な印象があるんだろうと真面目に考えてみる。たぶん、嫌いな誰かに似ているんだ。それが誰だかは思い出せないが、きつとそいつにはろくな目にあわされなかったに違いない。だから、世間で言えば整った顔立ちというやつに数えられるであろうこの男が、私は気に入らないんだ。

「この人はカリン。あたしにお勉強を教えてくれた先生なの。優しく、とっても頭がいいのよ」

「どうも、はじめまして。カトリーネです」

素っ気なくなりそうな声をおさえて、ゆっくり言う。

シュテファンは軽く頭を下げた。

「カリン、この人はシュテフ。前に話したでしょう？ あたしの操光師の」

「アディナ様……。ご身分は明かされぬようにと、あれほど申しましたのに」

「ごめんなさい、シュテフ。でもカリンは秘密を守るって約束したのよ」

軽い溜め息の後、シュテファンはこちらに向き直った。

「シュテファン・ウーヴェエ。アディナ様にお仕えしております。彼女がお世話になったようですね」

「いえ。それが仕事でしたから」

握手のために差し出された手は大きかった。私は社交用の笑みを浮かべたが、シュテファンは眉ひとつ動かさなかった。なんて無愛想な男だろう。レオとは正反対だな。

「聞いて。あたし、送光ができるようになったのよ」

握手が終わるとアディナはすぐに彼の腕にとりついて、それは嬉しそうに話しはじめた。次々と出てくる「報告」はほとんど私の知

っている内容だった。シュテファンはそれを聞く間もほとんど表情を動かさず、よくこんな反応のない相手にこれだけ喋り続ける気になれるなと感心したほどだった。

第43話 八月 第三聖休日（1）

「あら、先生。今日は聖休日ですよ」

「ええ、そうなんですけれど。昨日、アディナ様の具合が悪そうだったので、気になって」

ダニエラは、疑うことなく私を招き入れてくれた。普段ならダニエラも礼拝に出かけている時間だが、大鳥祭の今日は、夜に礼拝が行われる。皆で蝋燭をともしながら祈り、それが祭りの締めくくりになるのだ。

アディナは彼女の手持ちの中で一番フリルの少ない動きやすい服を着て私を出迎えた。シュテフにはお買い物を頼んで出て行ってもらったところなの、ちょうど良かったわ、と微笑む。

「帰ってきてあなたがいなかったらさぞ心配するでしょうね」

そういう時もあのむすつとした表情なんだろうか、と私は想像した。

「そうねえ、じゃあ、お手紙を残しておくわ」

ちよつと出かけてきます、危なくないので心配しないでください。と、紙に短く書き付けて、アディナは満足したようにペンを置き、それで準備は完了した。

外に出る時、珍しく門番はいなかった。用でも足しに行ったのだろうか。運のいいことだ。

林を歩くアディナはご機嫌だった。前に通った時は夜だったので、昼に歩くのは初めてのはずだ。

「それ、かわいいですね。どうしたんですか」

アディナの胸に留められた見慣れないブローチに気づいて褒めると、アディナはそれは誇らしげに答えた。

「でしょう？ シュテフがくれたのよ」

なんだ。言うんじゃなかった。羽を広げた蝶を模った小さなブローチは、少し大人っぽくて、アディナには似合わないような気がした。いや、そもそもアディナにあげるなら、鳥のほうがいいんじゃないか。

突然アディナが息を呑むような悲鳴をあげ、私も立ち止まった。

道の端に、なにか異様な茶色い固まりが落ちていた。近づいて、それが鳥だとわかった。

「……死んでるの？」

「鳥は、こんなところで寝たりしませんからね」

私は眼鏡をかけ、スカートの裾を押さえて膝を折った。目立った外傷はなく、くちばしから泡を吹いていた。猟銃で撃たれたというわけでもなさそうだ。

なにかの病気だろうか？

「——行きましようか」

眼鏡をしまつて立ちあがる。あまり見せるものでもないだろう。

アディナの手を引いて、足早にその場を離れた。

「ウィーダもいつか死んでしまうのね」

アディナが呟いた。その通りだったが、なんと答えていいかわからず、私は黙っていた。この町にはまだ不吉なことが残っているような予感がした。

林を抜け、教会の尖塔が見えはじめると、楽しい音楽が聞こえてきた。祭りが近づくかとアディナは少し明るくなった。

子どもから大人までそろいの服を着てずらりと並んだ混成音楽隊が演奏をしている。それに手を振って、私たちは賑やかな通りに足を踏み入れた。

「迷子にならないように、気をつけてくださいね」

「うん」

中央通りの家々は美しく飾り立てられ、出店の謳い文句やら酔っぱらいの談義、子どもたちのしゃぐ声が入り交じって聞こえてくる。アディナはしょっちゅうあれは何、それは何、と質問を繰り返しながら、時に立ち止まったりしゃがんだり走ろうとしたりした。手を繋いでおいたのは正解だった。

教会近くの広場では長机と椅子が並べられ、鳥のロースト——もちろん、大鳥のものではないが——にビール、ワイン、そして卵料理が売られていた。人出は例年と比べて多いのか少ないのか、わからなかったが、充分に賑やかであるように思った。気を抜くと人にぶつかってしまいそうなほどだ。

カレーラではこんな盛大なことはなかったな。規模が違うから仕方ないか。

そんな風に思ってから、意外と平気な自分を不思議に思った。オランダベルクにいた時は、祭りなんて見るのもいやだったのに。

「わあ、かわいい！」

小さな出店にアディナは惹きつけられていた。彼女が見ているのはペイントされた卵だ。どれも派手な色づかいで題材は幅広く、鳥や雲や城や猫や貝、その他この祭りに縁のある物からなんの関連もなさそうなものまで、好き放題に描かれていた。アディナはそれをひとつひとつ取り上げては絵柄を確認して楽しんでいた。

「ナマだからね。気をつけて見てね、お嬢ちゃん」

座って会計をしているおばさんに元気よく返事をして、アディナはこれがいい、これもいい、と選り分け始めた。買う気なのか。でも、持っていないだろうお金なんて。

「五つまとめて買うなら一つおまけしてあげるよ」

その言葉に彼女ははっと手を止めた。やっぱり。

「えっと……ごめんなさい。見ていただけなの」

多分、買い物をしたことすらないんだろうな。仕方ない、これも社会勉強だ。

「はい。これで買いましょう」

出店を離れようとするアディナを引き止めて、私は肩掛けの鞆から出した硬貨を渡した。アディナは「でも」と私を見上げた。

「ひとりで買えるかどうか、やってごらんなさい」

「……うん！」

第44話 八月 第三聖休日（2）

アディナは慎重に吟味して六つを選ぼうとしたが、最後の一つになるはずの二つを右手と左手に乗せて、そのまま動かなくなってしまった。なかなか決まらないので、最後にはおばさんがさらにひとつおまけしてくれた。可愛いとこういう時得するんだよな。

「コックさんをお願いして、明日の朝料理してもらうわ」

初めての買い物が成功したことに満悦のアディナは、編み籠におさまった卵たちを覗き込みながら宣言した。こんなの目玉焼きにしたら普通の卵と一緒にだと思っけど、まあ食べずに腐らせるよりはいいだろう。

「出発は明日になったんですか？」

「うん、そうなの」

とりあえず、これで元気を取り戻してくれるなら充分だ。そう考えた時、間近で耳障りな音が響き渡った。ワイン売りの店先でビンが割れたのだった。

「おまえだろうが」

店主が青筋たてて怒鳴る。

「お、俺はなんにもしてねえっ」

「四の五の言わずに返しやがれ、この盗っ人！」

喧嘩だ。アディナの小さな手が震えていた。

「大丈夫ですよ」

背にかばってその場を離れようとすると、彼女の手が私の腕を掴んだ。人にぶつかられてよろめいたらしい。支えついでに腕からずり落ちかけた籠を押さえる。

「今の人！」

「え？」

「あの人だわ。悪いことしたの」

何故わかるのかとか本当かどうかとか、考える暇はなかった。私は根拠なくすぐさまそれを信じた。人混みをかき分けながら遠ざかろうとする背中を視線で捉え、籠から卵を掴み出して投げる。色鮮やかな卵は、狙い通り男の後頭部に当たって割れた。

「すごいわ、カリン！」

「真似をしてはいけませんよ。食べ物は大事にしなくてはね」

私はアディナに籠を持たせて、なにやらわめいている卵まみれの男との距離を詰めた。

腰のベルトを引いて足をかけ、背中から地に倒す。あちこちから悲鳴と歓声が上がった。

「さあ、盗った物を返しなさい」

馬乗りになつて動きを封じながら男が肩にかけていた鞆を持ち上げると、ずしりと重かった。とんできた店主にそれを渡すと同時に我に返った。

しまった、ものすごく目立ってる。

私は顔を上げて、編み籠を手にしたまま立ちつくしているアディナの姿を確認した。よし、ちゃんというな。悪者がとつちめられている間に、私は彼女の側へ走り寄り、再び手を引いて人混みに紛れた。まったくうっかりしていた。ともかく離れようと、石畳の道を走る。体が小さいのが幸いして、人の林をすり抜けるのは容易だった。

「ここまで来れば……どうにか……」

角を曲がって出店のない小さな路地に入り、やっと一息つけた。あれだけ人のいる場所で立ち回りを演じてしまうなんて、気が抜けているにも程がある。

「すみません、せっかくのお土産を」

そう言つてアディナを振り返つてはじめて、私は異変に気が付いた。アディナは真つ青になつて震えていた。青い目を見開いて私を

見上げ、なにかを訴えるように口を開くと、そのまま倒れた。彼女を抱きとめるのに精一杯で、籠は石畳に落ちてひっくり返った。声をかけても返事はなく、ただ苦しそうに速い呼吸を繰り返すだけだ。なにがどうなってる。走らせたのがいけなかったのか。なんて迂闊なんだ。

せめて、少しでも人の少ないところへと思つて抱き上げたが、体を支えるのが精一杯で、とても人混みを抜けて行けそうにはなかった。

嫌な汗が背中を流れた。あの時と同じだ。見ているだけで、どうすることもできない。なにをしてやればいいのかすらわからない。苦しんでるのに、目の前にいるのに、こんなにも無力で。

「アディナ様！」

低い、声がした。

「シュテファン——」

どうしてここがわかったのだろう。いや、祭りに出かけたことなどお見通しなのか。シュテファンは相変わらずの冷たい目で私を見下ろすと、腕の中から軽々とアディナを取り上げた。

そのまま、私を責めるでもアディナをいたわるでもなく、彼女を抱いたまま黙つて大股に歩き出す。

「ちよつと……」

待てと言つて待つてくれるはずもなかった。私は咄嗟に籠を拾うだけ拾つて、小走りに彼の背中を追いかけた。その足取りは確かで、悔しいが頼もしかった。

祭りの賑わいからずいぶん遠ざかったところで、シュテファンは首元に手を入れて白服の中から石を引き出した。冷命石だ。道端に腰を下ろしてアディナの頭を膝の上に載せ、右手をそのまま彼女の胸に置く。左手はアディナが力を使う時と同じように、石を握りしめている。

準備が済むと、彼は祈りの姿勢に頭を垂れた。

「神よ、恩寵を与え給え。汝が愛し子の苦しみを取り除き、悲しみ

を和らげんことを」

アディナの胸の上にぼつとあの光が灯り、じわじわと消えていった。苦しそうだった呼吸はだいぶ落ち着いたが、ぐったりとしたまま目を開けない。

心配で覗き込むと、シュテファンが短く言った。

「アディナ様は、もう大丈夫です」

「でも、まだ……」

「そんなに不安そうな顔をしないでください」

どうも、こちらを案じてくれているような感じではない。淡々とした口調だった。

「あなたは今、とても動揺している。落ち着いてください。それができないならお帰りください」

第45話 八月 第三聖休日(3)

確かに、私はなんの役にも立たない。けれど、心配して側にいることすら許さないというのか。私はシュテファンを睨んだが、彼はいたって無表情だった。

「……ずいぶん気に入られたようですね
なんだ、どういう意味だ。」

「その辺に座って聞いてください」
アディナの髪を撫でながら、シュテファンは私に指図した。彼女を連れ出し、具合を悪くさせた犯人の私としては、従うしかなかった。

「人が笑うとつられて笑顔になったり、もらい泣きをしたことはありませんか」

あなたはなさそうですねとうっかり言いそうになるくらい、どうでもよさそうな喋り方だ。そのせいで、とんでもない話を聞き流すところだった。

「それを強くしたようなもので……、彼女は人の感情に同調するのです。もちろん、考えていることが読めるわけではありません。ただ、気持ちの色だけをうつして感じるのです」

「——アディナ様が？」

私は思わず辺りを見回したが、誰もいなかった。

「それだけならいいのですが、まずいのは苦しみや痛みにまで同調することです。彼女が倒れる前に、周囲でなにかありませんでしたか？」

「そういえば、ケンカが」

「ではそれが原因でしょう」

私は目を閉じたままのアディナを見つめた。急にまた彼女が遠ざかったような気がした。

「特に、身近な人物に対してそれが顕著で、心を許してしまうとすぐにつるんですよ。ですから、あなたは余計なことを考えず、ただ安楽にしてください。あなたが笑えば、きっと彼女も笑いますよ」

シュテファンは相変わらず、安心させるようにアディナの髪を撫で続けている。

私はなぜか悲しい気持ちになった。けれどそれを抑えた。

「人混みに出られない理由も、わかっていただけでしたね」

「……天使は、みんなこんなんですか」

「いえ、この御方だけです。普通の天使様は、むしろ私に似ていますね。皆物静かで、己を表に出しません」

こいつはどうして、こうぺらぺらと喋ってくれるのだろう。どこまで本当だろうか。

「私は彼女に強い影響を与えぬよう、常に感情を抑制しています。

それが、操光師としてのつとめですから」

シュテファンがそう言った時、アディナがゆっくりと目を開けた。私は思わず立ち上がった。

「ご気分はいかがですか？」

「……だいじょうぶよ。ありがとう、シュテフ」

小さな手がさまよって、私は引き寄せられるようにその手を取った。

「カリン。ごめんなさい、心配かけて」

ほっとして気が緩むと、アディナも微笑んだ。こんな時なんと言えばいいんだろう。いつもならちゃんと出てくるのに、ふさわしい台詞が見つからない。

「アディナ様。ブローチをどうされました？」

珍しく、責めるような口調でシュテファンが言った。アディナの胸からは、確かにあのブローチが消えていた。

「どうしよう。落としたみたい……さっきまであったのに」

アディナは顔色を変えて、胸元を押さえながら視線をさまよわせ

た。

「ごめんなさい」

「いいえ、ご無事ならそれで充分です。戻りましょう。ユーリエが心配しています」

「うん……でも」

アディナは言いよんどんで私を見た。

「カトリーネさんはお帰りください。今日はお仕事をお願いしている日ではないはずです」

「カリンを叱らないで。あたしが行きたいって言ったの」

「アディナ様、私は彼女を責めてはいませんよ」

シュテファンは立ち上がり、アディナを縦に抱き直した。私は空っぽの籠を持ったまま、一歩下がった。

「それでは、失礼いたします」

慇懃にそう言い残して、シュテファンはさっさと行ってしまった。アディナが手を振っていた間は私も振り返したが、結局何も言えなかった。自分は役立たずで厄介者で、どうしようもない人間だというような気がした。もう、平気だ。アディナは行ってしまった。私は浮かべていた笑みを消した。

ただ笑っている、それだけのことがどれほど困難だったことか。

私はいつのまに演じることを忘れていたんだ。本当の心は固めた鎧の奥に沈めて、うまくやっていたはずなのに、気づいたら冷え切っていたはずの表面は溶けてぼろぼろになっていた。

うわべだけカトリーネになっているつもりで、いつから本当に怒ったり悲しんだりしていたんだろう。いつから自分自身の心で彼女に接していたんだろう。いつから——オレは笑えるようになってたんだ。

中身のない籠を見下ろしたら、悲しそうなアディナの顔がちらついていた。

余計なことをしたんだろうか。アディナが行きたがるだろうなんて都合のいい言い訳を考えて、本当はただ一緒にいたくて誘ったの

か。最後の思い出にたくて、自分のためにアディナを危険にさらしたのか。

どこからどこまでが素直な自分の気持ちだったのか、わからない。けど今、どうすればいいか、なにをしたいか、わかるはずだ。

さあ、走れ。

肩掛けの鞆から眼鏡を取り出してかけた。陽は傾き始めていた。

まだ終わらない祭りの喧噪の中へ、紛れ込んだらどこからか涼しい風が吹いた。

もうすぐ、夏が終わる。

第46話 八月 四赤の日（1）

石畳で拾った蝶のブローチは、誰かに踏みつけられたのか、金具がゆがんで壊れていた。もうくたくただったが、どうにか直してから眠った。

いつもの癖で早くに目が覚めたのはよかった。いつごろ出発するかを聞いていなかったたので、着替えてすぐ別荘に向かった。まだ居てくれと願いながら。

門の側にシュテファンの姿を見つけた時は複雑な気分になったが、アディナが帰っていない証拠だと思って安心した。

「おはようございます」

「……カトリーネさん。アディナ様は？」

「は？」

シュテファンは厳しい表情をしていた。

「…………ご存知ないのですね。では、私は急ぎますので」

らしくなく取り乱した様子のシュテファンが出て行くのを見送りながら、なにかが起ったことを理解した。彼を引き止めるべきか、いや、とりあえずもう少し話しやすそうな人間をつかまえよう。

門をくぐって扉の前に立つと、呼び鈴を鳴らすより先に勝手に開いた。

「大丈夫だから、ここで待つて——やあ、カリンじゃないか」

ノブを握っているのはレオだった。後ろにはユーリエもいる。馴れ馴れしく呼ばないでくださいなどと言いつ返している余裕はなかった。

「アディナ様がどうかしたんですか」

「ああ、うん、朝から姿が見えないんだよ。ダニエラが起こしに行った時にはもう、ベッドは空だったらしくてね」

まさか。

「――誘拐？」

頭の中に浮かんだ言葉を、そのまま口にしていた。

「かもしれないけど、荒らされた様子はないし門番も何も見なかったって言うてるんだよね」

「じゃあ」

「でも昨夜、外で変な物音がしていたんです。私が確かめに行っていればよかったんですわ。そうすればアディナ様は」

思い詰めた様子のユーリエとは対照的に、レオは悠然と構えていた。

「だから、まだそうと決まったわけじゃないって。きっと散歩でもしているんですよ。最近じゃ外に出るのが好きみたいだから」

レオはちらりとこちらを見て、ねえ先生、と同意を求めてきた。

「あの、昨日は申し訳ありませんでした。勝手に連れ出したりしてアディナ様の体調を……」

「今はそんなこと、いいんです、先生。それよりどこか心当たりはありませんか？」

「そうだ。そういうえば君、どうしてここに？」

ユーリエとレオの言葉が重なった。

「いえ、特には……あの、ブローチを持ってきたんです。昨日アディナ様が落としてしまったものを、見つけたので」

私はスカートのポケットから小さな蝶を取り出した。

「これは、レシリア様の……。まあ、わざわざありがとうございませう」

レオは夜の色の瞳を和ませ、そつと囁いた。

「優しいね、カリン。それはあの子の母親の形見だよ」

形見？

いや、アディナの母親は生きているんじゃないのか。だって

言っていたではないか、会いたいと。戻りたいと。あの、大鳥の巣で。

池のそばの岩に腰掛け、私の帽子をかぶっていたアディナの姿が脳裏に蘇った。ああ、そうか。

「……あの、私も探します。アディナ様が行きそうな場所を……いくつか思い出したので」

私はブローチを握りしめた。

「そう？　じゃあ頼むよ」

掠われたのならどうしようもないが、もしかして。もしかして、自分で姿を消したとしたら。門番にも見つからず出て行けたとしたら。その場所は一つしかない。

きつと、あそこだ。

ユーリエたちの見ている前で納屋に直行するわけにもいかないの
で、まずはアディナの部屋に行ってみた。人形のいない部屋はがらんとしていた。そうか、もう帰り支度を済ませてあるのか。

窓の側にはちゃんとウィーダが残っていて、私が近づくと一声鳴いた。

「おまえとも、お別れだな」

でもその前に、ちゃんとあの子を見つけてくるから。

くちばしをひと撫でして、踵を返した。人がいないことを確認してから庭へ入り、屋敷の裏へ回る。納屋の中は木箱が増えていたが、気にせず押しのけて地下へ降りた。

ランプを片手に、暗闇の一本道をできるだけ速く走った。こんなに長かっただろうか。こんなに出口は遠かっただろうか。たどり着いた時には喉が渇き、胸が痛いほどだったが、そのままの勢いで光の中に飛びだした。

彼女は、いた。池のすぐ側、あの時と同じ岩に腰掛けて、ぼんやりと空を見上げていた。その瞳はまるで天上の世界を探しているかのようだった。

「アディナ様……」

ぶらぶらさせていた足を止め、アディナはゆっくりと振り返った。
「カリン」

「こんなところにいらっしやっただんですね。皆心配して探していますよ」

「そうなの？ ごめんなさい。すぐに帰るつもりだったんだけど」

アディナはひよいと岩から降りて、私の傍までやってきた。

「考え事をしていたら、時間ってあつという間に過ぎるものなのね。でもカリンが迎えに来てくれて嬉しいわ。どうやったら出発までにもう一度会ってお別れが言えるかしらって思ってたのよ」

見上げてくるアディナの笑顔を、なぜかまっすぐ見つめることができなかった。胸を締め付けられるような気持ちになるから。そう、その笑顔はとても綺麗なのに、悲しかった。

「これを……、見つけたので、渡そうと思って持ってきたんです」
ポケットから取り出したブローチを、手のひらを広げて見せる。

「あ……。これ！ どこにあったの？ ありがとうカリン」

「どういたしまして」

アディナはさっそくブローチを胸につけた。どうしようか。なにもなかったように振る舞うこの子の努力を、砕いていいものだろうか。

「それ、お母様のものなんですって？」

「けどやっぱり話したかった。無理をしているのを見るのは辛かった。」

もう演じなくていいから、笑わないで。

「……うん、そうよ。お母様のだったの。いやだ、誰があなたに話したの？」

そんな風に笑わないで。

「これを持ってきたら、ユーリエがそう教えてくれました」

「そうなの……」

「それから、伯爵が……、それは形見だと」

アディナはこくりとうなずいて、胸のブローチを押さえた。

第47話 八月 四赤の日（2）

「病気だったの。光呪でも治せなくて、どんどん悪くなって……、あたし、毎日お母様の部屋へお見舞いに行ったわ。だけど」

小さな声がわななく。私は背を曲げて、彼女の顔をのぞき込むようにした。

「病気のお母様の側にいたら、あたしまでなにも食べられなくなつて……このままでは死んでしまうからって、お見舞いにも行けなくなつて、でも会わなくても同じ神殿の中にいるでしょう。それで……あたし、ダメだったの。どうしても毎日悲しくて苦しくて仕方なかったの。そしたら、ユーリエがここに連れてきてくれたのよ」
それでは、この子は母の死を待つためにここにいたのだ。

生まれ持った力のために、弱っていく母の側にいることを許されず、ここでただ終わりの日を待っていたのだ。

「あたし、苦しくはなくなつたけどやっぱり悲しかったの。元気になるうとはしたのよ。だけどどうしてもできなくて……」

まばたきをすると彼女の柔らかなまつげに涙の粒がついて、陽の光にきらきらと輝いた。

「あのね、はじめからわかつてたのよ。カリンはあたしに優しい人だって。だから……、カリンといるととっても楽だったの。遊んでくれてありがとう」

どうすればこの子の涙を止められるだろうかと思いながら、小さな頬を拭った。けれどあとからあとから涙があふれるので、赤く染まった頬の全体を濡らしてしまっただけだった。

「どうしてあたしのがうつるの？ カリン。おかしいわ」

逆じゃないの、とアディナが笑った。天使の手が私の頬に触れた。

いつの間にか、私まで涙を流していたのだ。

「私は……。これは、あなたがいけないんです」

泣くなんていつ以来だろう。涙を拭われながら、感情が伝染することは確かにあると思った。なにもおかしくはない。ただそれが人より強いだけなのだ、彼女は。

私は金の髪を撫で、それから、いつかそうしたように額を近づけた。

「あなたが悲しいから、悲しいだけです。でも、そろそろ泣くのはやめて、帰りましょうか？」

「うん」

いい返事だったが、涙が止まっても、私たちはしばらくそこにいた。戻つたらもう別れなければいけないことを知っていたから。ぐずぐずと手を繋いでそのへんを歩いて、色々なことを話した。一ヶ月も一緒にいて、たくさん話をしたはずなのに、まだまだ足りないという気がした。

たくさん生えている背の低い木、そのひとつの前で不意にアディナが立ち止まった。

「実がなってるわ。こんなところに、ほら」

アディナが葉を持ち上げると、確かに赤い実がぶらさがっていた。取って欲しいというのでねじって切り離し、渡した。

「綺麗……。宝石みたいね」

彼女の言葉に、なにかを感じた。せき止められていた水が一気にあふれ出したように、記憶が頭の中を駆けめぐった。

宝石みたい。鮮やかな赤い実を両手にくるむように持って、嬉しそうに笑った、やせこけた顔。ああ、そう、ちょうどこれと同じような赤で、あの実は——いや、違うそうではない似ているのではなく本当にこんな感じのまさにこの実だった。笑っていたのはカタリナ、あの子だ。あんな風に心から笑っている顔を見たのは最後だった。ちゃんと覚えている。

「食べられるかしら？」

そうだおかしい。はじめにここへ来た時、あんなにたくさんなっていた青い実が、熟しているのを一度も見なかった。葉に隠れたひとつだけが残されて、それ以外、きれいになくなっている。

誰かがここに来て、全部持って行つたのだ。あの通路はそのためにあつた。

「いけません」

とつさにアディナの手から実を払い落とした。そうだ、これだ。悪魔のように赤い実。名前はあの時も知らなかった。宿に泊まっていた貴族の人が、お礼につてたくさん置いていったらしいの。そう言つておばさんはジャムを作っていた。翌日の祭りでふるまうための料理だった。豆をむくのを手伝っていた私とカタリーナは、特別にとひとつずつ、その実をわけてもらつた。宝石みたい、とカタリーナは笑つた。甘くておいしい、と喜ぶので、自分の分もカタリーナに渡した。

だから私は、私は食^たべなかつた。

「なんてこと……」

「カリン？ どうしたの」

背中から黒いものがわきあがつて胸を押し潰していくような感じがした。

おばさんの煮詰めていた赤い実のジャムは、あの祭りの日、きつとみんなが食べた。カタリーナが倒れて、医者呼びに行つた、私以外は。

もしかして、いや、まさか。けれどそうだとしたら、それでは皆、死んだのではなく殺されたのではないか。

首元でなにかがぴりぴりと張りつめ、それが指先にまで伝染して震えた。吐きそうだ。許せない。

——お兄ちゃん、苦しいの、たすけて。

「苦しい……。体が重いわ、カリン」

私の手を強く握んだ指に、我に返る。アディナが青くなって私を見ている。なんてことだ。目の前のこの子のことを、忘れるなんて

怒りがすつと冷えた。それで胸に詰まったものがなくなるわけではなかったが、今すべき事を考えるだけの余裕はできた。

アディナの髪を撫でながら、まず落ち着かなければ、と思う。

ギルの言葉を思い出せ、さあ。できるはずだ。

「エルナン、これは訓練だよ。人を騙せるようになりなさい。そのためにはまずおまえ自身を騙しなさい。そんなに大変なことじゃないはずだ」

「自分が自分であることを忘れてごらん、そうして別人になりきるんだ。おまえが覚えなきゃいけない一番大切なことはね、感情をコントロールすることさ」

「自分をまるごと変えられるようになりなさい。そうすれば楽になれる」

常に他人を演じなければいけない状況に無理矢理立たされて、私はその方法を覚えた。はじめはなんの役にも立たないと思っていたけど、夢中で自分を取り繕って演技しているうちに、自然にできるようになった。あの人の言うとおり、思考まで塗りつぶすことができた。

目を閉じて、深呼吸。私はカトリーネ。カトリーネ・エルス・マクシウス。

残ってる心の鎧を総動員して、目を開ける。

絶望しようと樂觀しようと、世界は同じようにそこにある。

「……もう、大丈夫ですね？」

よし、震えてない。私はアディナの肩を叩いて微笑んだ。

「うん。だけど、カリンは」

「ちょっと嫌なことを思い出しただけ。平気です。それより急いで戻りましょう、ここは危険です」

閉ざされた場所で赤い実を栽培していた、その人物も目的も、少し考えればすぐにわかった。

許せない。こんなことでお金を儲けるなんて。

私は自分ではたき落とした実を拾ってポケットに入れた。これは

証拠になる。ギルに届けて、調べてもらおう。

第48話 八月 四赤の日(3)

アディナの手を引いて、地下道を戻った。

まったく、己の迂闊さ加減を呪いたくなる。どうして気づかなかったのだろう。納屋は新しく、赤茶の戸を覆い隠すように作られていた。怪しい男たちが庭で見つかったこともあった。大鳥の巣に何かあるかもしれないことくらい、予想できたはずなのに。

ギルの言う通りだ。探偵にはなれそうもない。

「……止まって」

出口が近づいたところで、私は声を低めてアディナに注意を促した。

「どうしたの？」

嫌な予感がする。

「私が先に行きます。ここで待っていてください」

ランプはアディナに預けて梯子を登りきり、納屋に出る。そこはしんと静まりかえっていた。いつもと同じように。

けれど、どうしようもない違和感が広がっている。

涼しい場所から出たばかりなのに、ぞくりと寒くなるような感覚に肌がひりついた。

アディナを追うときに乱暴に散らかした木箱が、隅に並べられている。これを戻した「誰か」は、地下への扉が開けられたことを知っていて、塞がなかった。ということは、向こうはこちらが戻ってくるのを待っていたのだ。そう、出口はここしかないのだから。

私は納屋の扉を覗んだ。

どうする。応戦するか。それとも。

「……カリン？」

下からアディナの心細そうな声がした。それと同時に扉が開く。男が一人、二人、三人と狭い中に踏み込んでくる。まるで酒場へ入るかのように無造作に歩いているが、浮かんでいる表情は友好的なものではなかった。

「ずいぶん小さいネズミだ」

はじめに入ってきた男が言った。敵は全部で五人。しかしこれだけとは限らない。そして、下にはアディナがいるのだ。

せっかく無力な少女に擬態していても、これでは油断を誘って勝ちを奪うのは難しい。

考える。あの土地を使っていたのは間違いなくスヴェンだ。スヴェンがアディナに手を出させるだろうか。

相手をしないでここを切り抜ける方法は――そうだ。

「あ、あなたたちは……」

意図的に喉の奥をせばめた。乾いた咳が出て、口元を抑える。

思い出せ。あの時、カタリーナはどんな表情で苦しんだ。どんな風に倒れた。

立て続けに咳き込むと自然に背が丸まった。

「……なんだ。どうした？」

「かじったんじゃないか」

苦しい。涙が出てくる。立っていらなくなって膝を折ると、誰かが袖をつかんだ。アディナだ。

「カリン、カリン、しっかりして」

私はすがりついてくる彼女の手を強く握った。

離れないで、アディナ。

震えながら前のめりに上体を倒し、それでも手だけは離さない。どうします？」

私たちはぐるりと囲まれた。伏せていてもそのくらいはわかる。喉が詰まってひゅうつと高い音がした。

「ここに置いてとくわけにいかねえだろ。連れて行け」

腕を掴まれ、引き起こされる。私はぐったりとしたまま、される

に任せた。

門番は私を見ても何も言わなかった。スヴェンが来てから置かれるようになった門番だ。当然、グルなのだろう。シュテファンあたりが通りかかってくれないかと願ったが、信心薄い私の願い事は叶った試しがない。

無造作に放り込まれたのは、荷馬車の中。引越しの荷物を運ぶ時などに使われる、鍵付きの荷台がつけられた二頭立てだ。

馬の嘶きの後、がくと世界が揺れだした。

もう、大丈夫だろうか。目を開けると、薄暗い中、アディナがこちらを見下ろしていた。少し前までは必死に私の名前を呼んだり、離しなさいと騒いだりしていたというのに、今はきよんとしている。

「……もつと心配そうな顔をしてください」

横になったまま小声で囁くと、また揺れて、頭を打った。ちらりと進行方向に目を向ける。やはり、ここから御者席は見えない。よし。

「あ、ごめんなさい。でも……」

「今はいいですよ」

体を起こしてにこりと笑ってみせると、アディナが勢いよく抱きついてきた。

「やつぱり！　だって、あたしちつとも苦しくないもの。変だと思っただわ」

「そうですね？　私は空咳というものがこんなに苦しいというのを、今日初めて知りました」

顔を近づけながら、小声で話す。車輪の音で多少かき消されるとはいえ、用心に越したことはない。

第49話 八月 四赤の日（4）

「どうして病気の振りをするの？」

「あそこで抵抗しても勝ち目はありませんでしたから。弱っている
と見せかけた方が油断させられますし、逃げるとき、有利です」

現に縄もかけられなかった。

私はスカートの下に隠してあるナイフのことを思った。壁がある
といつても、所詮は貼り合わせた板である。隙間から光が差し込む
くらいに安い作りの。これなら壊して逃げることもできるだろうか？

しかし、忍ばせてあるナイフは三本とも、切るより刺す方に向い
た投擲用のものだ。私はこれが得意で、かなり遠くの物でも仕留め
る自信があった――あの泥棒に卵を投げつけてやったように。

ああ、もっと色々用意しておけばよかった。だめ元でアディナの
前でこのナイフを出すか。いや、まだできることがあるはずだ。

それに、この馬車がどこまで行くのが気になる。荷台に積みま
れているのは私とアディナだけではなかった。木箱が重ね置かれてい
るのだ。

私は中の一つを開けてみた。小さな実がぎっしりと詰まっていた。

「これ、さっきの？」

「でしょうね」

閉め直して、私はむかつきをおさえながら座った。とにかく姿勢
を保っているのが難しかった。

「とりあえず、もう少し様子を見ましようか。アジトをつきとめら
れるかもしれませんが」

「そこに着いたとして、逃げられないくらい人がいっぱいいたらど
うするの？ 怪しい工場で、実験材料にされちゃうかもしれないわ」

まったくこの子はどんな本を読んでるんだか。

「たぶんそんなにたくさんはいません。こういう悪事をはたらく輩は、少人数でやろうとするものです。だって、多くなれば秘密がもれやすいし、分け前が減りますからね。……まあ、希望的観測ですけど」

いくつかの隙間から一番広いものを探して外を覗くと、樅の林が後ろ向きに流れていくのが見えた。

「あの人たち、どんな悪いことをしてるの？ カリンは知ってるの？ どうしてあたしたちつかまったの？」

「毒薬を製造して売っているんです。あの大鳥の巣で、そのための毒の実を栽培していた。だから、あそこから出てきた私たちに秘密を知られたと思っているんでしょうね」

「あの赤い実、毒だったの？」

「たぶん間違いないでしょう」

アディナが矢継ぎ早に質問するので、まるで授業をしているような錯覚におちいった。

「そうなの……。あぶなかったわ。あんなにおいしそうなのに、怖いよね」

アディナはしみじみと言って、それから真剣な目で私を見上げた。

「さっきの人、どこかで見たと思ったの。思い出したわ」

「さっきの？」

「納屋に来た男の人。前にレオが縛り上げた人よ、おうちを覗いてた」

私は顔を思い出して比較してみようとしたが、そもそも縛り上げられていた二人の顔はろくに見ていなかったことがわかってやめた。「保安局から逃げられたのかしら？」

「かもしれませんね。でも……だとすると余計少人数の可能性が高まってきましたよ。いったん足がついた人間をまた使っているということですから」

逃げたかもしくは釈放されたか。その後どうなったのか、調べて

おけばよかった。スヴェンも関与したかもしれない。

「おそらく、この毒を作らせていたのは、スヴェン・ボルマンです」
「おじさんが？ どうして」

「男爵家は数年前まで、莫大な借金を抱えていたらしいんです」

「…… お金が欲しくてしたってこと？」

「でしょうね」

アディナはスヴェンから贈られた服を複雑そうな目で見下ろした。
どこに連れて行かれるのか、そこからどうやって戻るか、私は頭
の中で計算を始めた。しばらく黙っていると、アディナが不安そう
にしているのに気づいた。

「大丈夫。あなたのことは、私が守ります」

安心させるためにやさしく背中を叩く。

どうしてこの子を守りたいと思ってしまうんだろう。

まっすぐだった黒い髪、母さん譲りの緑の目。素直で恐がりだっ
たカタリーナ。

どこも似てなんかないのに、ただ年が同じだけなのに、なぜこ
んなにも親身になってしまっただろう。

「うん……。ありがとう。でもカリンは平気なの？」

「向こうは私をただの家庭教師だと思っています。その隙をつくし
かないでしょうね」

「カリンってただの家庭教師じゃなかったの？」

晴れの日が続いていたせいか、車輪と馬蹄の巻き上げる土埃がひ
どく、荷台の中までももつていた。荷馬車は幾度か曲がり、屋敷か
らも町の中心部からも離れていった。

「ええ、実はそうなんです」

どうやら山をぐるりと迂回するようだ。私は頭の中に入っている
地図と風景を照らし合わせながら、位置をはかった。どうやら、屋
敷とは山を挟んで反対側に来ている。

ここもまだ、ボルマン男爵家の所有地だ。やはり首謀格はスヴェ
ンに違いない。

カレーラのことを思い出してまた沈もうとする心を懸命に引き上げる。やがて馬車が止まった。私はアディナをさがらせて、御者席から降りてきた男たちが回り込んでくるのを待った。

がたがたと音がするのは、車輪に木ぎれをかませているのだろう。それが止んで荷台の鍵が外され、開けられると、私は勢いよく男の喉を手で打った。間髪入れず、ひっくり返る男に驚いているもう一人に飛びかかり、鳩尾を殴ってから開いた後頭部に肘を入れる。二人だけか。

第50話 八の月 四赤の日(5)

「もういいですよ。降りてきてください」

手を差し伸べると、ぽかんと口を開け目も見開いたアディナがはじかれたように寄ってきた。

「すごいわ。やっぱりなにか魔法を使ってるの？ カリン」

「いいえ、訓練したんですよ」

両脇の下に手を入れて支えながらアディナを地面におろした。

「勉強は簡単でしたが、こちらは難しかったです」

「そう？ でも、とっても強いと思うけど」

「お褒めいただきありがとうございます」

私はアディナの手を握ったまま、馬車の陰からあたりを見回した。道の途切れたその先には一見なにもなかったが、草を踏み木立をぬって奥へと進むと、窪地に板壁の建物があった。ずいぶん新しそうだ。

鍵がかかっているどころか、戸口はわずかに開いていた。私は息を詰めて中の様子をうかがったが、なにひとつ動く様子はなかった。

「これ……、おうち、じゃないわよね。倉庫かしら」

逆らいがたいなにかに背を押され、そつと内部へと足を踏み入れる。建物の中は広く、アディナの言う通りどうやら倉庫のようだった。

つんと鼻をつく香りが充満している。

どこにも人の気配はない。残りの男たちはどこへ行ったのだろうか。まだ屋敷の近くをうろついているのだろうか。

「入って大丈夫なの？」

もちろん、そんなわけはないだろう。安全を第一に考えるなら、

山に入って隠れる方がいい。荷馬車を使って逃げ帰るという選択肢も考えられるが、あいにく馬を操る訓練はしたことがなく、自信がなかった。お嬢様学校などではなく普通の高等学院に入っていればそれを学ぶ機会もあったかもしれないが、今さらそんなことを言うたってどうしようもない。

「なにか、動かぬ証拠を持ち帰りたいんです。二度とこんなことができないように」

それは私のわがままだった。真実を知りたい。スヴェンにカレーのことを問いつめたい。結局のところ私を動かしていたのは、自分でもどうしようもないほどに強いその欲求だけだった。

なにをする場所であるのかはすぐに知れた。木箱の他に大樽や瓶が積まれていたからだ。

「お酒の臭いがするわね」

種を抜かれた赤い実がきれいに並べられているのを見ながら、私はうなずいた。

「保存がきくように加工していたんでしょね、ここで」

混成酒にして売っていたのか。とすると密売の噂は本当だったのだ。

赤い実で埋め尽くされたおぞましい木箱をのぞきこみながら、私はふとあることを思いついた。

「アディナ様、採光は生命力を集めるもの、でしたよね」

「そうよ」

「たとえば、この実からでも？」

「もう摘みであるから、どうかわからないけど。でもまだ光はあるわね、きつと」

「毒があっても平気ですか」

「たぶん関係ないわ、だって病人からだって光は集められるのよ。」

……もちろん、普通はしないけど」

アディナの胸元の石は、ハーブに光を使ったために輝きをほとんど失っていた。

「ためしてみる？」

「ええ、全部だめにしてやってください」

「じゃあ、ハーブ園の時みたいに、あたしのこと支えていてね、カリン」

冷命石を握り、片手は空にかざして、アディナは呼吸を整えた。

私は彼女の肩に手を置いてそれを見守っていた。

そういえば採光を見るのはじめてだった。水面に映った像が波に揺らぐように、眼前の世界がおののき、乾いていった。

私は思わず目を伏せた。

酒の臭いのせいか、酔ったような気分になる。目を開けるともう終わっていた。棚に並べられたものも箱の中に詰まったものも、同様にしなびている。

「どう？ うまくできたと思うんだけど」

アディナが私のほうに向き直り、そして表情を変えた。

「……うしろ！」

私は手に取っていた実を放り出し、とっさにアディナを抱えてしやがんだ。

「ガキが。ここぞなにしてる」

ひび割れた声が鳴る。肩越しに振り返る。男が二人、いや三人。

また一人、入ってくる。これで四人。

納屋で囲まれた時とたいして変わらない状況になってしまったが、あそこよりは広く障害物が多いのが救いだろうか。

「本当にこいつらにやられたんですかね？」

「他にいねえだろうが。それともあいつらが仲良く滑って転んだとでも言うのか」

どうする。無力な振りをするか、開き直るか。もう保安局に通報したとでも言ってみるか、それとも先手必勝、打って出るか――

「さあ、お嬢ちゃんたち、動かない方が身のためだぜ」

アディナが私の腕を強く掴んでいた。

そうだ、私がしっかりしていないと、アディナはまた悪意にあて

られて倒れてしまうだろう。私は近づいてくる男を睨んだ。一番体の大きな、がっしりとした男だった。果たして、勝ち目があるかどうか。と、私の腕からすりぬけて、アディナが駆けた。

「アディナ様！」

「動くなと言ったろうが」

あつという間に捕まったアディナは、男に腕を掴まれてもがいていた。私は腰を落とし、忍ばせていたナイフに手を伸ばそうとした。「よさないか！ その方に手を触れてはいかん。天使様だぞ！」

駆け込んできたのはスヴェンだった。

「おじさん」

アディナは明らかにほっとした様子で、スヴェンを見た。スヴェンは猟銃をさげ、いつもは撫でつけている髪を乱して、ひきつった様子で言った。

「本当にこちらにおられるとは……」

天使だって？ と、男たちは顔を見合わせている。信じられないのも無理はない。私はその隙にナイフを三本引き抜いた。

第51話 八月 四赤の日（6）

「おじさん！ 毒の実を育てていたって本当なの？ たくさんの人を病気にしたの？」

「それは……」

スヴェンは怯んだ。私はナイフを持った手を背に隠して立った。皆がアディナに注目している今のうちに、不意をつくべきだろうか。いや――

「そんなことは、決して。なにか勘違いをなさっているのではありませんかな」

アディナのペンダントがじわりと光を放っている。私はとっさに声を出した。

「あなたはお金を使いすぎ、家の財産に手をつけても足りず、あの別荘も手放す寸前でしたね。それが今では使い放題に有り余っている。どうやってそれほどの大金を手に入れたんです？」

一同の視線が私に集まる。

思っていたほど胸は痛まなかった。高揚もしなかった。私に残された全てを奪っていった張本人を前にして、ただ淡々と問うた。

「なぜカレラだったのですか。偶然ですか、ヴァン神に逆らう者たちの住む場所だったからですか。あなたのしたことは……」

「そうか、やはりきみは俺を調べていたんだな。そのガキもグルかなにが家庭教師だ。なにが天使だ！ 大人をからかいやがって。俺を騙してたんだな。姉さんもか！ 裏切ったんだ」

銃を振り回しながらスヴェンは言った。

「おまえたち！ このガキ共を始末しろ」

私は腕を上げ、一番近くにいた男にナイフを投げつけると同時に

アディナの方へ走った。私がたどり着くより早く、アディナは大男の腕から抜け出していた。

彼は口を押さえてよろめき、這いつくばる。採光に使われたに違いない。

想像通りだ。救済の天使には、その逆のことも行える。ただ、教団側が喧伝しないだけだ。

私はアディナの手をつかむとすぐ、オークの大樽を転がし、木箱の陰に駆けた。直後に銃声。アディナがびくりと体をすくめる。

樽の一つに穴が開いたのだろう。酒の臭いがますますきつくなつた。

ナイフは無事に命中したので、相手にしなければならぬのはあと三人。うち一人が銃を持っている。

こちらの投げナイフはあと二本。接近戦に持ち込んで、一人はナイフ無しで仕留めたいところだ。けれど、アディナをかばいながら、どうやって？ うまくいく見込みは少ないが、とりあえず出口を指すしかない。

酒瓶を片手に襲いかかってきた男の一撃をかわし、足をかけようとしたが失敗した。

「アディナ、外へ！」

アディナは苦しそうに胸を押さえながらも私の声に従おうとした。もう影響が出ている。早くしないと。くそ、スカートが動きづらい。アディナを追いかけようとした男に背後からナイフを投げ、これであと二人。酒瓶を持った男は執拗に殴りかかってくる。隙はあるのだが、力任せな動きは対処しづらい。しかも、こちらは銃でも狙われているのだ。

ナイフはできれば銃を持っているスヴェンを止めるのに使いたい。この男はなんとかこのまま倒さなければ。だがそう思った次の瞬間、勢い余ったのか、男の手から瓶が飛び、私の手に当たってナイフを見当違いの方向にはじいた。男がうるたえたその拍子に、私は懷に飛び込み、男の腹に肘を思い切りめり込ませた。

男が仰向けに倒れる。あと一人。

私は板張りの床に転がったナイフを拾いに走った。
もう少し。届け！

「そこまでだ」

私の目の前で、ナイフが革靴に踏みつけられた。

スヴェンが私の頭に銃口を向けていた。

「おまえを雇っているのは誰だ。ギルベルト・マクシウスか。革命家取りが、凝った真似をしてくれる」

撃たないのは私から情報を引き出そうとしているからだろう。

さて、どうする。もうナイフはない。出口はスヴェンの向こうにある。動けば撃たれるだろうし、動かなくともいずれ口を封じられる。挑発すれば逆上するかもしれない。かといって黙ったままでも不興をかうだろう。

「勘違いをしておられるようですが、私の後見人は革命家ではありません」

私は膝をついたままの姿勢で言った。落ち着け、エルナン。今のうちに呼吸を整えて、隙を探すんだ。

「デীরリアス難民の出だろうが。奴等はみんな逆徒じゃないか。自分の国を捨てて逃げたんだからな」

ひどい偏見だ。私はつい辛辣に言い返すところだったが、それをさえぎったのはアディナだった。私の前に立ちほだかり、両腕をひるげてかばうようにする。

なんで逃げてないんだ、馬鹿。

「もうやめて、おじさん」

「退け」

スヴェンは短く言いはなった。

「あたしは第四十八番天使、アディナよ。そのあたしに銃を向けるの？」

アディナの声は堂々としていた。私から見えるのは後ろ姿だけで、表情はわからない。

「もうそんな話を信じるものか。ガキだからと言って容赦はしないぞ」

言葉とは裏腹に、スヴェンの両手で支えられた猟銃は小刻みに震え、狙いは定まっていなかった。

「うつん、わかるわ。迷っているでしょう。——あなたは信じているはずよ」

アディナが一步踏み出し、スヴェンはつられたように一步下がった。

引き金が引かれたら、アディナを抱えて伏せるしかない。だけども間に合うだろうか、いや、そんなの無理に決まってるだろ。引こうとする前にそうしなきゃいけない。

「動くな！」

私は固唾をのんでスヴェンの様子を見つめていた。スヴェンは撃つだろうか。それとも銃をおろすだろうか。祈るような気持ちになりながら、すぐ動けるように体中を緊張させていた。

アディナがまた一步、進もうとする。

「やめろ——」

刹那、耳を裂く乾いた音が響き渡った。

アディナが声もなく私の方へ倒れ込んだ。膝の上に金の髪が広がり落ちた。

衝撃で私の胸は深く痛み、呼吸は止まり、なにも考えられなくなった。ただ目の前に映し出されるものだけを見ていた。

第52話 八の月 四赤の日（7）

スヴェンの手から銃が落ちた。その体がゆっくりと力を失って崩れ、地に伏せる。赤いものが床へ流れ出す。

そして彼の陰に隠れていた戸口の方向から、背に光を受けて、ひとりの男が歩いてきた。手には黒光りするいびつな形のなにか。髪はココア色、瞳は夜のような黒で、襟飾りのついたシャツを着ている。唇にはわずかにのぞく微笑み、そこからこぼれだした言葉は、いつものふざけた調子の、明るい――

「やあ、よかった、間に合ったようだね」

レオポルト・グラフ・フォン・フラウンホーファーだ。

私はその声でやっと正気に返った。アディナが撃たれて、神がそれを救いに来たかのように幻想していた。

神だって？ 馬鹿馬鹿しい。

アディナは傷ひとつ負っていなかった。ただぐったりと気を失っているだけだ。

私は力ないその体を抱きしめた。今になって、指先が震えだしていた。

「これ、珍しいだろ？ 新しいモデルなんだよ。小型化して精度も上がってる」

レオが持っているのは、どうやら銃だ。さっきのは、まぎれもない銃声だった。撃たれたのは、スヴェン。

私の目の前で倒れ伏している、その男。

「……死んで……」

ワインの臭いに血液のそれが混じりはじめた。

「もちろん、殺すつもりで撃ったからね」

「どうして！」

床に赤い色を広げている彼のどこかズレた親切や、ユーリエの心配そうな顔がぐるぐると脳裏を駆けめぐった。なにか大きなものを失ってしまったという気がした。

「どうしてって、もちろん、君たちを救うためにさ。間一髪だったろう？　感謝のキスをくれないのかい」

「かわいそう？　いや、この男はたくさん殺した。そんな考えはきつと間違っているのだ。思い出せ、あの日を。焼け落ちた村を。」

だが憎しみを呼び起こそうとしても、わき起こるのは苦い思いだけだった。

「こ、殺すことはなかったでしょう。なにも……」

アディナをそつと降ろし、彼の心臓が完全に止まってしまったのかどうか、確かめようと手を伸ばした。私は、甘いのだろうか。おかしいのだろうか。ただ混乱しているのだろうか。

許せない、思っていたはずだ。償わせたかったのか、謝ってほしかったのか、いや、もしかして――

私は、私も、スヴェンが後悔して銃をおろすのだと信じていたんだろうか。

「即死だよ。じゃないとおチビちゃんが苦しむじゃないか。シュテフから聞いたんだろう？」

私のナイフを腕に受けた男が、うめいて体を起こした。そちらに素早く銃を向けて、レオは平然と続けた。

「そこ、生きていたなら口ひとつ動かすな――いくらこんな悪党で、たいして親密でなかったとは言っても、目の前で大怪我されちゃひどい影響を受けるんだよ。気絶で済んだのは痛みが一瞬だったからさ」

足音がして、私は戸口に目をやった。入ってきたのはシュテファンだった。彼はいつも通りの無表情だったが、私はなぜかほっとした。

「シュテフ。遅いじゃないか」

振り返りもせずレオが言う。それに答えながら、シュテファンはアディナの傍に膝をついた。

「申し訳ありません。途中、目を覚ましたもので、捕縛に時間がかかりました」

どうやら、私が荷馬車のところに転がしてきた二人のことだ。

「なぜここがわかったんです？」

今さらその疑問を思いついて口にする、シュテファンが少し柔らかい表情を浮かべた気がした。

「あなたのお陰です。レシリア様のブローチは、天使が身につけるとその居場所を示すんですよ」

「そう。君の親切が、君とおチビちゃんの命を救ったというわけさ」ということは、昨日の祭りで比較的早くシュテファンが駆けつけてくれたのも、途中までアディナがブローチをつけていたせいなのか。

この小さなブローチにそんなことができるとは思えず、私はまじまじと蝶の羽を見つめた。

「あれ？ どうしちゃったのこれ。しわしわになってるじゃない」「不意にレオが声をあげた。見ると、木箱を覗き込んでいる。

「ああ。それはアディナ様が、光呪で」

「……これだけの量をいっぺんにか。大したもんだ」

レオは頭をかいて、それから視線をさまよわせた。私もつられて周囲を見た。倒れている男たちは動き出さなかったし、腕をやられた男は青ざめながら傷口を押さえているだけだ。

「で、これはなんなの？」

「名前はわかりませんが、毒があります。この秘密を知られたと思って、スヴェンは私たちを……」

どこかにひっかかりを感じた。

それが何か、考えている余裕はなかった。外から人の呼び合う声がしたからだ。

私は思わず身構えたが、レオはのんびりと言った。

「おや、保安局もやつと来たみたいだね。事情の説明は僕がするから、シュテフ、おチビちゃんを連れてつてくれ。これ以上ここにいるのはまずい。カリンは」

シュテファンがそつとアディナの額を撫で——きつと顔にかかった前髪でも払ってやったのだろう——その体を軽く抱き上げる。金の髪がリボンと一緒になつて揺れた。

「アディナ様が心配だろ。一緒に行つていいよ。詳しい話は後で」
レオは私の心を読んだかのように笑った。役所に連れて行かれて調べを受けたりするのも困るので、私は素直に彼の言葉に従うことにした。

第53話 八月 四黄の日(1)

その後のことは、全て私の手の届かないところで運んだ。

レオは祭りを決行させた時と同じように、保安局へ交渉に出かけて、あつという間に話をまとめてしまった。権力と財力があれば多少のことはまかり通るものらしい。

アディナと私ははじめからあの場にいなかったことになり、天使がケルステンに来ていたことは完全に伏せられた。男爵家の別荘には捜査の手が入り、保安局は残された書類などを通じてスヴェンの罪状を追及していくこととなった。

私が武器を持っていたことや、大鳥の巢に出入りしていたことなどについて怪しまれるのでは——と思って色々な言い訳を考えたのに、レオは私の「たまたま」とか「偶然」とかいう言葉の多めに入った説明を「へえーそうなんだ」とあつさり聞き入れて、「そんなことより、命を救ってあげたんだから君は僕とデートすべきだよね？」などのたまったものだ。

もちろん、私はその申し入れを丁重にお断りした。

思った通りだったな、とギルは複雑そうに言った。予想があつたことは嬉しいが、喜んでいられるような話でもないというところだろうか。

「毒を買った人間がそれぞれの目的で使用していたから、各地のカレー病の流行には一貫した意図が見えてこなかったというわけだ。やっとわかったよ。はじめ、カレーラだけに発生したのは、たぶん

実験だったんだろうな」

ギルは私がカレーラの生き残りであると知った時から、私に興味を持ち、カレーラ病が発生した時の状況を聞いてきた。

カレーラでのことを思い出すのは嫌だったが、必要なことだと説得されて、教えることになった。封印していた記憶をたぐり寄せるのは苦しく、いつも話せるのは少しだけだった。ギルは辛抱強く聞いてくれた。なぜ私だけが生き残ったのか、なぜ突然に広まったのか、原因は何なのか、彼なりに調べようとしてくれた。

人を信じてみてもいいかもしれないと、思ったのは久しぶりだった。私は彼の勧めにしたがって、テニエスで暮らすことを選んだ。戻ってもなにもないことを考えれば、どこにいても一緒だという気がしたし、また学校に通えるというのは素直に嬉しかった。

ギルは私を強くしてくれた。肉体的にも、精神的にも。——いや、騙されて女学院の試験を受けさせられた時にはさすがにアリアーガに帰りたいと思ったが。

「……となると、だ。伝染病を装うのではなく、個人に対してもこれは使われていた可能性があるな。ちよつとさかのぼって、呼吸不全で急死した人間のリストでも作ってみたら、なにかわかるかもしれない。うん」

ギルは探究心をくすぐられたらしく、なにかを思いついた時のいつもの癖で、部屋をぐるぐると歩き回りはじめた。きっと本社に戻ったら資料をひっくり返して調べだすことだろう。

「私も気づいたことを言っていいますか？」

「うん。発表したまえ、カトリーネくん」

ギルは足を止め、偉そうに腕を組んでみせた。

「ハーブ園のことなんですけど、やっぱり枯らしたのはアディナではないと思うんです。アディナが無意識に光を集めたとしても、庭のバラはともかく、樅の林を飛び越えてハーブ園からというのはおかしいでしょう。距離的に」

「まあ、そうかもな。じゃあ、やっぱり悪魔がいたっていうのかい」

「いえ、たぶん、スヴェンが毒を流したんです」

ハーブが枯れる前日、私はスヴェンを見ていた。水車小屋の前で。
「なんのために？」

……そこまでは考えてない。

「ええと。悪魔が出没するという噂を決定的にしたかったから、とか」

「そうだったとして何の得があるんだ？」

「すみません、思いつきでした。よくわかりません」

私はバランスの悪い椅子をわざと前後に揺らしながら言った。この椅子を使うことももうなくなるんだな。

「騒ぎを起こしてなにかから目を逸らそうとしたのか？ うーん、難しいな。僕も考えておこう」

ギルはまた足を動かしはじめた。

「天使についてはいろいろわかったし、今度は悪魔についても調べたいな。しかし、さすがにエインズワースに渡るのは難しいだろうなあ……」

また無茶な計画を立て始めていることを察して、私は別の話を振った。

「そういえば私、外つ国訪問記の一卷を読破しました。アディナ様に貸してもらったので」

「ほう、それはまた高貴な愛読者がいたもんだ。で、どうだった？」

「あなたは嘘を書きすぎます。それに想像以上の気持ち悪さでした」
そして自分も客観的に見ればかなり気持ち悪いだろうと感じてうんざりした。あと一年、お嬢様方には絶対ばれないように気をつけよう。

「……でも。来年卒業したら、私も旅に連れて行ってください。できれば、エインズワースよりは安全そうなところで」

「いいよ」

ギルはあっさりと承諾してくれた。軽い気持ちで言ってくれたのかもしれないが、私はこの返事をしっかり記憶した。

スヴェンが死んでから二日後、私はオルデンベルクへと発つことになった。新学年の始業に間に合わせるには、ほとんどぎりぎりの日程だ。

慌ただしく旅支度をしていると、ナネツテがお客さんですよと私を呼んだ。シュテファンに連れられてアディナがやってきたのだ。

「来てくださったんですか？　こちらからご挨拶に伺おうと思っていたんですが」

「いえ、お忙しいだろうと思ひまして。それに、あの別荘の方は今、ごたついていますから」

直前までスヴェンの心に触れようとしていたせいか、アディナは一昼夜目覚めず、意識が戻ってからもしばらくは口もきけない状態だった。

心配していたのだが、もうすっかり元気そうだ。元気そう、というのは健康状態のことで、精神的な面ではまだ少し時間がかかるのだろう。アディナは疲れた顔で、それでも笑みらしきものを浮かべていた。

「あたしも明日帰ることになったわ。でもユーリエはしばらくここに残るんですって。お父様が来て、お葬式をして、これからのことを決めなくちゃいけないからって」

アディナはいつもより地味な服を着ていた。腕にもリボンはない。つた。

「谷底の木は焼かれるそうです。美しい場所なのに、もったいないです」

「ああ……。そうでしょうね」

これでもう、あの病が流行することはないだろうか。

「そうだ。ばたばたしてますけどお茶くらいなら出せますから、こちへ」

「いえ。あまり長くお邪魔してはご迷惑でしょうから」

シュテファンは、相も変わらずそっけない。

「あ、じゃあちょっと待ってください。渡そうと思っていたものが」
私はいったん部屋に引き返して、机から本を取ってきた。

「これ、ありがとうございます。返すのが遅くなってしまいましたけど」

外つ国訪問記を受け取りながら、アディナは言った。

「ああ、そういえば貸したままだったわね。ねえ、どうだった？」

「とても興味深かったですよ。私も、リンドブラードの冬を見てみたいです」

「でしょう？　ちゃんと読んだらきっとカリンも気に入ってくれる
と思ったわ。フィオナって、きっと素敵な老婦人なんでしょうね」

「だらしないただのおっさんだと知ったら幻滅するだろうな。黙っておこう。」

第54話 八月 四黄の日(2)

「じゃあシュテフ、これを馬車に持って行って、かわりに連れてきて」

アディナに本を渡されて、シュテファンは出て行った。アディナは私の袖をつかまえ、背伸びをして囁いた。

「カリンって本当は何者なの？ 正義の味方？ それともやっぱり魔法使い？」

「……秘密です」

「フリーーネ女学院の生徒っていうのは嘘なの？」

「いいえ、本当ですよ」

「よかった。じゃあ手紙はちゃんと届くのね」

絶対返事を書いてね、とアディナは念を押した。

「ええ。綴りが間違っていたら教えてさしあげます」

「もう！」

そこへシュテファンが戻ってきた。手には鳥籠を提げている。ウィーダまで見送りに来てくれたのか。

「ありがとうシュテフ。あのね、カリン、お願いがあるの」

「なんですか？」

シュテファンから鳥籠を受け取ったアディナは、それを私の方へ差し出した。

「ウィーダを飛べるようにしてあげて、前言っていたみたいに。そして自由にしてあげてほしいの。カリンならできる？」

「……それは、たぶん。でも……、いいんですか」

アディナの目に迷いはなかった。

「うん。いいの」

「わかりました。お任せください」

私は鳥籠を預かった。ウィーダは揺れに驚いて羽をばたつかせた。

「ありがとうございます」

「いい子だね。さよなら」

アディナはウィーダのくちばしをつついて、それから私を手招いた。なにか言いたいことでもあるのかとしゃがむと、彼女は私の頬にキスをした。

「……あのね、あたし、あなたのことが大好きよ」

まるでとっておきの秘密を打ち明けるかのような、真面目な表情だった。私は溜め息をつきたいような、笑いたいような泣きたいような、変な気持ちになって、アディナの頭をくしゃくしゃに撫でた。「ありがとうございます。私もですよ」

アディナはくすぐったそうに笑って、逃げるように離れた。

「また会える？」

おそらくそれはかなわないだろう。水の神殿に住む天使に、一市民が対面を望むことなど許されない。

これが最後だ。

「ええ、きつと」

けれどそれは言わなかった。

アディナはうなずいて、そして、じゃあまたねと手を振った。

「お元気で」

シユテファンに手を引かれ、アディナは馬車に乗り込む。私も外に出て二人を見送った。馬車が角を曲がっても、音が聞こえなくなっても、まだそこに立っていた。

姿が見えなくなったただで、あの子がもうこの世界のどこにもいなくなったような気がした。

まるで、この夏の全てが幻だったみたい。

夢の中にいるような気持ちで玄関ホールに戻ると、ウィーダが鳴

いて出迎えた。そうだ、まだおまえがいたな。

指を差し込んでやると、さっそくつつきにきた。

「痛いぞ、ウィーダ」

文句を言いながらも、指はそのままにした。きっとこいつも寂しいだろうから。

「ただいま」

振り返ると、ギルがそこにいた。

「おかえりなさい」

そういえば、昨晚ようやく仕上げた原稿を出しに行っていたのだっけ。

「どうしたんだ、これ」

「ウィーダです」

それはまったく質問の答えになっていなかったが、ギルはそれで納得したように籠の前に座り、おもしろそうに眺めた。

「置き土産か。これから出発するっていうのに、荷物を増やしてどうするんだ？」

「……送る荷物を増やしますから」

ギルが指を差し入れると、ウィーダは嫌がって逃げた。

「ははは、人見知りするんだな。おまえみたいだ」

「いじめないでくださいよ」

籠を動かしてギルから遠ざける。ギルは立ち上がってそして、なぜか私の頭をぽんと叩いた。

「なんですか」

「元気を出せ」

まったくもう。

私は鼻で深く呼吸した。引き結んだ唇が震えた。ギルはしつこく頭を叩いた。

「大丈夫です。——それでも、私は元気なんですよ」

声は震えなかったので安心した。泣くのはアディナの前だけでたくさんだ。かつこ悪い。

「今までは死んでいるのと同じでした。でも今は、素直に悲しいと感じることができんです」

だから大丈夫だ。もう大丈夫。無理に昔のことを忘れようとすることも、幸福に生きる人間を妬むことも、夜の空白に怯えることも、しなくていい。

「感謝しています。あなたは私が私であることを忘れさせてくれた。その方法を教えてくれた。だから、私はようやく過去の私と向き合うことができるようになったと思います」

「そうか。よし」

ギルはとどめに私の背中を強く叩いた。ちよつとだけよろめいたが、なんとか踏みとどまる。

「じゃあ、支度支度。今日中にアイスラーを抜けるぞ」

「はい」

私は無理矢理に笑った。そうすることで、少しだけ楽になった。

聖歴二六年、八月、四黄の日。

私は馬車に乗ってケルステンを離れた。まだ休みが残っていたとしても、その日、私の中では確かにひとつの季節が終わったのだった。

遠ざかっていく町に、私は永遠の別れの言葉を呟いた。

「さようなら、強がりのお嬢さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3855o/>

鏡の中の天使

2010年11月26日09時10分発行